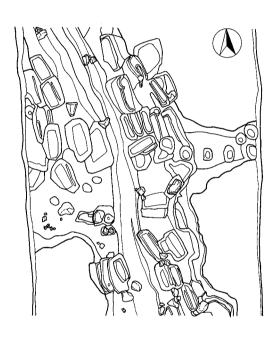
大屋敷遺跡III

1995

前橋市埋蔵文化財発掘調查団

大屋敷遺跡III

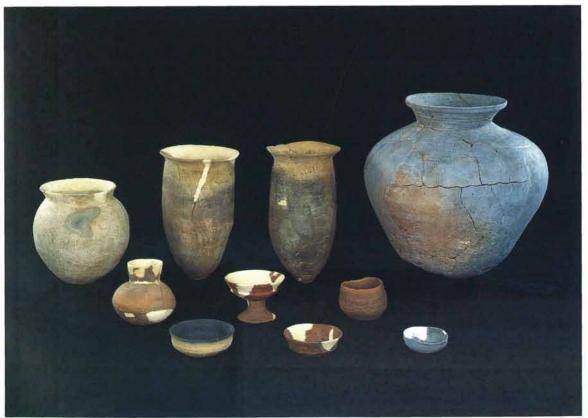


電構築材採掘坑および堰状遺構 (W-10号溝址)

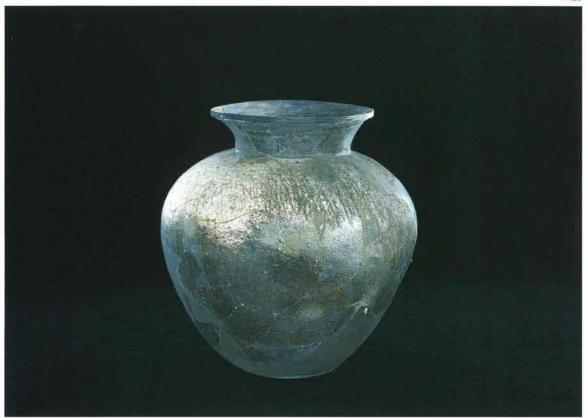
前橋市埋蔵文化財発掘調查団



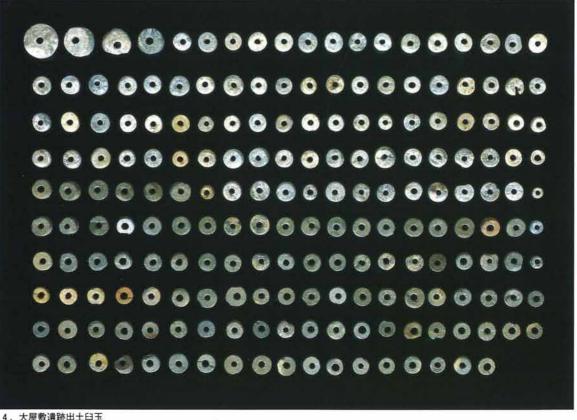
1. 電構築材採掘坑



2. 大屋敷遺跡出土土器 (古墳時代後期)



3. 大屋敷遺跡 D-65号土坑出土須恵器大甕



4. 大屋敷遺跡出土臼玉

群馬県前橋市は、北に関東平野を一望できる雄大な赤城山をいだき、西に榛 名山を仰ぎ、坂東太郎として名高い利根川や詩情豊かな広瀬川の清流が市街地 を貫流する、水と緑にあふれた美しい県都であります。

遠く古墳文化の時代には東国の中心とも言える文化を築き、続く律令政治の時代に入ると元総社に上野国府が置かれ、山王廃寺、国分二寺が立ち並ぶ一大政治文化圏が形成されました。さらに近世では、利根川をはさんで前橋城と総社城が築城され、近代に至っては生糸の主要生産地として繁栄を生み出してきたように、前橋には歴史が織り成した様々な情景が満ちています。

大屋敷遺跡が所在する総社地区では、近年、都市基盤整備の必要性が高まり、 土地区画整理が実施されてきております。それに伴い、この地区が古代上野国 の中心地域であったと推定されることから、確認調査の結果協議により、平成 4年度より開発予定地の道水路部分を中心として事前の発掘調査を実施してき ました。本年度は第3年次にあたります。

本年度は、既存道路の拡幅箇所の調査を実施しました。限られた範囲の調査 でありましたが、住居跡・溝跡・さらには竃石の採取場跡等が検出され、貴重 な資料を得ることができました。

最後になりましたが、このたびの調査では前橋市大屋敷地区土地区画整理組合の方々、前橋市都市計画課の担当者及び隣接住民の方々、さらに例年になく暑かった夏の中の発掘調査や整理作業に従事していただきました作業員の方々の深い御理解と御協力を得ましたことに心より御礼申し上げます。

本報告書が総社地区の歴史を解明していく上で、少しでも参考になれば幸い に存じます。

平成7年3月

前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団 長 大 谷 輝 治

例 言

- 1. 本書は、前橋市大屋敷地区土地区画整理事業に伴う大屋敷遺跡Ⅲ発掘調査報告書である。
- 2. 遺跡は、群馬県前橋市総社町大字総社1881-1番地ほかに所在する。
- 3. 調査は、前橋市埋蔵文化財発掘調査団 団長 大谷輝治が、前橋市大屋敷地区土地区画整理組合 代表者 大山栄一と委託契約を締結し実施した。

調査担当および調査期間は以下の通りである。

発掘・整理担当者 大山知久・坂口好孝(前橋市埋蔵文化財発掘調査団調査係)

発掘調査期間 平成6年4月25日~平成6年10月31日

整理・報告書作成期間 平成6年11月1日~平成7年3月24日

- 4. 本書の原稿執筆・編集は大山・坂口が行った。整理作業をはじめ図版作成には、石原義夫・岩木 操・岸フクエ・住谷文彦・渡木秋子・湯浅たま江・湯浅道子・赤城美代子・栗岡エミ子・岩田敏子・生形かほる・大澤まさ江・大塚美智子・鬼塚成子・佐野貴恵子・柴崎まさ子・神保千代子・戸丸澄江・船津明美・松田富美子の協力があった。
- 5. 下記の専門的分野については、次の機関ならびに方々のお世話になった。(敬称略)

瓦 : 木津博明(財団 群馬県埋蔵文化財調査事業団)

鉄 器:杉山秀宏(ğd 群馬県埋蔵文化財調査事業団)

6. 発掘調査で出土した遺物は、当調査団より前橋市教育委員会に保管責任を依頼し、前橋市教育委員会文化財保護課で保管されている。

凡

- 1. 挿図中に使用した北は座標北である。
- 2. 挿図に建設省国土地理院発行の1/20万地形図(長野・宇都宮)と1/2.5万地形図(前橋)を使用した。
- 3. 本遺跡の略称は6A60である。
- 4. 各遺構及び遺構施設の略称は次のとおりである。

H…古墳・奈良・平安時代の住居址 D…土坑 W…溝址 P…柱穴

5. 遺構・遺物の実測図の縮尺は次のとおりである。

遺構 住居址·土坑…1/60 竃断面図…1/30 溝址…1/120 溝址断面図…1/60 竃構築材採掘坑…1/40 全体図…1/250·1/500

遺物 土器…1/3·1/4·1/6 鉄器…1/3 石製模造品…1/2 臼玉…2/3 石器·石製品…1/3·2/3 瓦…1/4

6. スクリーントーンの使用は次のとおりである。

遺構平面図 粘土…斑

遺構断面図 火山灰…濃点、構築面…斜線

遺物実測図 施釉範囲…あられ、黒色処理…網、炭化物(スス付着など)…斑 須恵器断面…黒塗り、灰釉陶器断面…濃点、擦痕…淡点

— 目 次 —

		序・	••••	•••••	•••••	••••		i
Ι	調	査に	至	る組	全緯			1
II	遺』	跡の信	立 置	とり	景境			
		1	遺	跡(ひ 立	地		1
		2	歴	史的	的環	境	1	1
Ш	調	査	の	経	過			
		1	調	査	方	針		5
		2	調	查	経	過		6
IV,	層				序	••••		7
V	遺	構	ح	遺	物			
		1	住	J	居	址		8
		2	竃	構築	才採打	屈坑		17
		3	溝			址		23
		4	土			坑		24
		5	縄	文時(弋のi	遺物		25
		6	石	製品	模览	生品		26
VI	ま				め			
		1	竃		才採扎	屈坑(について	29
		2					ト列について	
		3	中	世の類	景濠に	こつり	V17	32

図 版

口絵	1 竃構築材採掘坑	3	D-65号土坑出土須恵器大甕	
	2 大屋敷遺跡出土土器(古墳時代後期)	4	大屋敷遺跡出土臼玉	
PL. 1		10	H-132~139号住居址出土の土器	
2		11	H-139~165号住居址出土の土器	
3		12	H-156~171号住居址出土の土器	
4		13	H-173~187号住居址,	
5	住居址(H-148, 150, 152, 153, 154, 155, 156)		₩-10~12号溝址出土の土器、鉄器	
6	住居址(H-157, 158, 162, 165)	14	鉄器、石製模造品	
7	住居址(H-165, 166, 167, 168)	15	瓦、縄文式土器	
8	住居址(H-173,180,181,182,183)、溝址	16	縄文式土器、石器・石製品	
9	溝址、土坑、記念写真			
	図			
甲	[A] [頁			頁
Fig. 1	大屋敷遺跡の位置 vi	24	H - 146·148, 149·150·151, 152号住居址 …	53
2		25	H-153号住居址 ······	54
3	遺跡周辺図 4	26	H-154号住居址 ······	
4		27	H-155, 160号住居址 ······	
5		28	H-156·157号住居址 ······	57
6		29	H − 158 · 159, 161号住居址 ·············	
7		30	H-162, 163号住居址 ······	
8		31	H-164, 165, 166号住居址 ··············	
9		32	H-167, 169·170号住居址 ············	
10		38	H-168号住居址 ·······	
11	V - Bright S II I sub-II West	34	H-171, 173·174号住居址 ············	
12		35	H-172, 175·177号住居址···········	
13		36	H − 176 · 188, 178 · 179, 180号住居址 · · ·	
14		37	H-181, 183号住居址 ·······	
15		38	H-182, 184号住居址 ······	
16		39	H-185, 186, 187号住居址、	
17			D-65, 69号土坑 ····································	68
18		40	W-11・12号溝址 ····································	
19		41	H-132・133号住居址出土の土器 ······	
20		42	H-133·135·138~141号	
21			住居址出土の土器	71
22		43	$H-142 \cdot 144 \sim 148 \cdot 150 \cdot 152 \cdot 154$ 号	
24	→ → → → 10, 111, 110, 1110 √	10	1 11 11 110 100 101	

 23 H-142・144号住居址 ………………… 52
 住居址出土の土器 ……………… 72

				頁							頁
Fig. 44	H -	154~157号住居	址出土の土器・	···· 73	50	W-12号溝址,	D-65号	土坑出	土の土器	··· '	79
45	H-1	157 · 158 · 160~	~165号		51	臼 玉(1) ·	•••••			80
	住居:	址出土の土器・		74	52	臼玉(2)、	石製模	造品、	铁器 …	•••••	81
Ī											
46	H -	165~167号住居	址出土の土器・	···· 75	53	瓦 (1) …					82
47	H-16	37~173·175号住	と居址出土の土器	÷ ··· 76	54	瓦(2)、石	器・石	製品 …	•••••	•••••	83
3											
48	H-	175~177 · 180	181号		55	縄文式土器(1) ·		•••••		84
	住居	址出土の土器 …		77	56	縄文式土器(2) •	•••••	•••••		85
49	H-1	181·184~187号	号住居址,		57	縄文式土器(3).				86
	W-	10~12号溝址出	土の土器	···· 78							
表											
				頁							頁
Tab. 1	大屋	敷遺跡 遺構一	覧表	···· 27	5	鉄器観察表・		•••••	• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		41
2	土器	観察表(古墳時	代~中世)…	36~39	6	瓦観察表…		•••••	••••••		12
3	臼玉:	観察表		40~41	7	石器・石製品	観察表				42
4	石製	模造品観察表 ‥		····· 41	8	縄文式土器観	察表·		• • • • • • • • • • • • • • • • • • • •		43
【調査参加]者】	赤石忠彦	石原義夫	岩木 操		大賀良助	小野島	E 学	岸	フクエ	-
		桜井れい	須藤キク	須藤八江子		住谷文彦	関口	哲 聡	渡 木	秋子	-
		富沢清八	中林美智子	堀込とよ江		松本 映	湯浅	たま江	湯 浅	道子	-
		湯浅有紀	力石正子								
【調 査 協	カ】	群馬県教育委員]会文化財保護	课 財団 群	馬県	埋蔵文化財調3	上事業	1			
		群馬県立歴史	専物館 前橋	市大屋敷地区	土地	区画整理組合					
		前橋市都市計画	画部都市計画課								
		加部二生	神戸聖語	木津博明		杉山秀宏	関	晴 彦	ф	隆之	
		坂爪久純	早田 勉	山下歳信							
		イズミトレース	ス 井上測量	株式会社	技研	测量株式会社	た	つみ写真	 スタジ	才	
		宮下工業株式会	会社 (有)	丹生サーヴェ	イ						
									(数 称	略)	

ν

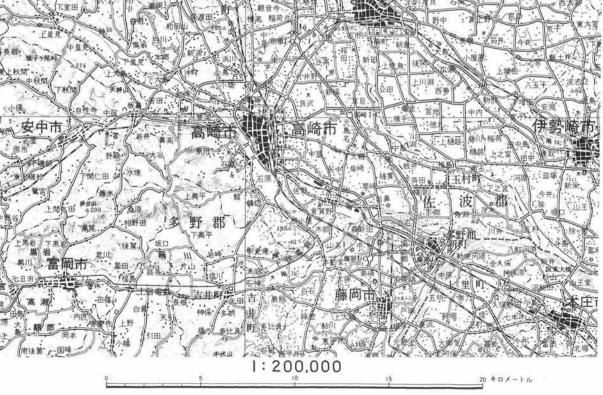


Fig. 1 大屋敷遺跡の位置

Ⅰ 調査に至る経緯

本発掘調査は、前橋市総社町大屋敷地区を対象とした土地区画整理事業実施に伴い、大屋敷地区の土地区画整理を目的とした前橋市大屋敷地区土地区画整理組合(代表者 大山栄一)と前橋市教育委員会が組織する前橋市埋蔵文化財発掘調査団との間で、平成4年7月27日に締結された、5年間にわたる発掘調査に関する覚書に基づいて実施されている。調査開始から3年目となる本年度は、4月20日に組合と調査団との間で発掘調査に関する委託契約が締結され、その5日後の25日より、現地での発掘調査を開始した。本年度の発掘調査面積は2,702㎡であり、昨年度の調査地域の北側および東西に広がる部分の調査となった。遺跡名称は「大屋敷遺跡皿」とし、遺跡略称は6A60とした。

なお、初年度、覚書を締結し、発掘調査を実施するはこびとなった経緯については、「大屋敷遺跡 I | に詳しく述べられているので本書では省略する。

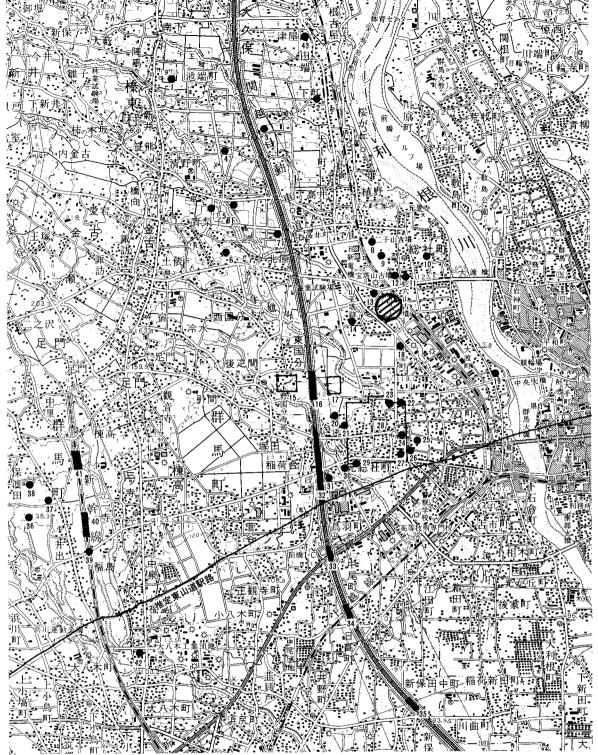
Ⅱ 遺跡の位置と環境

1 遺跡の立地

大屋敷遺跡は前橋市街地(県庁付近)から利根川を隔てて、北西約 3 kmの地点に所在する。遺跡地の地番は前橋市総社町総社1937番地ほかである。遺跡地の周囲は主要幹線道が縦横に走っている。北側100m付近には前橋・箕郷線が東西に走り、西側は市道大友西通線(通称、産業道路)が、また約300m程東にはJR上越線が南北に走っている。そして、これらの主要幹線に沿って市街化が進み、工場や住宅街が遺跡地を取り囲むように立ち並んでいる。遺跡地の立地は榛名山東南麓に広がる相馬ケ原扇状地の扇頂部より流下する河川群のひとつ、八幡川左岸域の標高123~126mの微高地上にある。位置的には、相馬ケ原扇状地面と前橋台地面の境界付近を占地する。遺跡地の南側には榛東村に源を発する八幡川が南東方向に流れ、東側には江戸時代初期、総社藩主秋元長朝により開削された天狗岩用水が南流し、両者は遺跡地の南東脇で合流し滝川と名前を変えた後、利根川と並行する形でさらに流下してゆく。遺跡地と滝川の接する部分は比高5~6mほどの段丘崖を呈し、遺跡地を含む段丘上は高燥化した台地が広がり、桑園・畑作地を主としているが、一部水田として利用されている。

2 歷史的環境

今回の調査によって、検出された主な遺構は古墳時代から中世にかけてであるが、調査区の出土遺物のなかには縄文時代中期、加曽利E式の土器片も若干検出されているので、ここでは本遺跡地周辺の歴史的環境を縄文時代から順に概観してみたい。



1. 清里・陣場遺跡群 2. 中島遺跡 3. 長久保遺跡 4. 清里・庚申塚遺跡 5. 清里南部遺跡群 6. 熊野谷遺跡 7. 下東西遺跡 8. 総社二子山古墳 9. 愛宕山古墳 10. 遠見山古墳 11. 蛇穴山古墳 12. 宝塔山古墳 13. 村東遺跡 14. 山王廃寺跡 15. 上野国分僧寺跡 16. 国分僧寺・尼寺中間地域遺跡 17. 上野国分尼寺跡 18. 産業道路西遺跡 19. 山王古墳 20. 小見遺跡 21. 草作遺跡 22. 閑泉樋遺跡 23. 閑泉明神北遺跡 24. 寺田遺跡 25. 大友屋敷Ⅱ・Ⅲ遺跡 26. 元総社明神遺跡 7. 元総社小学校校庭遺跡 28. 推定上野国府 29. 天神遺跡 30. 染谷川遺跡 31. 弥勒山遺跡 32. 鳥羽遺跡 33. 中尾遺跡 34. 日高遺跡 35. 神保遺跡 36. 二子山古墳 37. 八幡塚古墳 38. 薬師塚古墳 39. 三ツ寺Ⅰ遺跡 40. 三ツ寺Ⅱ遺跡 41. 三ツ寺Ⅲ遺跡 42. 雨壺遺跡 43. 三津屋古墳

Fig. 2 位置図と周辺遺跡図

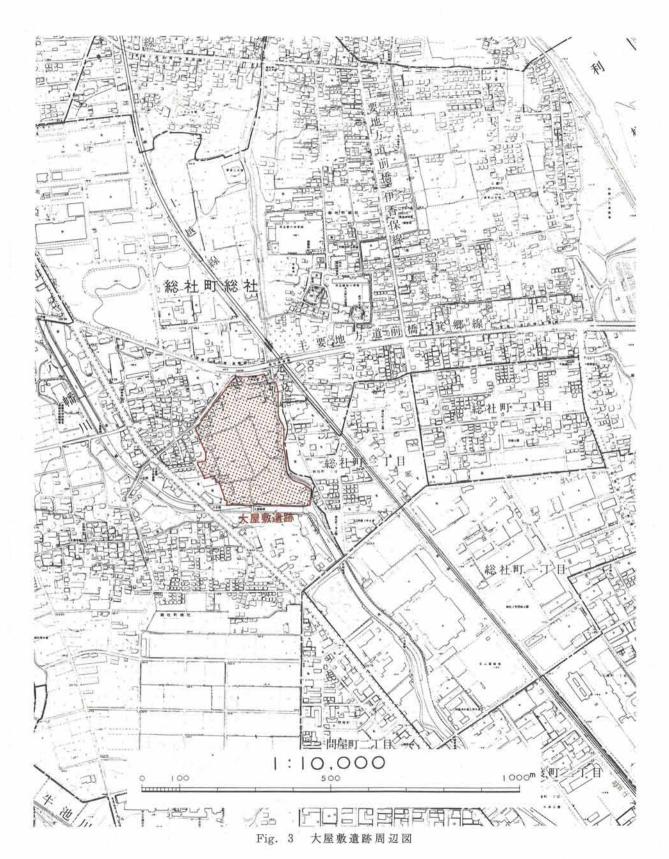
縄文時代の代表的な遺跡としては国分僧寺・尼寺中間地域遺跡(16)、産業道路西遺跡(18)があげられ、縄文中期・後期の遺構が集落的な規模で検出され、当該地域の縄文文化を考えるうえで重要な資料となった。また熊野谷遺跡(6)からは中期加曽利E式土器を伴う住居址群のほか、遺物では早期の押型文土器や沈線文土器が検出され、当地域における初源事例を更新した。そのほかの遺跡としては、下東西遺跡(7)、清里南部遺跡群(5)、清里・陣場遺跡群(1)、中島遺跡(2)、長久保遺跡(3)、雨壺遺跡(42)などがあげられ、時期的には前期から後期初頭といった範囲でおさえられる。

弥生時代の周辺遺跡は、集落・住居主体の遺跡と水田址関係の遺跡とに大別され、前者は八幡川、牛池川、染谷川流域などの高燥化した台地上に立地し、後者は、さらに下った平野部の後背湿地上に集中している。弥生時代中期後半の環濠集落である清里・庚申塚遺跡(4)、後期の住居が検出された国分僧寺・尼寺中間地域遺跡などは前者であり、日高遺跡(34)、新保遺跡(35)に代表されるAs-C軽石(浅間山起源:4世紀中頃)下の水田址などは後者である。

古墳時代を彩る一大モニュメントとしての古墳が本遺跡地周辺に姿を現すのは、5世紀末頃と推定される。まず、主軸70mを測る遠見山古墳(10)が築かれ、次いで6世紀前半代には、利根川右岸段丘上に、川原石を用いた積石塚である王山古墳(19)が造られる。その後、本遺跡の北約2kmには、国指定史跡で前方部と後円部に石室を有する総社二子山古墳(8)、巨石使用の横穴式石室をもつ愛宕山古墳(9)、さらに県内最終末期と考えられ仏教文化の影響を強く受けた宝塔山古墳(12)と蛇穴山古墳(11)など、総社古墳群を構成する数々の古墳が連綿と築かれていく。宝塔山古墳の南西約500に所在する山王廃寺跡(14)にみる石造物群は、宝塔山古墳石棺や蛇穴山古墳石室と同系統の石造技術を駆使して加工されたと考えられている。共通する技法から時代決定の根拠とされ、白鳳期の建立と考えられる山王廃寺を中心にして、総社・元総社周辺では、仏教文化が古墳文化と併存しながら花開いた様子がうかがえる。

奈良・平安時代になると、推定国府(28)、国分僧寺(15)、国分尼寺(17)等の建設とあいまって、当地域はいよいよ古代上野の政治的・文化的中心地としての様相を帯びてくる。国府周辺遺跡では、閑泉樋遺跡(22)、閑泉明神北遺跡(23)、小見遺跡(20)、草作遺跡(21)、大友屋敷遺跡(25)、寺田遺跡(24)、元総社小学校校庭遺跡(27)、天神遺跡(29)、染谷川遺跡(30)、弥勒山遺跡(31)等がある。また国分僧寺の発掘調査は昭和55年12月から始まり、それ以降毎年発掘調査が進められ、各種遺構の基壇、礎石、堀などが確認されてきた。国分僧寺、国分尼寺周辺では、関越自動車道建設に伴う発掘調査が進められ、道筋にあたる中尾遺跡(33)、鳥羽遺跡(32)、国分僧寺・国分尼寺中間地域(16)等が発見されている。これらの遺跡からは、奈良・平安時代の住居址等が大量に検出されている。このことからも、奈良時代から平安時代にかけて、当地では急激に集落の拡大した様子がうかがわれる。

その後、中世には長尾氏により国府の堀割を利用した蒼海城が築かれる。



Ⅲ調査の経過

1 調 査 方 針

委託された調査箇所は幅 6 mの計画道路部分2,702㎡である。調査範囲の形状から全体を A 区、 B 区、 C 区、 D 区の 4 調査区に区分した。調査実施に際しては、まず 5 年間の発掘調査範囲の全域をカバーする 4 mグリッドを設定し、このグリッドを最小単位とした。各グリッドの呼称方法は南北方向を Y 軸とし、北から南へ Y 1 、 Y 2 、 Y 3 …、東西方向を X 軸とし西から東へ X 1 、 X 2 、 X 3 …で表し、それぞれ北西の交点をグリッド名とした。その他、調査実施段階での方針は以下のとおりである。

- 1. 土層観察は原則として遺構中央部で交差するセクションンベルトを設けて行う。
- 2. 10cm四方以上の遺物は縮尺1/20にて図化し、それ以下についてはドット標記した平面図を作製し、取り上げに際しては遺物台帳に諸属性を記録する。
- 3. 電は原則として縮尺1/10で図化し、遺構平面図は原則として縮尺1/20にて実施する。 なお、今年度の測量の基準点はX51、Y34グリッドで公共座標は第IX系(X=+44,804m、Y=-71,156m)である。

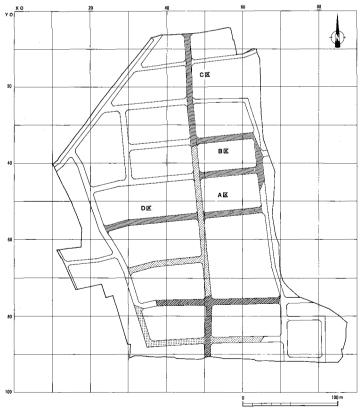


Fig. 4 グリット設定図

///// 平成 4 年度調査区 (4 A 60)

平成 5 年度調査区 (5 A 60)

平成 6 年度調査区 (6 A 60)

2 調 査 経 過

3年目を迎えた本年度の現地発掘調査は、委託契約の締結後の4月25日より開始した。まず、 今年度の調査対象地区の西側にあたるA区とB区より着手し、重機(バックフォー0.4m³)によ る表土掘削、それに追従してのプラン確認に即刻取り掛かった。5月までの調査によりA・B区 では20軒の住居址が確認された。そのほとんどが西側の狭い部分に集中して検出され、東側の水 田として利用されていた場所では崖際で数軒、それも床面までが10㎝程度の浅いものであった。 これはもともと現在の畑と同じ高さで地表が広がっていたものが、水田開墾の際に多くの住居址 も壊されたものと考えられる。次いで6月に入り、C区の表土掘削・掘り下げに着手した。その 結果、北側のゲートボール場西で住居址が検出されたが、以前建っていた食品会社の基礎部分に より大きな攪乱も認められた。なお、工場や事務所の立ち並ぶ西側でもゴミ焼却炉により大きな 攪乱が見られた。C区一番南側の部分でも住居址が検出されたがA・B区同様開墾時の掘削のた め床面までが浅いものであった。さらにここでは、東西、南北方向に伸びる溝が広がっているこ とが判明した。また、溝の縁からは住居の竃に用いられたと考えられる凝灰岩質層の塊を切り出 した跡(竈構築材採掘坑)が多数検出され貴重な成果を上げることができた。7月28日には空中 写真測量・ハイライダーによるA~C区の全景写真撮影を実施した。この夏は小雨により屋外で の作業が滞ることは数えるほどしかなく、順調に作業が捗ったと言えよう。反面、記録的な猛暑 に見舞われ穴蔵の中では摂氏40度以上になることもしばしばで、まさに暑さとの戦いであった。 8月に入ると、調査の対象はA~C区からD区へと移行した。ここでも複雑に絡み合った重複住 居址群が存在し多くの時間を費やした。また、東側からは多数の土坑と共に数点の石製模造品や 多くの臼玉が出土した。また、D区中央部から西側にかけて1.5m程の溝址が伸びており、重機

の力を借り作業に当たった。この溝址が多くの住居址を壊しているため、古墳時代の土器から中世の内耳鍋に至るまで様々な遺物が出土した。さらに、調査区内で溝址のコーナー部も確認されたため、昨年の溝址と結び付き中世の環濠になると考えられる。10月19日にはすべての遺構の精査を終え、遺跡全体測量およびD区遺跡全体撮影を実施し、翌週24日からは調査区の埋め戻し・現場撤去作業に入り、10月31日には現地発掘調査を完了させた。その後は、11月1日から翌年3月24日まで文化財保護課整理棟において整理作業を行い、すべての作業を完成させるはこびとなった。

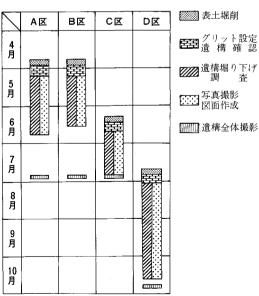


Fig. 5 調 査 経 過 図

IV 層 序

本遺跡のほぼ中央に設定した深堀から観察される地層は基本的には、大きく2つに分類できる。上位の厚さ1mほどの黒褐色土層と下位に堆積するラミナ(縞目)状の硬くしまった砂とシルトの互層である。この灰褐色系統の砂層は総社、元総社付近を中心に利根川右岸一帯に広がっており、層厚は元総社市内の遺跡地(『元総社明神遺跡 X』1991年)で約2~4mを測り、本遺跡のように5mを越える(天狗岩用水に接するの段丘崖)ところもある。本報告書はこの砂層を「総社砂層」と呼ぶことにする。この砂層はAs-Sj(浅間-総社軽石:約1.1万年前)を含む前橋泥炭層の上にあることからその堆積は約1万年前以降から始まったと推測されるが、正確な堆積年代は今のところ明らかにされていない。ただ本遺跡地において、縄文中期の加曽利臣式土器が検出されたことや周辺遺跡の縄文土器出土状況(縄文中期に集中)から類推すれば、堆積期間は縄文時代前期(約6000年前)のころまでは続いていたと思われる。また総社砂層の上に乗る黒褐色土層は硬く、極めて粘性が強い。

ただし本年度調査区A・B区の西端、C区北側、D区東側は下記の $I \sim IV$ 層基本どおりであったが、A・B区東側、C区南側では水田に利用された際に $I \sim II$ 層が削られていた。また、D区中央より西側にかけてはこの黒褐色土層は見られず、代わりに淡い黄褐色土層が総社砂層の上に広がっていた。

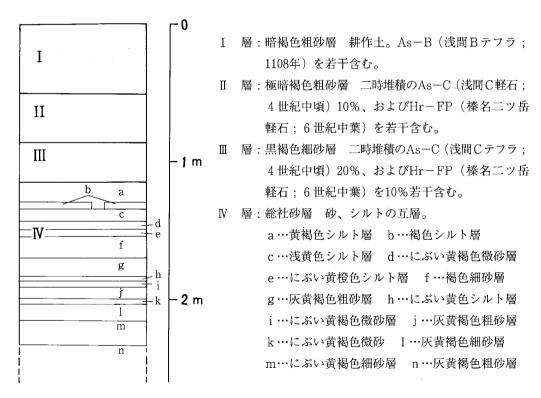


Fig. 6 大屋敷遺跡標準土層図

V 遺構と遺物

本年度の発掘調査では、竪穴住居址57軒・溝址 4 条・土坑56基が検出された。古墳時代後半の竪穴住居址から中世の溝址までと昨年同様に幅広い範囲におよんでいる。縄文時代の遺物では、昨年までと同様に遺構は確認されなかったが、加曽利E式土器を中心に縄文時代中期の土器片や石器が古墳時代後半以降の住居址・溝址内や遺物包含層から出土している。古墳時代後半から平安時代までの遺構は、黒褐色の地山を掘り込む形で何軒もの住居址が重複しあって検出された。その一方で、A・B区の東側のように住居址が検出されなかったり、または床面までが非常に浅い住居址の検出であった場所も見られた。これらの地域は調査前まで水田として利用されていたところであり、水田開墾時に遺構そのものまでが削り取られたためと考えられる。さらに、D区では、中世の溝址が竪穴住居址を壊して構築されていた。この溝址は規模・構築時期等から昨年度調査されたW-7と接続することが考えられ、本地域に中世の環濠の存在を示す貴重な遺構となった。今年度の調査で特筆すべき遺構としては、C区の溝址(W-9・10)から検出された竃構築材採掘坑があげられる。このため、溝址とは別項において竃構築材採掘坑として詳細に記載した。

今年度も遺構数が多いことから、遺構を図示するとともに一覧表(Tab. 1)にまとめた。 なお、遺構番号は昨年度の続き番号を使用している。 $(H-132\sim188,W-9\sim12,D-53\sim109$ である。)

1 住 居 址

H-132号住居址 (B区、Fig. 18・41・51・52、PL. 3・10・14)

(形状) 方形。北端部は調査区外。D-65との重複により南東部分を削られる。(床面) 竃付近を中心に堅緻な面が確認された。(竃) 東壁中央部。全長132cm、焚口部幅40cmを測る。両袖に人頭大の河原石を1個ずつ使用。(貯蔵穴) 竃右脇に検出。長軸52cm、短軸40cm、深さ65cmを測る。(柱穴) 3個の主柱穴を検出。P₁(54×40×48cm)、P₂(46×40×59cm)、P₃(37×32×54cm)である。南東部の柱穴はD-65との重複により未検出。(重複) H-139・147・D-65と重複。構築順は、H-147→H-139→本遺構→D-65である。(遺物) 総数2,249点。うち土器6点、臼玉2点、鉄器1点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は7世紀後半~8世紀前半と思われる。

H-133号住居址 (B区、Fig. 19・41・42・52・53・54、PL. 3・10・14・15・16)

(形状) 住居址の南隅は調査区外。正方形。(床面) 平坦で極めて堅緻な床面を検出。(竈) 東壁やや北寄りに設置。全長156cm、焚口部幅50cm。凝灰岩質層の直方体の袖石を左右に 2 個ずつ使用。(柱穴) 主柱穴を 4 個検出。P₁(48×40×48cm)、P₂(40×36×59cm)、P₃(44×40×42cm)、P₄(50×45×54cm)である。(周溝)全周。壁より約30cm内側で検出。(重複) H-

134・135・138・139と重複。H-138・139より新しく、H-134・135より先行する。(遺物)総数5,875点。うち土器21点、石製模造品1点、鉄器1点、砥石1点、瓦3点を図示。掲載した鐙瓦は、山王廃寺創建時のものと考えられる。(備考)本住居址の時期は7世紀後半~8世紀と思われる。

H-134号住居址 (B区、Fig. 20)

(形状) 方形。(床面) ほぼ平坦。(竈) 東壁の南寄りに設置され、全長136cm、焚口部幅64cmを 測る。(周溝) 調査範囲で全周。(重複) H-133・135・138と重複。本遺構が最も新しい。(遺物) 総数851点。(備考) 重複関係・出土遺物から本住居址は9世紀と思われる。

H-135号住居址 (B区、Fig. 20·42·52、PL. 3·10·14)

(形状) 方形。(床面) 平坦で竃付近を中心に堅緻面が広がる。(竃) 東壁に設置。全長114cm、 焚口部幅46cmを測る。(柱穴) 主柱穴をP₁(40×34×52cm)を検出。(重複) H-133・134と重 複し、H-133→本遺構→H-134の構築順である。(遺物) 総数620点。竃付近を中心に土師器 坏等の遺物が出土した。うち土器 7 点、鉄器 1 点を図示した。(備考) 重複関係・出土遺物から 本住居址は 9 世紀と思われる。

H-136号住居址(B区、Fig. 19、PL. 4)

(形状)正方形。(床面)ほぼ平坦で堅緻な面が確認された。(竈)検出されず。(遺物)総数61点。(備考)出土遺物から本住居址は8世紀と思われる。

H-137号住居址 (B区、Fig. 20、PL. 4)

(形状)長方形。(床面)堅緻な床面。(竈)東壁の南寄りに設置され、全長50cm、焚口部幅20cmを測る。(遺物)総数126点。(備考)出土遺物から本住居址は8世紀と思われる。

H-138号住居址 (B区、Fig. 21·42、PL. 4)

(形状)方形。(床面)平坦で極めて堅緻な面が検出された。(竈) 東壁の南側に位置する。調査区内で粘土で構築された袖の一部を検出。(重複) H-133・134と重複しており、本遺構が最も古い。(遺物) 総数186点。うち土器 1 点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は 6 世紀と思われる。

H−139号住居址 (B区、Fig. 21・42、PL. 4・10・11)

(形状)方形。他の遺構との重複にしているため一部のみの検出。(床面)堅緻な床面。住居址のほぼ中央部に床下土坑が検出された。(貯蔵穴)南東隅に位置する。ほぼ円形で径72cm、深さ53cmを測る。(重複) H-132・133、D-65と重複しており、本遺構が最も古い。(遺物)総数252点。うち土器6点を図示。(備考)遺物・重複関係から本住居址は6世紀後半と思われる。

H-140号住居址(A区、Fig. 22·42)

(形状)長方形。住居址の南東部は戦後の水田開墾時に削られ不明。(床面)平坦で堅緻な床面。 (周溝)西側から南側の一部で検出。(遺物)総数799点。うち土器2点を図示した。(備考)出 土遺物から本住居址は9世紀と思われる。

H-141号住居址 (A区、Fig. 22·42)

(形状)方形。(床面)堅緻な床面。(周溝)調査範囲で全周。(遺物)総数160点。うち土器 1点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は 9世紀と思われる。

H-142号住居址 (A区、Fig. 23·43·52·54、PL. 4·16)

(形状) 長方形。(床面) 竃付近を中心に堅緻な床面が検出された。(竃) 東壁の南寄りに設置され、全長45cm、焚口部幅30cmを測る。(貯蔵穴) 竃右脇に検出。長径58cm、短径52cm、深さ20cmを測る。(重複) H-144・146・148と重複し、H-148→H-144→本遺構→H-146の構築順である。(遺物) 総数882点。うち土器2点、石製品1点、流れ込みと考えられる石製模造品1点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は9世紀後半~10世紀と思われる。

H-143号住居址(B区、Fig. 22)

(形状)方形。(床面)平坦で堅緻な床面。(遺物)総数175点。破片が多く図示までに至らなかった。(備考)出土遺物から本住居址は8世紀と思われる。

H-144号住居址 (A区、Fig. 23·43、PL. 11)

(形状) 北側に張り出し部を持つ長方形。(床面) 平坦で堅緻な床面を検出。(竈) 東壁の南側に位置し、全長104cm、焚口部幅28cmを測る。竈左半分はH-142に壊される。(貯蔵穴) 竃両側で検出。右側の貯蔵穴は長軸50cm、短軸35cm、深さ20cm、左側の貯蔵穴は長軸67cm、短軸58cm、深さ30cmを測る。(柱穴) 2個の主柱穴を検出。P₁(30×20×34cm)、P₂(30×26×21cm)を測る。(重複) H-142と重複しており、本遺構が先行する。(遺物) 総数459点。うち土器 3点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は8世紀と思われる。

H-145号住居址 (A区、Fig. 22·43、PL. 4)

(形状)方形。(床面)堅緻な床面を確認。(篭)東壁に設置され、全長56cmを測る。竃左側は 攪乱により壊されていた。天井石(河原石)が良好な状態で検出された。(重複)H-149・150・ 151と重複し、本遺構が最も新しい。(遺物)総数255点。うち土器2点を図示した。(備考)出 土遺物から本住居址は10~11世紀と思われる。なお、昨年度調査されたH-93の東側に当たると 推定される。

H-146号住居址(A区、Fig. 24·43、PL. 4·11)

(形状)方形。(竈) 南壁に位置し、全長108cm、焚口部幅48cmを測る。直方体に加工した凝灰岩質層の袖石が検出された。(重複) H-142・148と重複。本遺構が最も新しい。(遺物) 総数70点。うち土器2点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は11世紀と思われる。

H-147号住居址(B区、Fig. 18·43)

(形状) H-132との重複で切られるため、南東部のみの検出。方形と思われる。(床面) 堅緻な床面。(周溝) 南壁に沿って周溝と思われる窪みを検出。(重複) H-132と重複。本遺構が先行する。(遺物) 総数69点。うち土器 2点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は 6世紀前半と思われる。

H-148号住居址 (A区、Fig. 24·43·52、PL. 5·11·14)

(形状)方形。(床面)平坦で堅緻な面を確認。(重複) H-142・146と重複。本遺構が最も古い。(遺物)総数112点。うち土器1点、石製模造品1点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は6世紀前半と思われる。

H-149号住居址(A区、Fig. 24)

(形状)方形。(床面)堅緻な床面。(貯蔵穴)住居址の南東隅に位置し、長径64cm、短径54cm、深さ14cmを測る。(重複) H-145・150・151と重複。H-151→本遺構→H-150→H-145の構築順である。(遺物)遺物総数92点。(備考)出土遺物から本住居址は8世紀と思われる。

H-150号住居址 (A区、Fig. 24·43、PL. 5)

(形状) 方形。(床面) 竃付近を中心に堅緻な床面が広がる。(竃) 東壁に位置し、全長76cm、 焚口部幅40cmを測る。(重複) H-145・149・151と重複。構築順はH-151→H-149→本遺構 →H-145である。(遺物) 総数157点。うち土器 3 点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居 址は 8 世紀と思われる。

H-151号住居址(A区、Fig. 24)

(形状)方形。(床面)平坦な床面。(貯蔵穴)住居址の南東隅に位置し、長径68cm、短径54cm、深さ10cmを測る。(重複) H-145・149・150と重複。構築順は本遺構が最も古い。(遺物)総数42点。(備考)出土遺物から本住居址は8世紀と思われる。

H-152号住居址(C区、Fig. 24·43·52、PL. 5·11·14)

(形状)方形。(床面)平坦な床面が確認された。(貯蔵穴)住居址の南東隅に長径77cm、短径62cm、深さ30cmの貯蔵穴を検出。貯蔵穴内より土師器坩が出土。(遺物)総数57点。うち土器1点、鉄器1点を図示。(備考)出土遺物から本住居址は5世紀末~6世紀初頭と思われる。

H-153号住居址 (C区、Fig. 25、PL. 5)

(形状)正方形。(床面)堅緻な床面。(竃)東壁南寄りに設置。全長110cm、焚口部幅44cmを測る。凝灰岩質層の15cm程の立方体の袖石が左側に2個、右側に1個用いられていた。(貯蔵穴)住居址南東隅で検出された。長軸58cm、短軸47cm、深さ30cmを測る。(柱穴)主柱穴を4個検出。P₁(24×22×29cm)、P₂(24×22×29cm)、P₃(28×25×24cm)、P₄(34×28×26cm)を測る。(重複)H-154と重複。本遺構が新しい。(遺物)総数185点。遺物の多くに鬼高 I 期の坏・甕等の破片が多く見られた。(備考)出土遺物から本住居址は6世紀前半と思われる。

H-154号住居址 (C区、Fig. 26・43・44、PL. 5・11)

(形状) 正方形。(床面) 平坦で極めて堅緻な床面。(竈) 東壁のやや南寄りに設置。袖部分が耕作による攪乱を受ける。全長126cm、焚口部幅32cm。竈手前に灰を多量に含むやや低い部分が検出された。(貯蔵穴) 住居址南東隅に位置し、長軸95cm、短軸75cm、深さ52cmを測る。(柱穴)主柱穴を4個検出された。P₁(44×36×47cm)、P₂(46×36×47cm)、P₃(42×32×48cm)、P₁(40×30×41cm) である。(周溝)全周。(重複) H-153と重複。本遺構が古い。(遺物)

総数672点。うち土器 7 点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は 5 世紀末~ 6 世紀初頭と思われる。

H-155号住居址 (C区、Fig. 27·44、PL. 5)

(形状) 方形。(床面) 平坦で極めて堅緻な面を検出。(竈) 東壁のやや北寄りに位置し、全長118cm、焚口部幅50cmを測る。凝灰岩層の約15cmの立方体の袖石が両側で検出された。(貯蔵穴)住居址南東隅に周囲に粘土で固められた高まりを有する貯蔵穴を検出。長軸138cm、短軸100cm、深さ57cmを測る。(柱穴) 調査範囲内でP₁(38×28×46cm)、P₂(30×24×48cm) の2個の柱穴を検出。(周溝)全周。(遺物)総数84点。うち土器2点を図示。(備考)出土遺物から本住居址は6世紀と思われる。

H-156号住居址 (C区、Fig. 28·44、PL. 5·11·12)

(形状) 長方形。(床面) 平坦で極めて堅緻な床面。(竈) 東壁の南側に位置し、良好な状態で検出された。全長140cm、焚口部幅50cmを測る。(貯蔵穴) 竈右脇に検出。長径80cm、短径70cm、深さ26cmを測る。(重複) H-157・160と重複。H-157より古く、H-160より新しい。(遺物) 総数451点。うち土器10点を図示。(備考) 出土遺物から本住居址は9世紀前半と思われる。

H-157号住居址 (C区、Fig. 28·44·52、PL. 6·13)

(形状) 方形。(床面) 平坦な床面。(竃) 東壁のやや南寄りに位置し、良好な状態で検出された。全長88cm、焚口部幅28cmを測る。(重複) H-156・158・160と重複し、本遺構が最も新しい。(遺物) 総数630点。うち土器 2点、鉄器 1点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は9世紀と思われる。

H-158号住居址 (C区、Fig. 29·45、PL. 6)

(形状)方形。(床面)全面にわたり平坦で、竃前を中心に堅緻面を検出。(竃)東壁に設置。全長132cm、焚口部幅44cmを測る。凝灰岩質層の袖石を左右に有する。(柱穴)主柱穴を1個検出。40×34×46cmを測る。(重複)H-157・159・160と重複し、本遺構が先行する。(遺物)総数115点。うち土器2点を図示した。掲載した灰釉高台碗は、流れ込みと考えられる。(備考)出土遺物から本住居址は6世紀と思われる。

H-159号住居址 (C区、Fig. 29)

(形状)調査区内で竈のみの検出。全長128cm、焚口部幅30cmを測る。(重複) H-158と重複し、本遺構が新しい。(遺物)総数41点。図示には至らなかったが、鬼高 I ~ Ⅱ期の遺物の破片が見られる。(備考)出土遺物から本住居址は6世紀と思われる。

H-160号住居址(C区、Fig. 27·45、PL. 12)

(形状) 長方形。(床面) 平坦で堅く締まっている。(竈) 東壁に位置し、全長115cm、焚口部幅46cmを測る。右側は重複により壊される。(貯蔵穴) 竈右脇に検出。長径70cm、短径58cm、深さ32cmを測る。(重複) H-156・157・158と重複。構築順はH-158→本遺構→H-156・157となっている。(遺物) 総数131点。うち土器1点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は7世紀

後半~8世紀前半と思われる。

H-161号住居址(D区、Fig. 29·45)

(形状)方形。(床面)極めて堅緻面な床面。西壁付近で炭化物を検出。(重複) H-163と重複。本遺構が新しい。(遺物)総数276点。うち土器2点を図示。(備考)出土遺物から本住居址は8世紀と思われる。昨年度調査されたH-68の西側に当たると推定される。

H-162号住居址(D区、Fig. 30·45·51·52、PL. 6·11·12·14)

(形状) 正方形。(床面) 堅緻面な床面。南東部に一段低くなった面を有する。(竃) 東壁やや北側に設置され、全長130cm、焚口部幅32cmを測る。天井石と思われる河原石が崩壊した状態で竃手前から検出された。(重複) H-163、D-103と重複し、本遺構が最も新しい。(遺物)総数593点。うち土器 3 点、鉄器 1 点、臼玉 2 点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は6世紀と思われる。

H-163号住居址(D区、Fig. 30·45)

(形状) 方形。(床面) 極めて堅緻な床面。(貯蔵穴) 重複しているH-161により上部を壊されているが、住居址南東部で検出。長軸58cm、短軸36cm、深さ26cmを測る。床面からの復元値の深さは64cmになる。(柱穴) 柱穴を3個検出し、P₁(60×46×16cm)、P₂(52×50×29cm)、P₃(72×50×29cm)を測る。(周溝)全周。(馬蹄形状施設)住居址南壁際やや東で検出された。(重複) H-161・162、D-103と重複。本遺構が最も古い。(遺物) 総数288点。うち土器2点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は5世紀末~6世紀初頭と思われる。

H-164号住居址(D区、Fig. 31·45·51)

(形状)方形。(床面)平坦で堅緻な床面。(柱穴)柱穴を1個検出し、50×40×24cmを測る。 (遺物)総数243点。うち土器1点、臼玉11点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は7 世紀後半~8世紀前半と思われる。

H-165号住居址 (D区、Fig. 31・45・46・51・52、PL. 6・7・11・12・14)

(形状) 長方形。(床面)全体に平坦で堅緻な面が検出された。(篭)調査区内で竃の袖部と思われる粘土を検出。東竃と推定される。(貯蔵穴)住居址南東隅に P_4 (70×57×41cm)、南西隅に P_3 (98×87×28cm)が検出された。(柱穴)柱穴を2個検出。 P_1 (38×26×29cm)、 P_2 (22×20×21cm)である。(重複)D-109と重複。本遺構が新しい。(遺物)総数748点。うち土器6点、石製模造品4点、臼玉27点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は6世紀と思われる。

H-166号住居址(D区、Fig. 31·46·51·52、PL. 7)

(形状)方形。(床面)平坦で堅緻な床面を検出。(柱穴)ピット1個を検出した。44×40×16 cmを測る。(周溝)全周。(遺物)総数683点。床面より10cm程上から臼玉が散乱した状態で出土した。土器2点、流れ込みと考えられる石製模造品2点、臼玉56点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は9世紀と思われる。

H-167号住居址 (D区、Fig. 32・46・47・51・54、PL. 7・12・16)

(形状) 長方形。(床面) 平坦で堅緻な床面。(竈) 東壁に設置。全長80cm、焚口部幅58cmを測る。竈内より土師器甕が出土。(貯蔵穴) 住居址の南東隅に位置し、長径120cm、短径80cm、深さ42cmを測る。(柱穴) 3個検出。P₁(27×22×18cm)、P₂(26×22×17cm)、P₃(30×24×20cm)を測る。(周溝) ほぼ全周。(重複) H-168と重複しており、本遺構が新しい。(遺物)総数1,259点。うち土器 5点、砥石 1点、臼玉 4点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は9世紀と思われる。

H-168号住居址 (D区、Fig. 33・47・51、PL. 7・12)

(形状)方形。(床面)極めて堅緻で平坦な床面。(竃)東壁に2つの竃を有する。南側の竃の手前に貯蔵穴が築かれていることより、北側を使用の際は南側は廃棄されていたと考えられる。 H-167により壊されているため、残存値で南側の竃は全長95cm、焚口部幅38cm、北側の竃は全長62cm、焚口部幅47cmを測る。南側の竃には凝灰岩層の袖石が用いられ、北側の竃は粘性の強い地山を掘り残し袖を形成している。(貯蔵穴)北側の竃の右脇に位置し、長径94cm、短径80cm、深さ25cmを測る。(柱穴)柱穴を3個検出。P1(48×40×72cm)、P2(60×48×30cm)、P3(30×27×83cm)を測る。(重複)H-167・169・170と重複。本遺構が最も古い。(遺物)総数814点。うち土器5点、臼玉2点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は6世紀前半と思われる。

H-169号住居址 (D区、Fig. 32・47・52、PL. 7・12)

(形状)方形。(床面)平坦で堅緻な床面。(重複) H-168・170・W-11と重複。構築順は、 H-168→本遺構→H-170→W-11である。(遺物)総数227点。うち土器6点、石製模造品1点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は6世紀後半と思われる。

H-170号住居址(D区、Fig. 32·47·54、PL. 16)

(形状)方形。(床面)平坦な床面。(竃)東竃。調査区内で竃と思われる粘土および焼土を検出。全長50cmを測る。(重複) H-168・169・W-11と重複。構築順は、H-168→H-169→本遺構→W-11である。(遺物)総数114点。うち土器1点、紡錘車1点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は10世紀と思われる。

H-171号住居址 (D区、Fig. 34·47、PL. 12)

(形状) 方形。(床面) 平坦で締まった面を検出。(柱穴) 柱穴を 3 個検出。P₁ (33×29×61 cm)、P₂ (26×24×49cm)、P₃ (21×20×44cm) を測る。(重複) W-11と重複し、本遺構が先行する。(遺物) 総数132点。うち土器 2 点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は 6 世紀後半と思われる。

H-172号住居址 (D区、Fig. 35・47)

(形状)方形。(床面)平坦な床面。(重複)W-12と重複。本遺構が先行する。(遺物)総数1 17点。うち土器1点を図示。図示できなかったが、南西隅より鬼高I期の土師器甕が出土した。 (備考) 出土遺物から本住居址は6世紀前半と思われる。

H-173号住居址(D区、Fig. 34·47、PL. 8·13)

(形状)方形。(床面)平坦な堅緻面が検出された。(竈)西壁南隅に設置され、全長78cm、焚口部幅25cmを測る。両袖に30cm程の偏平な山石を使用。(重複)H-174・W-12と重複。構築順は、本遺構が先行する。(遺物)総数77点。うち土器3点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は7世紀と思われる。

H-174号住居址(D区、Fig. 34)

(形状)方形。(床面)平坦な床面が検出された。(重複) H-173と重複し、本遺構が先行する。(遺物)総数13点。(備考)出土遺物が少ないが、本住居址は7世紀の構築と思われる。

H-175号住居址(D区、Fig. 35·47·48·51、PL. 13)

(形状)方形。(床面)極めて堅緻な床面。(竈)東壁に設置され、全長90cm、焚口部幅38cmを測る。(貯蔵穴)篭右脇に位置し、径52cm、深さ30cmを測る。底より偏平な河原石が検出された。(重複)H-177・W-12と重複。本遺構が先行する。(遺物)総数441点。うち土器3点、臼玉1点を図示した。遺物の多くに鬼高 I 期の坏・高坏・甕等の破片が見られる。(備考)出土遺物から本住居址は6世紀と思われる。

H-176号住居址(D区、Fig. 36·48)

(形状)方形。(床面)平坦で堅緻な床面。(重複) H-188・W-12と重複。H-188→本遺構→W-12の構築順である。(遺物)総数344点。うち土器 2 点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は 8 世紀と思われる。

H-177号住居址 (D区、Fig. 35・48・52)

(形状)方形。(床面)堅緻な床が検出された。(重複)H-175・W-12と重複。構築順は、H-175→本遺構→W-12である。(遺物)総数187点。うち土器1点、流れ込みと考えられる石製模造品1点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は10世紀と思われる。

H-178号住居址(D区、Fig. 36)

(形状)方形。(床面)平坦で堅緻な床面。(重複)H-179と重複。本遺構が新しい。(遺物)総数50点。図示できなかったが、鬼高 I 期の高坏や甕等の破片が多く出土。(備考)出土遺物から本住居址は6世紀前半と思われる。

H-179号住居址(D区、Fig. 36)

(形状)方形。(床面)平坦な床面。(重複) H-178と重複。本遺構が先行する。(遺物) 総数 4点。(備考)重複関係や出土遺物から本住居址は6世紀前半と思われる。

H-180号住居址(D区、Fig. 36·48·51、PL. 8·13)

(形状)方形。(床面)平坦で極めて堅緻な床面。(重複)W-12と重複。本遺構が先行する。 (遺物)総数337点。うち土器 2 点、臼玉 1 点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は 6世紀前半と思われる。

H-181号住居址(D区、Fig. 37·48·49·52、PL. 8·13·14)

(形状) 方形。(床面) 平坦な床面。住居址南東部と中央部やや東側より床下土坑が2基検出された。(竈) 東壁の南寄りに設置され、全長66cm、焚口部幅45cmを測る。(貯蔵穴) 住居址南東隅に位置し、長軸66cm、短軸52cm、深さ28cmを測る。(柱穴) 主柱穴を2個検出。P₁(36×27×70cm)、P₂(46×32×54cm) を測る。(重複) H-182・184・W-12と重複し、本遺構が最も新しい。(遺物) 総数1,061点。うち土器14点、鉄器2点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は9世紀後半と思われる。

H-182号住居址 (D区、Fig. 38、PL. 8)

(形状) 方形。(床面) ほぼ平坦で堅緻な面が広がる。(竈) 東壁のやや南寄りに設置され、全長50cm、焚口部幅24cmを測る。竃上部を重複により削られる。(柱穴) 主柱穴を 2 個検出。 P_1 (58×42×44cm)、 P_2 (34×32×68cm) を測る。(周溝) 南から東にかけて検出された。(重複) $H-181\cdot183\cdot184\cdot185\cdot186\cdot W-12$ と重複。 $H-185\cdot186\rightarrow$ 本遺構 \rightarrow $H-183\cdot181\cdot184\cdot W-12$ の構築順である。(遺物) 総数409点。図示には至らなかったが、鬼高 $I\sim II$ 期の土器の破片が多く出土。(備考) 出土遺物から本住居址は 6 世紀後半と思われる。

H-183号住居址(D区、Fig. 37、PL. 8)

(形状)方形。(床面)平坦で堅緻な床面。(竃)東壁に設置され、全長85cm、焚口部幅30cmを測る。右袖には凝灰岩層の直方体の切石を用い、周囲を粘土で固めてあった。左袖部は攪乱を受けていた。(重複) H-182・186と重複。本遺構が最も新しい。(遺物)総数279点。(備考)出土遺物・重複関係から本住居址は8世紀と思われる。

H-184号住居址 (D区、Fig. 38·49·52、PL. 13·14)

(形状) 方形。(床面) ほぼ平坦な床面。(重複) H-181・182と重複。構築順はH-182→本遺構→H-181となる。(遺物) 総数351点。うち土器1点、鉄器1点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は8世紀と思われる。

H-185号住居址(D区、Fig. 39·49、PL. 13)

(形状)方形。(床面)平坦な床面。(重複) H-182と重複。本遺構が先行する。(遺物)総数98点。うち土器2点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は5世紀末~6世紀初頭と思われる。覆土中にHr-FAの堆積が認められた。

H-186号住居址 (D区、Fig. 39・49)

(形状) 方形。(床面) 平坦な床面。(重複) H-182・183・187と重複。本遺構が最も古い。

(遺物)総数51点。うち土器 1 点を図示した。(備考)出土遺物から本住居址は 5 世紀末~ 6 世紀初頭と思われる。覆土中にHr-FAの堆積が認められた。

H-187号住居址(D区、Fig. 39·49、PL. 8)

(形状)方形。(床面)平坦な床面。(竃)東壁の南寄りに設置され、全長54cm、焚口部幅42cmを測る。竃手前がやや低くなり、灰が検出された。(貯蔵穴)住居址南東隅に位置し、長径45cm、

短径41cm、深さ17cmを測る。(柱穴)主柱穴を2個検出。P₁(30×24×21cm)、P₂(34×30×12cm)を測る。(重複) H-186と重複し、本遺構が新しい。(遺物)総数97点。うち土器4点を図示した。(備考) 出土遺物から本住居址は8世紀と思われる。

H-188号住居址(D区、Fig. 36)

(形状)調査区内で竃のみの検出。北向きに構築され、全長76cm、焚口部幅50cmを測る。(重複) H-176と重複。本遺構が先行する。(遺物)総数10点。(備考)重複関係・出土遺物から本住居 址は7世紀と思われる。

C区の溝址($W-9\cdot10$)の縁から採掘坑が検出された。発掘調査前は水田として利用されていた。西側の畑と 1 m近い段差が認められることから、水田開墾時に削平されたと考えられる場所であり、他の遺構の検出された場所に比較して被覆土に乏しい所である。特に、採掘坑は、溝によって浸食を受け凝灰岩質層が露出した縁で検出されている。住居址の多く検出された他の調査区では、この凝灰岩質層への到達が深くなり、地表面から 1 m以上を有している。

採掘坑は、南北に走行するW-10の縁に集中し、東西に走行するW-9の縁では調査範囲が狭いためか検出数が少なかった。W-10では幾重にも重複して採掘された痕跡が認められた。採掘坑の範囲は、溝址の縁に沿って幅6 mの調査区以外にもさらに広がると考えられる。切り出しに適した凝灰岩質層は、約1 mの厚さを有している。それより上層では塊にならず、下層では礫を多く含むようになり採取不可能となる。個々の採掘坑を観察すると、大きさにある程度の規則性が認められ、採掘方法にも画一的な手法が見いだされた。

採掘坑の平面は長方形を呈し、 $90\times40\times25$ cm前後のものと、 $70\times40\times20$ cm前後のものが大半を占めている。それ以外のものでは、30cm前後の立方体の採掘坑がわずかに認められた。採掘坑群の中には、凝灰岩質層の中に礫が含まれるため採掘を途中で止めたものや採掘坑の底面に切れ込みの残るものが検出され、用材の具体的な大きさを得ることができた。取り残しと考えられる用材と底面の切れ込みの大きさはほぼ同一で、約 60×20 cmの長方形を呈していた。実際に住居址の電に用いられたものの大きさは、大きなものでH $-133\cdot146\cdot158\cdot168\cdot183$ の約 $60\times15\times15$ cm、小さなものでH $-153\cdot155$ の約 15×15 ×15cmと、採掘坑での切り出された石の大きさ($60\times20\times20$ cm)より小さなものとなっている。このことから、採掘坑で切り出した後、電構築材として使用する際に、その住居址の電の大きさに合わせて加工していることがうかがえる。

また、切り出された跡の地山を観察すると、土質より $A \cdot B \cdot C$ の 3 段階に分けられる。 A とした地山は、極めて硬く、粒も細かいものである。 B とした地山は A よりは粗い粒になり、 3 mm程の礫がわずかに含まれる。 C は、さらに粗く、含まれる礫も大きくなる。 層位的には、 C が最も高い位置に見られる。 凝灰岩質層の構築材の用いらた竈と対比させると、 $H-133\cdot146\cdot153\cdot155\cdot168$ では B の用材が使われていた。 H-158 の竈は左側の用材が B から C にかけて、右側が

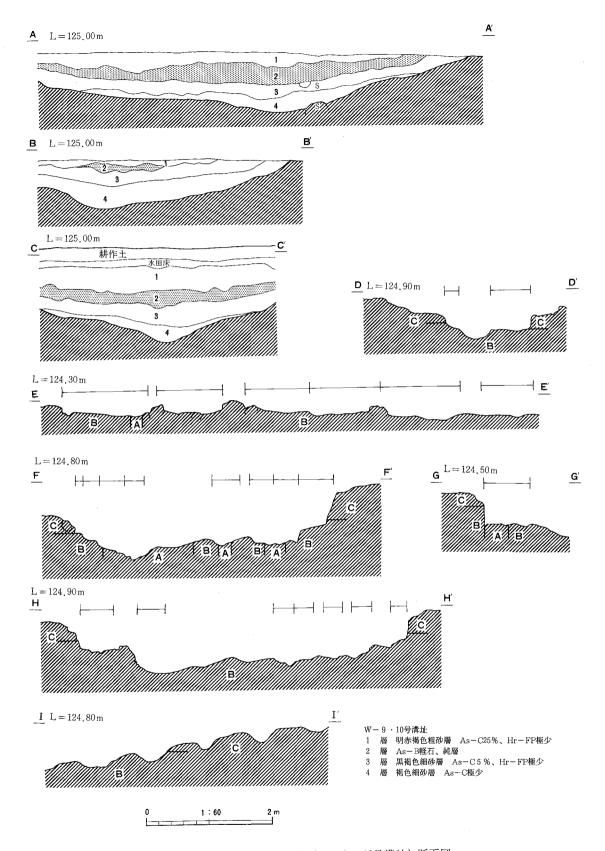


Fig. 7 竈構築材採掘坑 (W-9·10号溝址) 断面図



Fig. 8 竈構築材採掘坑 (W-9·10号溝址) 平面図

Aの用材であった。H-183の用材はAに近いものであった。

採掘方法は、取り残しや底面の切れ込みから判断すると、垂直方向に切れ込みを入れた後に水平方向に切り進んだと考えられる。採掘坑の多くの長軸が溝に沿って存在することから、短軸を溝に平行に採掘するより、切れ込み調整が少なく、効率を図ったことが指摘できよう。さらに採掘坑が階段状に幾重にも重なっていることから、連続して切り出しを行った可能性が高い。

以上のことから、採掘坑は、切り出し可能な凝灰岩質層を溝の浸食を利用して、規格・規則性を有し、連続的に効率良く採取された跡であるといえよう。

さらに、採掘坑より切り出された材の用途については科学的な証明は得られていないが、大屋 敷遺跡内で検出された古墳時代後期~平安時代にかけての竪穴住居址に付設される竈に用いられ ている構築材がこれに当たると考えられる。大屋敷遺跡では、凝灰岩質層の構築材は主に竈の焚 口部を構成する左右の袖材として用いられていた。住居址の竈構築材を使用した住居址が古墳時 代後期~平安時代であることから、時期を決定する出土遺物はないが、凝灰岩質層の採掘時期も ほぼ同時期と考えられよう。

3 溝 址

W-9号溝址(C区、Fig. 7 · 8 · 53、PL. 1 · 2)

(位置) C区の南部に位置し、調査区を東西に横切り、東端で南北に延びるW-10と合流する。 (形状) 断面は楕円形を半分に切った形を呈し、緩やかに窪んでいる。東側のW-10と合流する 辺りから急に落ち込む。溝縁には竃構築に使用した石材を切り出した痕跡を示す採掘坑が検出さ れた。(覆土) 4層に分けられる。2層がAs-Bの純層である。(遺物)遺物総数266点。うち瓦 4点を図示した。(備考) 4層目と溝底との間に少量の砂利層やノロが検出されたことから、水 が流れていたと考えられる。時期については不明。

W-10号溝址 (C区、Fig. 7 · 8 · 49 · 53 · 54、PL. 1 · 2 · 13)

(位置) C区を南北に横切る形で検出された。南端でW-9と合流する。(形状)断面は楕円形を半分に切った形を呈し、緩やかに窪んでいる。南側に向かって、緩やかに傾斜している。W-9と同様に竃構築材採掘坑が溝縁に並んで検出された。溝に対してほぼ直交する形で東側に直径 $30\sim40\,\mathrm{cm}$ 、深さ $10\sim18\,\mathrm{cm}$ のピットが7個並んで検出された。(覆土)4層に分けられ、As-Bの純層が2層目に認められた。(遺物)遺物総数 $610\,\mathrm{点}$ 。うち土器 $3\,\mathrm{点}$ 、瓦 $2\,\mathrm{点}$ を図示。(備考)4層目と溝底との間に少量の砂利層やノロが検出されたことから、水が流れていたと考えられる。溝の走向・時期から、昭和61年度に調査された前橋市村東遺跡のW-1につながる可能性があげられる。

W-11号溝址 (D区、Fig. 40·49·52∼54、PL. 9·13·14·16)

(位置) D区中央部を南北に横切る。(形状)断面は摺鉢状。場所によっては薬研彫りの形を呈す。(覆土) 3層に分けられ、住居址に比べると粘性・締まりが弱い。地山に川砂利が認められ

ることから、遺構構築以前に自然河川が存在していたことが考えられる。覆土には地山が崩れたと思われる砂利が含まれる。(遺物)遺物総数939点。うち土器 3 点、鉄器 1 点、瓦 7 点、凹石 1 点を図示した。他の遺構を切っているため、流れ込みの遺物も見られるが、内耳鍋や摺鉢の破片が多く出土している。(備考)調査区内でW-12と接続する。出土遺物から中世の構築と考えられる。

W-12号溝址 (D区、Fig. 40·49~54、PL. 8·9·13·14·15·16)

(位置) D区北側を東西に延びる。(形状)薬研彫りや摺鉢状の断面が見られる。(覆土) 3~5層に分けられる。住居址に比べ、粘性・締まりが弱い。W-12の中央東側からW-11にかけて地山に川砂利が認められ、自然河川の流路であったと考えられる。覆土に溝址埋没時に地山から流れ込んだ砂利が混じる。(遺物)遺物総数1,843点。うち土器5点、瓦10点、臼玉1点、鉄器1点、板碑1点、砥石1点を図示した。溝址構築以前の住居址を壊しているため、古墳時代後期~中世に至るまでの多くの遺物が出土している。W-11と同様に内耳鍋・摺鉢等の中世の遺物も多く出土している。(備考)調査区内でW-11と接続する。出土遺物から構築時期は中世と考えられる。

4 十 坑

今年度の調査では、土坑が56基(A区…2基、B区…13基、C区…1基、D区…40基)検出された。B区の北から東にかけての水田として利用されていた場所からは12基の土坑が検出された。これらは、水田開墾時に削り取られた住居址の柱穴や貯蔵穴に当たるピットと考えられる。D区東側では、住居址に囲まれた形で土坑群が検出された。そのうちいくつかの土坑からは臼玉や石製模造品が出土した。周辺の住居址を含めれば、石製模造品14点、臼玉220点が出土したこととなる。この土坑群が祭祀に係わっていた可能性が指摘できよう。なお、ここでは、特徴的なもののみの記述に留め、すべてを一覧表(Tab. 1)で記載した。

D-65号土坑(B区、Fig. 39·50、PL. 9)

B区西側のH-132の南東部で検出。形状は円形。断面では中段を有し平底。遺物総数803点。須恵器大甕が重なった状態で出土。

- **D-69号土坑** (C区、Fig. 39)
- C区のH−154の南東側で検出。形状は楕円形。西側にやや段を有す。遺物が出土していないため、構築時期は不明。
- **D**-79号土坑(D区、Fig. 17)
- D区東側の土坑群で検出。形状は円形。遺物12点と少ないが、臼玉が7個出土した。構築時期は 古墳時代後期と思われる。
- D-83号土坑(D区、Fig. 17、PL. 9·14)
- D区東側の土坑群で検出。円形を呈す。遺物は3点だが、石製模造品が1点出土した。構築時期

は古墳時代後期と思われる。

D-102号土坑 (D区、Fig. 17、PL. 14)

D区東側の土坑群で検出。円形を呈す。遺物総数134点。そのうち、臼玉が62点、有孔板が2点、砕片が16点出土した。構築時期は古墳時代後期と思われる。

5 縄文時代の遺物 (Fig. 55~57、PL. 15·16)

本年度も縄文時代の遺構は検出されなかったが、古墳時代以降の竪穴住居址や溝址の中より縄文式土器41点・縄文時代の石器23点が出土している。昨年度までと同様に縄文時代中期後半の加曽利E式土器が40点と中心を占めている。加曽利E式土器以外では、前期前半の繊維縄文の黒浜式土器片1点のみの出土であった。出土地点は、C区2点、D区39点である。特にD区西端に多く出土している。石器の内訳は、石鏃2点、打製石斧1点、剥片・砕片20点となっている。出土傾向は、土器と同様でD区に多く見られた。このうち図示したものは、石器3点(石鏃・打製石斧)である。土器については、破片が多く、個体を復元できるものには至らなかったため、割愛した。

また、大屋敷遺跡内の畑より耕作中偶然に縄文式土器が発見されたため、資料として掲載した。 今回図示した縄文式土器は平成4年度調査区西端の南に位置する畑より出土したものである。農 作物のために畑を掘り下げていたところ、地表下約30~50cmで多量の土器が出土したとの連絡を 受けたため、現地踏査した。すでに遺物は排土中に多く散乱していた。その緊急性を考え、掘削 により破壊された部分のみ精査し、遺物を採取した。出土位置はX39Y81である。遺物はすべて 加曽利E式土器であった。うち残存の良い3点の加曽利E3式土器を器形復元するとともにそれ 以外の土器の特徴的なものを実測・拓本して図示した。器形復元したNa.5は、口縁部の内湾が比 較的弱く、最大径を口縁部に有し、頸部のくびれがほとんど見られないものである。文様構成は、 口縁部が欠損しているため不詳な部分を残すが、簡略化された渦巻文が隆帯によって表現される と考えられる。胴部には、沈線により懸垂文が描かれ縄文RLが充填される。Na6は、5単位の 突起を持つ平口縁で口縁部が強く内湾し、最大径を胴部上位に有する。胴部中位にくびれを有し、 底部径は復元よりやや小さくなる可能性もある。微隆起帯が2本1組で巡らされることから、1 本のものに比べて古い傾向を帯びている。文様構成は、口縁部無文帯、胴上部に渦巻文が配され、 胴下部に逆U字の区画がなされ、縄文RLが地文として充填される。いわゆる「胴部隆帯文土器」 の系列の加曽利E3式土器である。№16は、口縁部が内湾し、最大径を口縁部に有し、胴中位に くびれを持ち、No.6と同様に2本の微隆起帯が巡らされる。文様構成は、口縁部無文帯および1 条の弱い沈線、胴部に渦巻文が配され、縄文LRが地文として充填される。胴下部は残存してい ないが、渦巻文が配されると思われ、№6と同様「胴部隆帯文土器」である。

現状保存のため調査範囲を広げることを行わなかったため断定できないが、土器の出土量から 考えると、加曽利E3期の遺構の存在が予想される。 今年度の調査では、縄文式土器が41点出土した。これは、大屋敷遺跡の南側を調査した平成4年度の525点・平成5年度の601点と比べると極端に少ない出土数となっている。さらに、今回緊急採取された縄文式土器の出土地点が遺跡地の南側であることを鑑みると、当遺跡地では、縄文時代の生活の場の中心が八幡川近くの南側に広がっており、縄文時代中期後半の繁栄がうかがわれよう。

6 石製模造品(Fig. 51·52、PL. 14)

今年度の調査では、石製模造品が245点出土した。その内訳は、臼玉227点、勾玉8点、剣形品 5点、有孔板4点、器種不明1点である。

石製模造品の石材は、滑石(45%)、頁岩(55%)となっている。今年度多く出土した臼玉では、滑石製101点(44%)、頁岩製126点(56%)となっており、やや頁岩が多く見られた。ただし、頁岩は石材の性質上薄く剥がれ易いため1個の製品が数個になった可能性もあるので、単純には比較できないと思われる。昨年度(滑石35%、頁岩62%、その他3%)と比較すると滑石製品の割合が多くなっている。石製模造品の器種と石材について考えると、勾玉8個のうち頁岩が6個を占めている。逆に剣形品では、5個すべてが滑石となっている。これは、昨年度までの石製模造品の石材傾向と同様である。

出土位置では、D区東側の土坑群とその周囲の住居址やグリッドに集中している。臼玉227点中220点(全体の97%)、石製模造品18点中14点(全体の78%)と極めて多くなっている。特にD-102、 $H-165\cdot166$ に集中している。住居址では床面付近からの出土は少なく、 $10\sim20$ cm程上層から多く出土した。土坑では、確認面付近から底面までの出土が見られた。このことは、住居址の廃棄埋没過程での流れ込みの可能性を示すと思われる。土坑群で掘建柱建物址を組むことができなかったが、その存在を否定するものとはいえないであろう。

昨年度の調査では、H-97に石製模造品と高坏の出土が集中し、祭祀と深く係わる住居址と位置づけた。今年度検出されたD区東側の土坑群の付近においても、臼玉220点、石製模造品14点の出土を鑑みれば、祭祀が行われていたと考えることが自然であろう。さらに、幅6mの調査であるため不明な部分も多いが、あえて推測するならば、調査区の南側まで含めれば祭祀に関係した掘建柱建物址が存在した可能性も考えられよう。

なお、昨年度の刊行された『大屋敷遺跡Ⅱ』では、石製模造品が多く出土したH-97の覆土の ふるい作業中であったため途中経過の報告であったが、ふるい作業が終了したので石製模造品は 268点となった。その内訳は、臼玉189点、勾玉 7 点、剣形品 7 点、刀子 4 点、鏃 2 点、紡錘車 2 点、管玉 1 点、蒼 1 点、斧 1 点、鎌 1 点、有孔板44点(有孔円板 9 点・有孔方板35点)、板状品 9 点(うち碁盤目状等の線刻のあるもの 6 点)である。

Tab. 1 大屋敷遺跡遺構一覧表

住居址一覧表

遺構名(調査区)	位	置	規模(m)東西×南北	面積(m²)	壁高	主軸方向	竜	備考	時 期	Fig
H-132(B)	X50~52,	Y42~43	5.70 ×(5.12)	(24, 20)	31cm	N -81° - E	東辺中央	両袖に河原石使用の竈。臼玉2点。	7後~8前	18
H-133(B)	X49~50,	Y42~44	5,28 ×(4,94)	(22, 20)	46cm	N-80° - E	東辺北寄	両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。周溝。	7後~8前	19
H-134(B)	X49	Y43~44	$(0.76) \times 4.38$	(3,31)	36cm	N-86° - E	東辺南寄	周溝。	9 C	20
H-135(B)	X49	Y43~44	(2,00)× 2,96	(5.30)	44cm	N-89° - E	東 辺	鉄鏃 1 点。	9後~10前	20
H-136(B)	X63~64,	Y35~36	2.88 × 2.74	6.81	9 cm	N -73° - E	未確認		8 C	19
H-137(B)	X63	Y35	2,64 × 3.32	7.68	8 cm	N -75° - E	東辺南寄		8 C	20
H-138(B)	X49~50,	Y42~43	6.08 ×(2.70)	(12.24)	34cm	N-70° - E	東辺南寄	袖に粘土使用の竈。周溝。	6 C	21
H-139(B)	X50~51,	Y42~43	$(2,88) \times 3,80$	(10,12)	35ст	N-56° - E	東辺中央	床下土坑。	6後	21
H-140(A)	X52~53,	Y52~54	(4.50)× 5.38	(17.09)	38cm	N - 2 ° - W	未確認	周溝。	9 C	22
H-141(A)	X52	Y54	3.30 ×(0.60)	(1,76)	43cm	N -82° - E	未確認	周溝。	9 C	22
H-142(A)		Y53~54	4.85 × 4.00			N-86° - E	東辺南寄	石製模造品1点。	9後~10C	23
H-143(A)		Y54	2.37 ×(0.60)			N-86° - E	未確認		8 C	22
H-144(A)		Y53~54	3.20×4.00	11,14		N-89° - E		張り出し部をもつ形状。	8 C	23
H-145(A)		Y53	$(0.68) \times (3.42)$					 天井石使用の竈。H -93の東側。	10~11C	22
H-146(A)			$(3.12) \times (1.70)$					 両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	10後~11 C	24
H-147(B)		Y42	$(1.84) \times (1.45)$						6 C 前	18
H-148(A)			' ' ' '					石製模造品 1 点。	6 C 前	24
H-149(A)			$(1.60) \times 2.90$	(4,28)		N-8°-E		10000000	8 C	24
H-150(A)			$(0.84) \times 3.74$	(2,83)		N-96° - E			8 C	24
H-151(A)			$(1,40)\times(2,30)$			N-16° - E	l		8 C	24
H-152(C)			$(2.20) \times 3.90$	(7.51)		N-5°-E		鉄器 1 占。	5末~6初	
H-153(C)			5, 20 × 4.70	22.81		N-76° - E		両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	6 C前	25
H-154(C)			6,02 × 6.40	36.41		N-68° - E		周溝。	5末~6初	}
H-155(C)		Y31~32	$(2.75) \times 4.94$	(10.21)		N-77° - E		両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。周溝。	6 C	27
H-156(C)			3.14 × 3.86		i	N-85° - E		FVIAC-960VGI SCIE V SCIE ISTONICO	9 C前	28
H-157(C)			(2,60)× 4,62			N -73° - E			9 C	28
H-158(C)			(4.86)×(4.38)	(13, 32)	1	N-70° - E		両袖に凝灰岩質層の切石使用の竈。	6 C	29
H-159(C)		Y6~7	1.46 × 0.38	0,58		N-89° - E	東辺	175111-36571137111-757111-75711	6 C	29
H-160(C)			2.88 × 3.88			N-94° - E			7後~8前	
H-161(D)	İ	Y53~54	$(1.94) \times (3.30)$					H-68の西側。	8 C	29
H-162(D)			4.26 × 4.12	(13, 41)				天井石使用の竃。鉄鏃 1 点。臼玉 2 点。	6 C	30
H-163(D)			$(3.88) \times (3.10)$					馬蹄形状施設。周溝。	5末~6初	30
H-164(D)		Y53~54	3.06 ×(1,72)			N-62° - E			7後~8前	
H-165(D)								石製模造品 4 点。臼玉27点。	6 C	31
H-166(D)	1				ļ			石製模造品 2 点。臼玉56点。	9 C	31
					ı			周溝。臼玉 4 点。砥石 1 点。	9 C	32
H-168(D)			5.56 ×(4.74)					2つ篭。凝灰岩質層の切石使用の竜。臼玉 2 点。	6前	33
H-169(D)			$(3.09) \times (1.40)$					石製模造品 1 点。	6後半	32
H-170(D)	1		$(3.24) \times (1.44)$					紡錘車1点。	10 C	32
H-171(D)			5.90 ×(3.25)		l			· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	6 C	34
H-172(D)			4.80 ×(2.20)	1					6前	35
H-173(D)			3.30 ×(2.85)						7 C	34
H-174(D)		Y56	$(3.28)\times(0.56)$			N-85° - E			7 C	34
H-175(D)			$(4.76)\times(3.68)$					 臼玉 1 点。	6 C	35
H-176(D)			$(4.20)\times(2.55)$						8 C	36
H-177(D)								石製模造品 1 点。	10 C	35
111(10/	1101 02,	100	3.10 /(1.00)	(2.00)	OSCIII	1. 00 - 12	未確認	PACIFICATION - AND		

遺構名(調査区)	位	置	規模(m)東西×南北	面積(m²)	壁高	主軸方向	竃	備考	時期	Fig
H-179(D)	X28	Y56	$(3.00) \times (0.84)$	(2.06)	7 cm	N-68° - E	未確認		6 前	36
H-180(D)	X26~29,	$Y55\!\sim\!56$	5.40 ×(0.56)	(5.18)	10cm	N-68° - E	未確認	臼玉 1 点。	6 前	36
H-181(D)	X26~27,	Y56~57	4.34 ×(3.36)	(13.73)	17cm	N-65° - E	東辺南寄	鉄器 2 点。	9後.	37
H-182(D)	X25∼26,	Y56~57	4.50 ×(3.52)	(12,51)	30cm	N -63° - E	東辺南寄	周溝。	6後	38
H-183(D)	X25~26,	$56 \sim 57$	(1,04)×(2,70)	(2,56)	18cm	N-93° - E	東 辺	凝灰岩質層の切石使用の竈。	8 C	37
H-184(D)	X26~27,	Y56~57	3.10 ×(2.80)	(8,12)	20cm	N-75° - E	未確認	鉄器1点。	8 C	38
H-185(D)	X25~26,	Y57	3.14 ×(0.96)	(1.72)	8 cm	N-86° - E	未確認	Hr-FA堆積。	5 末~ 6 初	39
H-186(D)	X24~25,	Y57	2.80 ×(0.94)	(2,41)	15cm	N -70° - E	未確認	Hr-FA堆積。	5 末~ 6 初	39
H-187(D)	X24~25,	Y57~58	$(1.26) \times (2.36)$	(2,51)	5 cm	N-52° - E	東辺南寄		8 C	39
H-188(D)	X30~31,	Y56		(0.42)	21cm	N-1°-E	北 辺		7 C	36

溝址一覧表

遺構名(調査区)	位	置	方 位	上幅(m)	下幅(m)	深さ(m)	長さ(m)	備考	時 期	Fig
W-9(C)	X45~47,	Y30-32	N-103° - E	4.0~4.2	0.5~1.2	0.91	南北 7.3	竈構築材採掘坑。	古墳時代後期	8
W-10(C)	X45~47,	Y26-31	N -152° - E	2.3~4.6	0.4~1.3	0.64	東西17.0	竃構築材採掘坑。堰状遺構。	古墳時代後期	8
W-11(D)	X26-35,	Y54~56	N-168° - E	3.3~3.5	$0.5 \sim 1.2$	1.12	南北 6.0	環濠。内耳鍋・擂鉢等出土。	中世	40
W-12(D)	X27~40,	Y54~56	N -82° - E	2.2~3.5	0.3~0.9	1.55	東西55.5	環濠。内耳鍋・擂鉢等出土。	中世	40

土坑一覧表

遺構名(調査区)	位 置	形状	規模(cm)長径×短径×深さ	備考	遺構名(調査区)	位 置	形状	規模(cm)長径×短径×深さ	備考
D-53(B)	X63, Y36	円形	53 × 48 × 55	遺物 9 点	D-82(D)	X43, Y54	円 形	50 × 43 × 55	遺物 5 点
D-54(B)	X63, Y36	円 形	45 ×(24)× 25	遺物 3 点	D-83(D)	X43~44, Y54	円 形	33 × 31 × 39	石製模造品1点
D-55(B)	X63, Y35	楕円形	68 × 55 × 51	遺物 4 点	D-84(D)	X44, Y54	円 形	38 × 36 × 20	
D-56(B)	X62, Y32	円 形	26 × 24 × 15		D-85(D)	X44, Y54	楕円形	40 × 34 × 23	
D-57(B)	X62, Y32	円 形	$30 \times 26 \times 25$		D-86(D)	X44, Y54	楕円形	$36 \times 30 \times 36$	遺物 2 点
D-58(B)	X62, Y32	円 形	19 × 18 × 14		D-87(D)	X44, Y54	楕円形	42 × 30 × 34	臼玉1点
D-59(B)	X60, Y32	円形	36 × 32 × 18	遺物1点	D-88(D)	X44, Y54	円形	30 × 26 × 31	遺物 5 点
D-60(B)	X60, Y33	円形	34 × 32 × 8		D-89(D)	X44, Y54	円形	34 × 36 × 30	臼玉1点
D-61(B)	X59, Y32	円 形	30 × 29 × 12		D-90(D)	X44, Y54	円形	32 × 28 × 33	遺物 5 点
D-62(B)	X58, Y32	円形	$28 \times 24 \times 32$		D-91(D)	X44, Y54	楕円形	$29 \times 22 \times 32$	遺物25点
D-63(B)	X64, Y38	楕円形	50 × 30 × 51		D-92(D)	X44, Y54	円形	$30 \times 26 \times 35$	遺物 2 点
D-64(B)	X64, Y38	円形	36 ×(20)× 10		D-93(D)	X45, Y54	楕円形	$38 \times 30 \times 39$	
D-65(B)	X51~52, Y43	円 形	230 ×230 ×107	須恵器大甕	D-94(D)	X45, Y53~54	円 形	$32 \times 30 \times 27$	
D-66(A)	X50, Y53	円形	44 × 39 × 42	遺物13点	D-95(D)	X43, Y54	円形	$24 \times 20 \times 30$	
D-67(A)	X50, Y54	円 形	$35 \times 32 \times 40$		D-96(D)	X44, Y54~55	円 形	$25 \times 23 \times 19$	
D-68(C)	土坑としたが、	H - 154	の貯蔵穴となったた	こめ、欠番扱い。	D-97(D)	X43, Y54	楕円形	$53 \times 40 \times 49$	
D-69(C)	X46~47, Y26	不整形	276 ×146 × 88		D-98(D)	X44, Y54	円形	$22 \times 20 \times 16$	
D-70(D)	X42, Y55	楕円形	(42)×(40)× 46	遺物 2 点	D-88(D)	X44~45, Y54	楕円形	$30 \times 24 \times 39$	
D-71(D)	X42, Y54	円 形	$32 \times 26 \times 23$		D-100(D)	X42, Y54	円 形	$24 \times 23 \times 19$	
D-72(D)	X43, Y54	楕円形	60 × 52 × 38		D-101(D)	X41, Y54	円 形	$(50) \times 40 \times 43$	遺物1点
D-73(D)	X43, Y55	楕円形	50 × 42 × 37		D-102(D)	X44, Y54	円 形	$40 \times 38 \times 33$	臼玉62点·有孔板2点
D-74(D)	X43, Y55	円 形	(44)× 18 × 19		D-103(D)	X46, Y54	楕円形	95 × 84 × 48	
D-75(D)	X43, Y54~55	円 形	33 × 30 × 41	遺物10点	D-104(D)	X43, Y54	楕円形	57 × 44 × 29	
D-76(D)	X43, Y54	楕円形	40 × 30 × 39	遺物1点	D-105(D)	X44, Y54	円形	33 × 31 × 23	遺物 2 点
D-77(D)	X43, Y54~55	隅丸方形	50 × 35 × 29	遺物 5 点	D-106(D)	X44, Y54~55	円 形	$24 \times 22 \times 18$	
D-78(D)	X44, Y55	円 形	38 × 33 × 44	白玉 1 点	D-107(D)	X45, Y54	円 形	$68 \times 64 \times 29$	遺物 4 点
D-79(D)	X43~44, Y54	楕円形	34 × 28 × 36	自玉7点	D-108(D)	X44~45, Y54	円 形	$28 \times 24 \times 25$	
D-80(D)	X44, Y54	円 形	30 × 27 × 25	臼玉 2 点	D-109(D)	X43~44, Y53	円形	41 ×(27)× 33	
D-81(D)	X44, Y54	円形	38 × 33 × 37	遺物 4 点					

VI ま と め

1 竃構築材採掘坑について

今年度の調査された竃構築材採掘坑は、関越自動車道建設時に調査された鳥羽遺跡(L・M・N・O区)に次いで規模の大きな事例は県内で2例目となる貴重な発見となった。そこで2つの遺跡の竃構築材採掘坑について比較検討してみたい。

鳥羽遺跡で検出された竃構築材採掘坑も大屋敷遺跡と同様に凝灰岩質層を切り出している。大屋敷遺跡・鳥羽遺跡ともに、榛名山南東麓に広がる相馬ケ原扇状地の末端部と前橋台地の接する所に立地している。また、山麓を流れる河川(大屋敷遺跡は八幡川、鳥羽遺跡は染谷川)の段丘上に位置している点にも共通性が見られる。標高は大屋敷遺跡が約125m、鳥羽遺跡が約122mと差がなく、同一地質面上に位置している。大屋敷遺跡では、採掘を溝縁を利用して凝灰岩質層を切り出している。溝によって表土が削られ凝灰岩質層が露出した場所でのみの採掘であり、溝縁以外の場所では凝灰岩質層までの到達が深いため採掘を行うには困難である。鳥羽遺跡では、台地縁部の凝灰岩質層の露出している所を中心に大規模な採掘を行っている。ともに表土を除くことなしに凝灰岩質層の切り出し可能な地点を選出している。採掘工程についてみると、ともに垂直方向に切り進み、水平に切り出しを行う方法を用いている。

さらに、採掘の時期について考察すると、鳥羽遺跡では、採掘した用材の用途を同遺跡内で検 出される奈良~平安時代にかけての竪穴住居址の竃に用いられる構築材がこれにあたると考えて いることより、奈良~平安時代に採取が行われたといえよう。また、鳥羽遺跡では、同時期の遺 物を伴う竃構築材採掘に従事した人々の仮設的炉址と考えられる遺構も検出されている。一方、

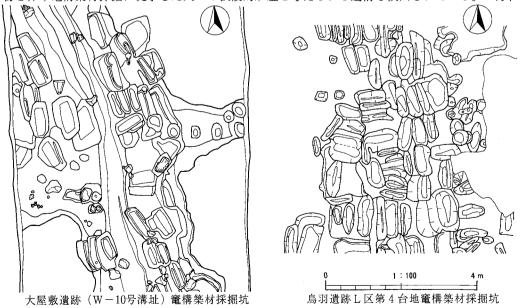


Fig. 9 大屋敷遺跡と鳥羽遺跡の竈構築材採掘坑比較図

大屋敷遺跡では、竈構築材採掘坑の検出された溝址(W-9・10)にAs-B軽石が覆土上層部に認められることから、12世紀には採掘が行われなくなったと考えられる。大屋敷遺跡で検出された住居址の凝灰岩質層を用いた竈がすべてその用材を大屋敷遺跡の採掘坑から求めたと仮定すれば、H-126(『大屋敷遺跡 II 』参照)・153・155・158が凝灰岩質層の切石を用いた 6 世紀代の住居址であることから、6 世紀代には竈構築材の採掘が行われたと考えられる。平成 4 年度に調査された 5 世紀末~6 世紀初頭の構築と考えられる H-12(『大屋敷遺跡 I』 参照)でも凝灰岩質層の石が左補に用いられていたが、直方体の切石ではなく加工のなされていない丸いものであるため、今回検出された採掘坑から計画的に切り出されたものではないと思われる。従って、大屋敷遺跡においての採掘時期は、6 世紀代から始められたと考えられよう。

このように、大屋敷遺跡と鳥羽遺跡では遺跡の立地環境・採掘方法に多くの共通点をあげられると同時に採掘の時期・規模においては差が生じる。これらのことから、大屋敷遺跡で6世紀代より採掘を開始されたが、溝縁以外では困難なため採掘が容易な場所を選定せざる得なかったため、凝灰岩質層の露出していて容易に切り出しが可能な鳥羽遺跡において大規模な採掘がなされたと推測することも可能であろう。

現在までの調査では、大屋敷遺跡・鳥羽遺跡の2遺跡でしか大規模な竃構築材採掘坑は確認されていないため推論の域でしかない。しかし、凝灰岩質層の広がる地域では採掘が可能であるため、今後の発掘事例の増加に伴い一層の解明が進むものと思われる。

2 W-10号溝址のピット列について

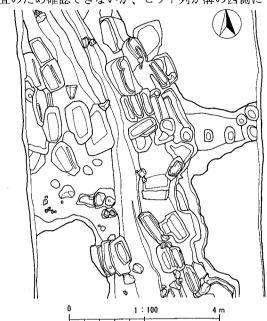
南北方向に延びるW-10号溝址に対してほぼ直交する形で東側に延びるやや低いところに直径 30~45cmの円形のピットがほぼ一直線上に7個並んで検出された。W-10に注ぐ新たな溝址とは 考え難い。さらに、ピットが溝縁から検出された竈構築材採掘坑とは異なった形をしており、凝 灰岩質層を切り出した跡ではないと考えられる。

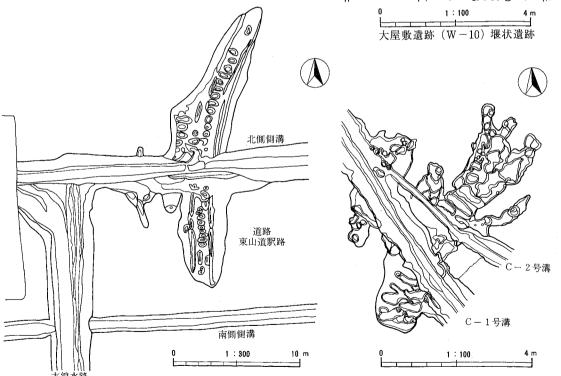
W-10のピット列と同じ形状を有する遺構を求めると、佐波郡境町矢ノ原遺跡や新田町北宿・観音前遺跡の堰状遺構があげられる。矢ノ原遺跡で検出された堰状遺構は、律令期の大規模な潅漑水利遺構である「牛堀」の一部にあたる。「牛堀」は、粕川を取水源とし、上幅3~7m、下幅1.2~1.5m、深さ1.8mの大規模な幹線潅漑用水遺構で、復元で総延長4.4㎞となる。覆土中にAs-Bが純層で堆積しており、12世紀初頭には廃溝となっている。東山道駅路の北側溝掘削している幹線用水路から支線水路へ分水する堰状遺構である。支線水路は幹線用水路より60㎝程高くなっており、自然状態では水が流れ得ないことから、堰によって水量調節していたと考えられる。北宿・観音前遺跡では、C-1号溝沿いに堰と考えられるピット列が複数検出されている。C-1号溝は、長さ280m、幅2.0~2.5m、深さ1.0~1.5mで断面形は階段状の逆台形を呈している。古墳時代前期の遺物および加工面のある杭が出土し、埋土上位にHr-FAの堆積が認められるものである。C-1号溝とその分水路と思われるC-2号溝址との別れる所に水量調節あるい

は分水を行う施設と考えられる堰状遺構が検出されている。2つの遺跡とも水路・溝に対して両 脇に翼状に延びるやや低いところにピット列が並んでいる。

大屋敷遺跡のW-10の西側にも東側のピット列と対峙する形で円形でわずかに低くなってピットの痕跡が認められる。幅 6 mの道路部分の調査のため確認できないが、ピット列が溝の西側に

も延びるとともに、支線水路にあたる溝が存在する可能性があることから、矢ノ原遺跡・ 北宿・観音前遺跡と同様に、大屋敷遺跡のWー10のピット列は水量調節を行うための施設(堰状遺構)にあたると考えることができよう。大屋敷遺跡の北西隣に位置する村東遺跡でも同時期でほぼ同じ走向を有する溝が検出されており、W-10と接続すると思われる。溝を北西方向へ延ばすと八幡川へつながり、南東方向へ延ばすと現在の天狗岩用水へつながることより、八幡川に取水源を求め、天狗





境町矢ノ原遺跡B区道路遺構と堰・支線水路跡

新田町北宿・観音前遺跡堰状遺跡

Fig. 10 堰状遺構比較図

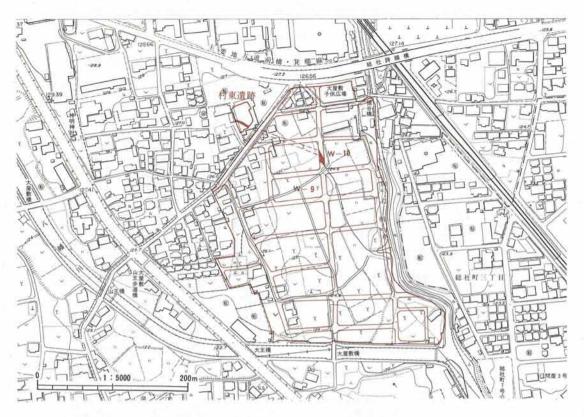


Fig. 11 大屋敷遺跡と村東遺跡の構址

岩用水(古くから河川が流れていたと考えられる)へ注いでいたと考えることも可能である。以上のことから、大屋敷遺跡のW-10は、八幡川の北東側の地域を潤すための水路と推定することもできよう。

3 中世の環濠について

D区のW-11・12は、平成5年度の調査で確認されたW-7と接続することが考えられ、大規模な環濠になると思われる。しかし、6 m幅の道路部分調査のため全体性を欠き、北西コーナー部や南側の溝の方向などはっきりしない面が残る。南限については接続すると思われる南北走の堀跡が平成5年度では検出され、平成4年度の調査区域内で検出されていないことからこの両トレンチに挟まれた現在耕作地として利用されている調査区外で南東・南西コーナー部となる可能性が濃厚である。

確認された範囲から推定すると、北辺は東西約55mで、座標北方向より約82度東に向いている。 北辺と東辺の角はほぼ直角に曲がっている。W-12は北方向から12度西に向き、W-7は同方向 から10度西に向くことから東辺、西辺はほぼ平行に伸びると考えられる。従前に於いて西辺は一 直線として考えていたが、今年度の調査区内で北西のコーナー部を検出できなかったこと、昨年 度のW-7との方向のズレなどから西辺において折れ状になる部分が存在する可能性が指摘され

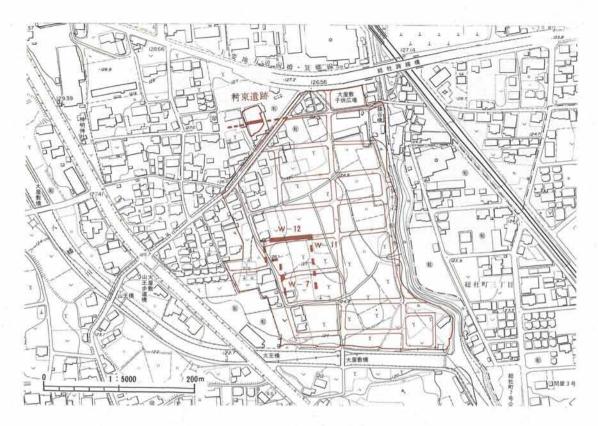


Fig. 12 中世の大屋敷遺跡

るプランと考えられる。その長さは南限から推定し南北60m以上になろう。

掘り込みの状況は場所によりやや異なるが、残存状況の良好地点を例にとれば、急勾配の両立ち上がりを含め逆台形状を呈している。上幅は3.25m~3.5m、下幅0.5~1.2m程度で、その下から薬研溝が25cmほどの深さで突出している。覆土は3~5層に分けられたが、時代決定の証拠となりうる層はなかった。また、一部下層では小礫、川原石、砂等を含んだ層位が認められている。これは遺構構築以前の自然流路の跡が地山に認められているものが、崩れたため覆土として堆積したものと思われる。堀全体としてはラミナ状の堆積やノロは見うけられなかった。また、水の流出入する水路が調査区内では確認されていないことから、空堀として構築されたものであろう。

平成5年度のW-7から6個体の内耳鍋が出土し、その変遷から15世紀後半から16世紀の製作年代に位置づけられよう。今年度の調査でも同様の内耳鍋が数点出土しており、また、口縁部の内外面に煤の付着が見られ、灯明皿として使用されたと思われるカワラケ等も出土している。また、昨年度調査されたW-7からは人頭大の河原石も多く出土しており、石組がなされた壁または土塁のような施設からの崩落も考えられる。以上のことから、W-7・11・12は中世の環濠と位置づけたい。

重複している遺構は、環濠によって切られていることから環濠よりも古いものである。耕作に

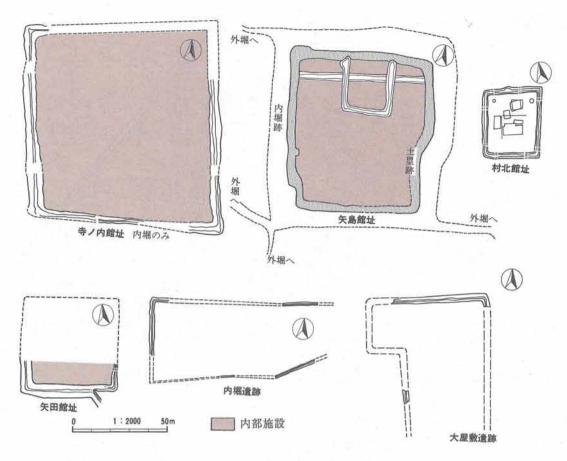


Fig. 13 群馬県内の中世の環境

よって削平されたためであろうか、環濠の内側にあたる調査区では環濠と同時代の遺構は確認されなかった。さらに昭和61年度調査の大屋敷遺跡北西に位置する村東遺跡において東西26m、深さ約2.4m、中世以後の薬研堀が検出されており、今回の北辺の溝とほぼ並行に走ることが分かった。このため東を天狗岩用水、南を八幡川とすれば、これらに囲まれた範囲が館址域で二重の堀となる感が有る。しかし、あくまで推測が多いので可能性ありにとどめたい。

前橋市内では昭和62年度に始まり今年度で8年目をむかえる内堀遺跡群の溝と形態や堀の周辺に施設を持たない点から共通点が認められる。内堀遺跡群のプランは台形を想起させる。溝の北辺90m、西辺45m、南辺89m、上幅2.1~0.6m、深さ0.9~0.4mを測る。覆土の観察から水の流れた形跡はなく空堀である。常滑焼の大甕片が出土しており、14世紀と考えられている。また、館跡としては高崎市で昭和53年度調査の寺ノ内遺跡、矢島遺跡、昭和58年度調査の天田遺跡、昭和59年度調査の村北遺跡がある。矢島遺跡は外堀・内堀に区画された館址が検出され、幅約7mの内堀に区画された内郭は南北約80m、東西約75mの規模を持つ。内部施設の周囲には幅約5mの土塁跡が検出された。寺の内遺跡では、外堀・中堀・内堀に区画された館址が検出された。幅約7mの内堀に画された内郭は南北約87m,東西約90mの規模を持ち、土塁跡も認められた。両

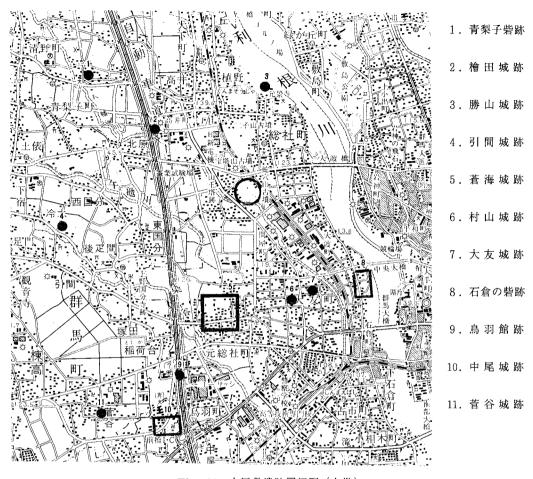


Fig. 14 大屋敷遺跡周辺図(中世)

遺跡共 $15\cdot 16$ 世紀、当地域に台頭した長野氏に関連した館址の1つと考えられる。村北遺跡の内堀の長さは $30\,\mathrm{m}$ 、上幅は $2.0\,\mathrm{c}2.8\,\mathrm{m}$ 、深さ $1\,\mathrm{m}$ 程度を測る。天田遺跡の内堀の長さは $51\,\mathrm{m}$ 、上幅は $3.5\,\mathrm{c}7\,\mathrm{m}$ 、深さ $1.3\,\mathrm{c}2.5\,\mathrm{m}$ 程度を測る。村北館址、天田館址は近くにある大規模な城館址の大類城址との関連も考えられる。これら $4\,\mathrm{c}700\,\mathrm{m}$ 0年は、大形建物跡、掘立柱建物跡、井戸跡、柵列跡などの付属施設が設けられている。

本遺跡においては環濠の内部については、館らしい遺構は確認されていない。また、土塁状の遺構、柵列跡なども検出されていないことから防禦的な機能を果たしたとは想定しがたく、遺構の周辺に付属施設もない。さらに、この15・16世紀という時代には、かなり一般的に有力農民の環濠屋敷が利根川西部の元総社、鳥羽、古市、小相木などからも検出されていることから自立農民層の館跡であった可能性がもたれる。また、内部施設の全容が耕作により既に削平されたものと考えるならば、16世紀の蒼海城に関連した砦址、もしくはその周辺の勝山城、檜田城といった出城であった可能性も指摘しておきたい。

参考文献

前橋市埋蔵文化財発掘調査団(1993・1994) 『大屋敷遺跡Ⅰ・Ⅱ』

(財群馬県埋蔵文化財調査事業団 (1990) 『鳥羽遺跡L·M·N·O区』

新田町教育委員会・群馬県企業局(1993) 『北宿・観音前遺跡』

日本村落史講座編集委員会(1993) 『日本村落史講座 9 特論』 坂爪久純「河川・用水の調査法」

前橋市教育委員会(1988~1993) 『内堀遺跡群Ⅰ~VI』

高崎市教育委員会(1979) 『元島名遺跡』

高崎市教育委員会(1979) 『寺の内遺跡』

高崎市教育委員会(1979) 『矢島・御布呂遺跡』

高崎市教育委員会(1983) 『天田・川押遺跡』

高崎市教育委員会(1984) 『天田遺跡Ⅱ』

高崎市教育委員会(1985) 『村北・矢島前・村東遺跡』

高崎市教育委員会(1985) 『北新波の砦址』

群馬県埋蔵文化財調査事業団(1982) 『元島名B・吹屋遺跡』

前橋市教育委員会(1988) 『村東遺跡』

山崎 一 (1978) 『群馬県古城塁址の研究 上・下巻』

群馬県地域文化振興会(1986) 『群馬文化 第208号』 坂口 一「古墳時代後期の土器の編年」

群馬県史編さん委員会(1986) 『群馬県史研究 第24号』

坂口 一・三浦京子「奈良・平安時代の土器の編年」

Tab. 2 古墳時代~中世土器観察表

番号	出土位置	器	Я	爲	大 き 口径		①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 · 整 形 口 径·胴 部	方 法 底 部	備考	Fig
1	H - 132	±.	師	坏	12.0	3.7	①細粒②良好③橙④完形	内湾、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
2	H -132	±.	師	坏	[13.6]	[4.6]	①細粒②良好③にぶい橙④1/4	内湾、横撫で。篦削り。	欠損 。	_	41
3	H -132	土	師	坏	12.6	3.3	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	内湾、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
4	H -132	土	師	坏	[13.2]	[4.4]	①細粒②良好③橙④1/3	内湾、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
5	H -132	土	師	坏	[11.8]	3, 1	①細粒②良好③橙④1/3	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
6	H -132	須	恵	坏	13.6	3.4	①細粒②良好③明緑灰④1/3	外傾、轆轤。	回転糸切り未調整整。		41
7	H -133	土	師	坏	[10.6]	3.2	①細粒②良好③橙④1/2	外傾、横撫で。篦削り。	篦削り。	内面に放射状暗紋。	41
8	H - 133	土.	師	坏	13.0	4.3	①細粒②極良③橙④完形	外反、横撫で。篦削り。	篦削り。内面に放射状	暗紋・螺旋状暗紋。	41
9	H — 133	土	師	坏	[11.0]	3.1	①細粒②良好③橙④1/2	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
10	H -133	土	師	坏	11.6	3.0	①細粒②良好③橙④2/3	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
11	H —133	土	師	坏	12.1	4.0	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
12	H —133	土	師	坏	11.4	3.4	①細粒②良好③橙④1/2	直立、横撫で。篦削り。	篦削り		41
13	H -133	土	師	坏	11.6	[3,1]	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	直立、横撫で。篦削り。	欠損。		41
14	H -133	土.	師	坏	11.6	3.0	①細粒②良好③橙④2/3	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。	-	41
15	H —133	土.	師	坏	12.0	4.0	①細粒②良好③橙④1/2	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
16	H —133	土	師	坏	11.8	3.2	①細粒②良好③橙④4/5	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
17	H -133	土	師	坏	12.5	3.5	①中粒②良好③橙④完形	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
18	H -133	須	惠	蓋	[17.8]	2.7	①細粒②良好③青灰④1/4	轆轤。回転篦調整。偏平な円	形摘まみ。口縁部に返し		41
19	H -133	須	恵	蓋	[17.0]	4.0	①細粒②良好③明緑灰④1/3	轆轤、つまみ部回転篦調整。	口縁部に返し。		41
20	H - 133	須	恵	坏	[15.6]	3.8	①細粒②良好③灰黄褐④1/2	外傾、轆轤。	回転糸切り未調整。		41

			大きさ		成・整形	方 法		Т
番号	出土位置	器形	口径器高	1 ①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	□ 径·胴 部	底 部	備考	Fig
21	H-133	須恵高台椀	17.6 3.9	①細粒②良好③オリーブ灰④1/2	外反、轆轤。	回転篦削り。		41
22	H - 133	須 恵 坏	[12.0] 3.7	①細粒②良好③赤灰④1/4	外傾、轆轤。	欠損。		41
23	H-133	土 師 甕	22.0 32.5	①細粒②良好③にぶい赤褐④2/3	外傾、横撫で。篦削り。	篦削り。		41
24	H -133	土 師 甕	[23,2][28,0]	①細粒②良好③橙④1/4	外反、横撫で。篦削り。	欠損。		41
25	H -133	須 恵 椀	[17.0] 4.3	①細粒②良好③オリーブ灰④1/3	外傾、轆轤。	回転篦削り。	高台後付け。	42
26	H - 133	須恵高台椀	17.0 5.1	①細粒②良好③青灰④1/2	外傾、轆轤。	回転篦削り。	高台後付け。	42
27	H-133	土 師 甕	11.6 [5.0]	①細粒②良好③灰褐④1/5	外傾、横撫で。篦削り。	欠損。		42
28	H - 135	土師台付甕	[11.0] 10.0	①細粒②良好③明赤褐④1/4	欠損。篦削り。	脚部撫で調整。		42
29	H - 135	土 師 坏	[12,6] 3,4	①細粒②良好③明褐④完形	外傾、横撫で。篦削り。	篦削り。口縁~胴部にか!	けてスス付着分有り。	42
30	H -135	土 師 坏	[12.0] 3.4	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	内湾、横撫で。篦削り。	篦削り。立ち上がり外	面に1条の沈線。	42
31	H - 135	土 師 坏	11,4 3,3	①細粒②良好③明褐④ほぽ完形	端部直立。横撫で。篦削り。	篦削り。胴部内面にス	ス付着部分有り。	42
32	H - 135	土 師 坏	[12,4] [3,4]	①細粒②良好③橙④2/3	外傾、横撫で。篦削り。	篦削り。		42
33	H - 135	土 師 坏	13.2 3.3	①細粒②良好③橙④1/2	外傾、横撫で。篦削り。	篦削り。		42
34	H - 135	須 恵 坏	12.4 3.6	①細粒②良好③にぶい黄橙④完形	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。		42
35	H - 138	土 師 坏	[12.6] [3.8]	①細粒②良好③にぶい褐④1/4	直立、横撫で。篦削り。	欠損。	外稜。	42
36	H - 139	土師小甕	11,2 8,8	①中粒②不良③にぶい橙④4/5	外傾、横撫で。篦削り。	篦削り。	口縁部指頭痕有り。	42
37	H-139	土 師 甑	[22.6] 27.5	①細粒②良好③にぶい黄④1/4	外反、横撫で。篦削り。	篦削り。	口縁部に最大径。	42
38	H-139	土 師 坏	13.0 4.6	①細粒②良好③にぶい黄橙④ほぼ完形	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		42
39	H -139	土 師 坏	[14,2] 4.7	①細粒②良好③にぶい橙④1/3	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		42
40	H -139	土 師 蹇	17.4 [16.5]	①中粒②不良③にぶい黄橙④1/3	外反、横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部、胴部に輪積痕。	. 42
41	H -139	須 恵 坏	9,6 4,1	①細粒②良好③灰褐④3/5	内傾、轆轤。	篦削り。	外稜。	42 -
42	H-140	土 師 甕	[19.4] [8.6]	①細粒②良好③にぶい橙④1/10	外傾、横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部指頭痕。	42
43	H-140	須恵高台皿	[13.8] 3.1	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/2	外傾、轆轤。	回転糸切り未調整。		42
44	H-141	須恵高台椀	[13.8] 5.1	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/4	外傾、轆轤。	回転篦調整。	高台後付け。	42
45	H - 142	高 台 椀	[14,6] 5,4	①細粒②良好③緑灰④1/2	外傾、轆轤。	回転糸切り後撫で調整	。高台後付け。	43
46	H-142	土 師 蹇	[18, 8][16, 5]	①細粒②良好③明赤褐④1/8	外反、横撫で。篦削り。	欠損。	胴部に最大径。	43
47	H - 144	土 師 甕	[21.0] [6.5]	①細粒②良好③にぶい橙④1/10	外傾、横撫で。篦削り。	欠損。		43
48	H - 144	土 師 坏	13.0 3.9	①細粒②良好③橙④4/5	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		43
49	H -144	土 師 甕	[17.2] 9.1	①細粒②良好③にぶい橙④1/8	外反、横撫で。篦削り。	欠損。		43
50	H -145	須恵羽釜	[188] [7.5]	①細粒②極良③黒④1/20	内傾、轆轤。	欠損。	口縁部一部のみ残存。	43
51	H - 145	須恵羽釜	[20.4] 10.0	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/10	内傾、轆轤。	欠損。水平の鍔。口縁	部に「つ」状の線刻。	43
52	H-146	カワラケ	9.6 2.0	①細粒②良好③灰黄④完形	外傾、轆轤。	回転糸切り未調整。		43
53	H -146	カワラケ	9.4 1.9	①細粒②良好③灰黄④4/5	外傾、轆轤。	回転糸切り未調整。		43
54	H-147	土 師 坏	[18.6] [4.9]	①細粒②良好③橙④1/5	直立、横撫で。篦削り。	欠損。		43
55	H-147	土 師 坏	[14.8] [4.0]	①細粒②良好③橙④1/5	内斜口縁。横撫で。篦削り。	欠損。		43
56	H -148	土 師 甕	20.6 [21.5]	①中粒②不良③灰黄④1/2	外反、横撫で。篦削り。	欠損。	胴部最大径。	43
57	H-150	土 師 甕	14.6 [6.0]	①細粒②良好③にぶい橙④1/6	外傾、横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部のみ残存。	43
58	H-150	土 師 坏	[13,2] [3,4]	①細粒②良好③橙①1/3	外傾、横撫で。篦削り。	欠損。		43
59	H -150	土 師 蹇	[23,6] [9.5]	①細粒②良好③橙④1/10	外反、横撫で。篦削り。	欠損。		43
60	H-152	土 師 坩	- [15.2]	①細粒②良好③橙④3/4	欠損。横撫で。篦削り。	篦削り。胴部に不定方	向篦磨き有り。	43
61	H — 154	須 恵 坏	[10.6] 3.0	①細粒②良好③緑灰④1/5	内湾、轆轤。	欠損。	鋭い外稜。	43
62	H - 154	土 師 坏	13.9 5.3	①中粒②不良③赤褐④ほぼ完形	内斜口縁。横撫で。篦削り。	篦削り。	底部肥厚。	44
63	H - 154	土 師 坏	13.0 4.1	①中粒②良好③橙④1/2	内斜口縁。横撫で。篦削り。	欠損。	内面に放射状暗紋。	44
64	H - 154	土 師 壷	[17.6][17.8]	①細粒②良好③にぶい橙④1/3	外反、横撫で。篦削り。	欠損。	胴部に最大径をもつ。	44
65	H -154	土 師 坏	14.0 5.2	①細粒②良好③橙④1/3	内斜口縁。横撫で。篦削り。	篦削り。		44
66	H - 154	土 師 坏	[12,8] 5.3	①中粒②良好③にぶい橙④1/4	外傾、横撫で。篦削り。	欠損。	外稜。	44
67	H - 154	土 師 坏	[13.2] [5.3]	①中粒②良好③明褐④1/4	内斜口縁。横撫で。篦削り。	欠損。		44
68	H - 155	土 師 坏	13.2 [4.0]	①細粒②良好③橙④1/3	外反、横撫で。篦削り。	欠損。		44
69	H - 155	土 師 蹇	[18.6] 13.5	①中粒②不良③にぶい橙④1/6	外反、横撫で。篦削り。	欠損。		44
70	H -156	土 師 坏	12.6 4.2	①細粒②良好③橙④2/3	外傾、横撫で。篦削り。	篦削り。		44

番号	出土位置	器 形	大口 径	きさ器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成 ·	整形部	方 法	備 考	Fig
71	H-156	土師均	13.8	4.0	①細粒②良好③にぶい黄橙④完形	外傾、横撫で。篦削	b. 1	篦削り 。		44
72	H-156	須 恵 ち	12.9	3.8	①細粒②良好③灰白④1/2	外傾、轆轤。	1	回転糸切り未調整。		44
73	H-156	須恵高台を	[11.4] 4.1	①細粒②極良③明緑灰④1/2	内湾、轆轤。	1	回転糸切り後撫で調整。	高台後付け。	44
74	H-156	須 恵 も	[13, 0	3.4	①細粒②良好③灰褐④1/2	外傾、轆轤。	1	回転糸切り未調整。		44
75	H -156	須 恵 ₺	[14.6	4.6	①細粒②良好③灰白④1/3	外傾、轆轤。	1	回転糸切り後撫で調整。		44
76	H - 156	土 師 勇	[21.0][15.0]	①細粒②良好③にぶい橙④1/8	外傾、横撫で。篦削	b. 2		のみ残存。	44
77	H - 156	須 恵 畫	[18.0	[2.5]	①細粒②良好③明緑灰④1/6	轆轤。回転篦調整。	摘まみ部欠	:損。		44
78	H - 156	須 恵 』	[14, 2] 2.3	①細粒②極良③灰④1/5	外傾、轆轤。	1	回転糸切未調整。		44
79	H - 156	須恵長頸壺	£	[6.1]	①細粒②良好③緑灰④2/3	欠損、轆轤。	1	回転篦調整。	胴部に最大径。	44
80	H - 157	土 師 翌	[14.0	7.6	①細粒②良好③明赤褐④1/10	外反、横撫で。篦削	b. 2	欠損。		44
81	H - 157	須 恵 均	[12.6	3.7	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/3	外傾、轆轤。		欠損。		45
82	H-158	灰釉高台棒	i [14.0	3,3	①細粒②極良③明オリーブ灰④1/3	やや内湾、轆轤。	1	 回転篦調整。高台後付い		45
83	H - 158	土師均	[12.0	[3, 5]	①細粒②良好③橙④1/6	直立、横撫で。篦削	b .	欠損。	外稜。	45
84	H-160	土師均	10.6	3,0	①細粒②良好③橙④完形	直立、横撫で。篦削	b. 1	範削り。		45
\vdash		須恵小量	+		①細粒②良好③灰④1/3	湾曲、轆轤。		欠損。		45
86	H - 161				①細粒②良好③オリーブ灰④1/4	轆轤。回転調整。口				45
87	H - 162				①細粒②極良③明青灰④1/2	直立、轆轤。		可転篦調整。		45
\vdash	H -162		+	37,3	①細粒②良好③にぶい黄橙④ほは完形	外反、横撫で。篦削			口縁部に最大径。	45
89	H - 162		+		①中粒②良好③橙④1/3	外傾、横撫で。篦削			口縁部に最大径。	45
90	H - 163		[14.0		①細粒②良好③明赤褐④1/4	内斜口縁。横撫で。		を削り。	MANUFICAC / CLES	45
91	H-163		+	[7.0]		直立、横撫で。篦削			外稜。	45
92	H - 164		[12.8		①細粒②良好③橙④1/2	直立、横撫で。篦削		売削り。 ・	71"120	45
93	H - 165		[13.6		①細粒②良好③にぶい褐④1/2	直立、横撫で。篦削			するどい外稜。	45
			+-		①細粒②良好③にぶい橙④ほぼ完形			・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・		\vdash
94	H-165		-			欠損。		た損。脚部付け根のみれ		45
95		須恵高り		[3.3]	①細粒②良好③緑灰④少々					45
96	H-165		[13.6		①細粒②良好③橙④1/3	外傾、横撫で。篦削			外稜。	-
97	H 165			36.0	①細粒②良好③にぶい褐④5/6	外傾、横撫で。篦削			口縁部に最大径。	45
\vdash		須恵大勇	+		①細粒②良好③明褐④1/3	外領、整體。口縁部に櫛掻き液状			ale 77 i e ale ter ter 198	46
99		須恵高台梅	-	 -	①細粒②良好③オリーブ灰④1/3	外傾、轆轤。			内面に内黒処理。	46
\vdash		須恵高台	_		①細粒②良好③暗灰④1/2	外傾、轆轤。		回転糸切り未調整。高さ		46
-		内黒高台	+		①細粒②良好③にぶい橙④1/2	外傾、轆轤。		回転糸切り後撫で調整。		46
-		内黒高台	-		①中粒②良好③にぶい橙④1/5	外傾、轆轤。		回転糸切り後撫で調整。		46
		灰釉長頸雪		[15.0]	①細粒②極良③オリーブ灰④1/2	外反、轆轤。		欠損。口唇部、胴部に関		46
-		須恵高台を	-		①細粒②極良③にぶい黄橙④1/2	外傾、轆轤。		回転糸切り後撫で調整。		46
\vdash	H - 167	土師多		27.8	①細粒②良好③にぶい赤褐④1/2	外傾、横撫で。篦削			胴部に最大径。	47
\vdash			+-		①細粒②良好③にぶい赤褐④1/5	直立、横撫で。篦削			外稜。	47
\vdash					①細粒②極良③橙④6/8	外反、横撫で。篦削		脚部欠損。口縁部に輪積振		47
\vdash	-	土師小司	+		①細粒②良好③にぶい橙④1/2	直立、横撫で。篦削			口縁部に1条の沈線。	+
\vdash	-	須恵高均	+		①細粒②極良③暗灰④脚部の1/4	欠損。		欠損。脚部の一部のみタ		47
110	H-168	土 師 多	[21,0	[10.8]	①細粒②良好③にぶい黄橙④1/8	外反、横撫で。篦削		欠損。口縁部、胴部一部	部のみ残存。	47
111	H - 169	土師均	F 11.4	3.5	①細粒②良好③明赤褐④4/5	外反、横撫で。篦削		篦削り。		47
112	H - 169	土師均	[11.8	3,7	①細粒②良好③橙④3/4	外傾、横撫で。篦削	10.	篦削り。		47
113	H -169	土 師 5	[11.4	4.2	①細粒②良好③橙④7/8	直立、横撫で。篦削	10.	篦削り。	わずかに外稜。	47
114	H -169	須 恵 ち	[10.0	[3.5]	①細粒②良好③灰④1/3	内傾、轆轤。	:	欠損。	するどい外稜。	47
115	H — 169	須 恵 ょ	F [10.4	3.6	①細粒②良好③灰白④1/3	外傾、横撫で。篦削	D	欠損。		47
116	H -169	須 恵 ま	F [10.4] 4.1	①細粒②良好③オリーブ灰④3/4	直立、轆轤。		回転糸切り調整。		47
117	H - 170	須恵羽翁	[19.0	[7.0]	①細粒②良好③にぶい黄橙④1/4	内傾、轆轤。		欠損。上向きの鍔。口縁部	8の一部のみ残存。	47
118	H - 171	土 師 #	[12.8	3.7	①細粒②極良③灰褐④1/3	外傾、横撫で。篦削	10.	篦削り。		47
119	H - 171	土 師 多	[15.2	[15.5]	①細粒②良好③にぶい黄橙④1/8	外傾、横撫で。篦削	i 9	欠損。口縁部、胴部一部	部のみ残存。	47
120	H -172	土 師 ‡	[13.0	4.9	①細粒②良好③明赤褐④1/5	内斜口縁。横撫で。	飽削り。!	飽削り。		47

t Lea

番号	出土位置	器形	大きさ口径器高	①胎土 ②焼成 ③色調 ④残存	成・整形 日 径・胴 部	方 法 底 部	備考	Fig
121	H -173	土 師 坏		①細粒②極良③橙④4/5	直立、横撫で。篦削り。	篦削り 。		47
			[17,2] 5,4	①細粒②良好③橙④1/2	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		47
\vdash		土師坏		①細粒②極良③橙④4/5	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。		47
-		土師高坏		①細粒②良好③にぶい橙④1/3	欠損。	篦削り。	脚部のみ残存。	47
\vdash	H-175		[13.8] 3.9	①細粒②極良③橙④1/3	外反、横撫で。篦削り。	篦削り。	ATT 1777-213 6	48
-		土師坏	-	①中粒②良好③にぶい黄橙④完形	内湾、横撫で。篦削り。	篦削り。	底部にスス付着部分有り。	+-
				①細粒②良好③橙④1/3	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。	がいかに入り、日本中の 400	48
-		須 恵 盤		①細粒②良好③明オリーブ灰④1/5	外傾、轆轤。	回転糸切り後調整。		48
-				①細粒②良好③にぶい黄橙④1/4	内傾、轆轤。	欠損。上向きの鍔。口i	縁郊の一郊の五碓方	-
-		土 師 坏		①細粒②良好③橙④5/6	外傾、横撫で。篦削り。	篦削り。	不明瞭な外稜。	48
		土師小甕						+ -
				①中粒②不良③明赤褐④完形	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。底部肥厚。	胴部に輪積痕。	48
\vdash		土師坏		①細粒②良好③にぶい橙④1/3	外傾、横撫で。篦削り。	節削り。	口縁部指頭痕。	48
 		土師坏		①細粒②良好③明赤褐④1/2	外傾、横撫で。篦削り。	節削り。		48
		須恵高台椀		①細粒②良好③灰白④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台後付け。	48
\vdash		須恵高台椀		①細粒②良好③灰白④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台後付け。	48
		須恵高台皿		①細粒②良好③明青灰④1/4	外傾、轆轤。	欠損。	高台後付け。	48
			[14.2] 3.8	①細粒②良好③灰白④1/3	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台後付け。	48
138	H - 181	須恵高台椀	14.2 6.0	①細粒②良好③灰④1/2	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台後付け。	48
139	H 181	須恵高台椀	15.0 5.3	①細粒②良好③灰白④1/4	外傾。轆轤。	欠損。	高台後付け。	48
140	H - 181	灰釉高台椀	[14.4] 4.2	①細粒②極良③明オリーブ灰④1/4	内湾、轆轤。回転糸切り後撫	で調整。内面、外面に希	薬刷毛塗り。	48
141	H - 181	須 恵 坏	13,8 4,0	①中粒②不良③にぶい黄橙④完形	外傾。轆轤。回転糸切り未調	整。高台後付け。内面黒	色処理。	48
142	H-181	須恵高台椀	15.6 4.6	①細粒②良好③暗青灰④2/3	外傾、轆轤。	回転糸切り未調整。	内面、外面黑色処理。	48
143	H - 181	須恵高台椀	14.4 5.1	①細粒②極良③にぶい橙④2/3	外傾。轆轤。	回転糸切り未調整。	高台後付け。	49
144	H-181	土 師 甕	[18.4][11.5]	①細粒②良好③にぶい褐④1/10	外傾、横撫で。篦削り。	欠損。	口縁部指頭痕。	49
145	H-181	土師台付甕	- 4,5	①細粒②良好③にぶい赤褐④脚部のみ	欠損。脚部のみ残存。	脚部横撫で。篦削り。		49
146	H-184	須 恵 蓋	[16,4] 3,8	①細粒②良好③オリーブ灰④1/2	轆轤。回転篦調整。摘まみ部	無で調整。偏平な円形描	育まみ。口唇部に返し。	。49
147	H -185	土 師 坏	13.8 5.5	①細粒②良好③明赤褐④5/6	外反、横撫で。篦削り。	篦削り。胴部に輪積痕.	。外稜。	49
148	H-185	土 師 甕	[28, 4][12, 0]	①細粒②良好③赤褐④1/5	欠損。	篦削り。	底部のみ残存。	49
149	H-186	須 恵 夔	[37.0] [9.0]	①細粒②良好③暗緑灰④少々	外反。轆轤。櫛掻き波状文。	欠損。		49
150	H-187	土 師 坏	12.6 3.6	①細粒②良好③明褐④1/2	直立、横撫で。篦削り。	篦削り。	内面、内黑処理。	49
151	H-187	土 師 坏	13.0 [3.5]	①細粒②良好③橙④1/4	直立、横撫で。篦削り。	欠損。		49
152	H - 187	須 恵 坏	[12,4] 3,7	①細粒②良好③にぶい橙④1/2	外傾、轆轤。	回転糸切り未調整。		49
153	H-187	須 恵 坏	[12.8] 3.6	①細粒②良好③明オリーブ灰④1/3	外傾、轆轤。	回転糸切り未調整。		49
154	W-10	カワラケ	10.4 3.3	①細粒②良好③浅黄橙④完形	外傾、轆轤。回転糸切り未調		∟ ぶ分有り。	49
155		灰釉高台椀	[1.0] 7.0	①細粒②良好③灰白④1/6	欠損。	回転篦調整。内面に僅		49
156				①細粒②良好③浅黄④1/8	内傾、轆轤。	欠損。水平の鍔。口縁		49
157	W-11			①細粒②良好③にぶい橙④?	隆帯、三つ巴紋。桐紋。			49
158	W-11		[13.6] 8.3	①中粒②良好	先端部溶解。基部の開き少な	- く縦位の凹状の強い撫用	L ジ成。重さ495g。	49
159	W-11			①細粒②良好③暗灰④1/5	外傾。轆轤。	欠損。		49
160		灰釉高台皿		①細粒②良好③オリーブ灰④1/3	外傾、轆轤。	回転篦調整。	転用硯 釉薬浸し漬け。	
161	W-12			①細粒②良好③明赤褐④1/3	外傾、横撫で。篦削り。	篦削り。	坏部に外稜。	49
162	W-12			①細粒②良好③にぶい黄橙④1/2	外反、横撫で。篦削り。	節削り。胴部に輪積痕		50
163				①細粒②良好③明オリーブ灰④1/10	内傾、轆轤。	欠損。平行な鍔。口縁		50
164		須恵壷		①細粒②良好③灰白④1/10	欠損。轆轤。撫で。	底部後付け。	内面轆轤。	50
		須恵大甕		①細粒②極良③青灰④1/2	外反、轆轤。無く。			+
100	D - 69	炽心八號	40.0 [14.3]	UMUNE (A)型及 (B) 月次(4)1/2	ット外、概幅。ット四十11にださ。	アコフト川、日奈和。内田	1月1年仅。 胴部取入住。	3 00

- 注)表の記載は以下の基準で行った。
 - ①胎土は、細粒 (0.9mm以下)、中粒(1.0~1.9mm以下)、粗粒(2.0mm以上)とした。
 - ②焼成は、極良、良好、不良の三段階。
 - ③色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帖 (小山・竹原1976)によった。
 - ④大きさの単位はcmであり、現存値を[]、復元値を()で示した。

Tab. 3 臼 玉 観 察 表

番号	出土位置	幅	厚さ	重さ	石材	番号	出土位置	幅	厚さ	重さ	石材	番号	出土位置	幅	厚さ	重さ	石材	番号 出土位置	幅	厚さ	重さ	石材
1	H - 132	1,1	0.6	1.1	滑石	51	H-166	0.8	0.4	0.3	滑石	10	H-167	0.8	0.6	0.6	滑石	151 D - 79	0.8	0.3	0.3	滑石
2	H - 132	1,3	0.8	1.7	滑石	52	H - 166	0.8	0.2	0.2	滑石	10:	2 H - 167	0.8	0.3	0.2	頁岩	152 D - 80	0.8	0.2	0.1	頁岩
3	H-162	0,9	0.3	0.2	頁岩	53	H - 166	0.8	0.2	0.1	滑石	10	B H − 1.68	0.9	0.5	0.4	頁岩	153 D - 80	0.7	0,5	0.4	滑石
4	H-162	0.8	0.3	0.3	滑石	54	H - 166	0.8	0.1	0.1	滑石	10	4 H - 168	0.8	0.3	0.3	滑石	154 D - 80	0.8	0.5	0.4	滑石
5	H-164	0.8	0.4	0.4	滑石	55	H-166	0.8	0.3	0.2	滑石	10	5 H − 178	0.6	0.3	0.2	滑石	155 D - 89	0.7	0.3	0.2	頁岩
6	H-164	(0,8)	0.5	0.1	滑石	56	H - 166	0.8	0.6	0.5	滑石	100	6 H - 180	0.6	0.5	0.3	滑石	156 D - 102	0.9	0.3	0.3	頁岩
7	H-164	0.8	0.6	0.5	滑石	57	H - 166	1.0	0.6	0.7	滑石	10'	7 A区表採	0.7	0.3	0.2	滑石	157 D - 102	0.8	0,2	0.2	頁岩
8	H-164	0.8	0.5	0.6	滑石	58	H - 166	0.7	0.6	0.4	滑石	10	8 B区表採	0.7	0.3	0.2	滑石	158 D - 102	0.8	0.2	0.2	頁岩
9	H-164	0.8	0.3	0.05	滑石	59	H - 166	0,8	0.2	0.2	頁岩	10	D区表拼	0.8	0.5	0.5	頁岩	159 D -102	0.8	0,3	0,3	頁岩
10	H-164	0.7	0.3	0.2	頁岩	60	H - 166	(0,8)	0.1	0.05	頁岩	110	D区表拼	0,9	0.6	0.6	頁岩	160 D - 102	0.8	0.4	0.3	頁岩
11	H-164	0.5	0.1	0.05	頁岩	61	H-166	0.8	0.3	0.2	頁岩	11	D区表探	0.8	0.4	0.3	頁岩	161 D - 102	0.9	0.4	0.4	頁岩
12	H-164	0,8	0.5	0.5	滑石	62	H-166	0.8	0.5	0.4	頁岩	11:	D区表探	0.8	0.5	0.5	頁岩	162 D - 102	0.9	0.6	0.5	頁岩
13	H-164	0.7	0.5	0.3	滑石	63	H - 166	0.8	0.2	0.2	頁岩	113	D区表挤	0.8	0.3	0.3	頁岩	163 D - 102	0.8	0.5	0.4	頁岩
14	H-164	0.8	0.4	0.2	頁岩	64	H-166	0.8	0.5	0.4	滑石	114	4 D区表挤	0.8	0.3	0,1	頁岩	164 D - 102	0.8	0,4	0,4	頁岩
15	H-164	0,8	0,4	0.4	滑石	65	H-166	0,8	0.4	0,3	滑石	113	D区表挤	1.2	0.7	1.0	滑石	165 D - 102	0.9	0.6	0.5	頁岩
	H - 165	0.9	0.3	0.3	頁岩		H-166		0.4	0.4	滑石		D区表探		0.7	0.6	滑石	166 D - 102	0.8	0,5	0.3	頁岩
	H - 165	0.8	0.3	0.2	頁岩		H-166		0.4	0.3	頁岩		7 D区表探		0.4	0.3	滑石	167 D - 102	0.9	0.9	0.4	頁岩
18	H-165	0.8	0,2	0,2	滑石	68	H-166	0.8	0.2	0.2	頁岩	118	3 D区表採	0.8	0.4	0.4	滑石	168 D - 102	0.8	0,5	0.4	頁岩
	H-165	0,8	0,3	0, 25	頁岩		H-166	0.7	0.4	0.4	滑石		D区表採		0.4	0.3	滑石	169 D - 102	0.8	0.3	0.3	頁岩
	H - 165	0.7	0.3	0,2	頁岩		H-166		0.1	0.2	頁岩	·	D区表拼		0.3	0.1	滑石	170 D - 102	0.9	0.4	0.3	頁岩
ļ	H - 165	0.9	0.5	0.5	頁岩		H-166		0.1	0.1	真岩		1 D区表探		0.5	0.3	滑石	171 D - 102	0.8	0,3	0.1	頁岩
22	H - 165	0.8	0, 2	0.1	頁岩		H-166		0.2	0.2	負岩		2 D区表拼		0.1	0.1	頁岩	172 D - 102	0.8	0.3	0.2	頁岩
23	H - 165	0,8	0, 1	0.05	頁岩	ļ	H-166		0.3	0.1	頁岩		3 D区表探		0.2	0.1	頁岩	173 D - 102	0.8	0.3	0.2	頁岩
24	H - 165		0.7	0.6	頁岩		H-166		0, 2	0.1	頁岩		1 D区表拼			0,1	頁岩	174 D - 102	0,9	0.3	0.2	頁岩
25	H - 165		0.4	0.25	頁岩		H -166		0.6		滑石		D区表探			0.05	頁岩	175 D - 102	0,8	0, 2	0.2	頁岩
26	H - 165		0.3	0.2	頁岩	····	H - 166		0.2	0.1	頁岩		3 D区表探			0.05	頁岩	176 D - 102	0.8	0.3	0.2	頁岩
27	H - 165		0.5	0.5	滑石	·	H-166		0.4	0.3	滑石		7 D区表探			0.05	頁岩	177 D - 102	0.8	0, 2	0.1	頁岩
	H - 165		0.2	0.2	頁岩 頁岩		H-166		0.5	0.4	滑石		D区表拼		0.2	0.05	頁岩 頁岩	178 D - 102	0.7	0, 2	0.1	頁岩
29	H - 165 H - 165	0.8	0.3	0.3	頁岩		H - 166 H - 166		0.3	0.3	滑石		D区表排 D区覆土	·	0.6	0.4	頁岩	180 D - 102	0.8	0, 2	0.1	頁岩
			0.4	0.3	頁岩		H-166		0.4	0.3	滑石		1 D区覆土	 	0.4	0.4	頁岩	181 D - 102	0.8	0, 2	0.05	頁岩
ļ	H - 165	0.8	0.4	0.4	頁岩		H - 166		0.5	0.4	滑石		2 D区覆土		0.3	0.2	頁岩	182 D - 102	0.9	0.5	0,3	滑石
	H - 165	0.7	0, 2	0.1	頁岩		H - 166		0.5	0.4	滑石		B D区覆土	+	0.5	0.6	滑石	183 D - 102	0.8	0.5	0.4	滑石
	H - 165	0.8	0.3	0, 25	頁岩		H - 166		0.3	0.4	滑石		4 D区覆土		0.5	0.5	滑石	184 D - 102	0.8	0.6	0.4	滑石
ļ	H - 165	0.8	0.3	0.20	頁岩		H - 166		0.5	0.5	滑石		D区覆土	ł	0.4	0.3	滑石	185 D - 102	0.8	0, 4	0,3	滑石
	H - 165	0.9	0.2	0, 2	頁岩		H - 166	0.9	0.5	0.5	滑石		D区覆土		0.3	0.2	滑石	186 D - 102	0.7	0,5	0.4	滑石
	H - 165		0,5	0,5	頁岩		H-166		0.4	0.4	 滑石		7 D区覆土		+	0, 2	滑石	187 D - 102		0, 5	0,1	滑石
I	H - 165			0.3			H-166					ļ	B D区覆土			0.1		188 D - 102		0.4	0,3	
	H - 165		0.4		滑石	h	H - 166		0.3		滑石		D区覆土				t	189 D - 102		0.5	0.5	+
40	H - 165	0.8	0,2	0, 2	頁岩	·	H - 166		0,5		滑石		D区覆土		0.2	0.1	滑石	190 D - 102	0.9	0.4		滑石
····	H - 165		0,2	0,2	頁岩	91	H - 166	(0,8)			滑石		1 D区覆土		+		滑石	191 D - 102		0,6		滑石
42	H - 165	0.8	0.2	0.3	頁岩	92	H-166	0.8	0.5	0.3	頁岩	14:	D区覆土	(0,8)	0.1	0.05	滑石	192 D 102	0.8	0.7	0.5	滑石
43	H-166	0.7	0.1	0,1	頁岩	93	H-166	0.7	0.3	0.2	頁岩	14;	D区覆土	(0.9)	0.1	0.05	滑石	193 D - 102	0.8	0.6	0.5	滑石
44	H - 166	0.9	0.5	0.5	滑石	94	H-166	0.7	0.3	0.2	頁岩	144	1 D - 78	0.8	0.2	0,2	頁岩	194 D - 102	0.9	0.6	0.6	滑石
45	H - 166	0.8	0.3	0, 2	頁岩	95	H-166	0.8	0.3	0,2	頁岩		5 D - 79		0.4	0.3	頁岩	195 D - 102	0.9	0.4	0.5	滑石
46	H - 166	0.8	0.2	0.1	頁岩	96	H - 166	0.7	0.2	0.1	頁岩	140	6 D - 79	0.9	0.5	0,5	滑石	196 D - 102	0.8	0.5	0.5	滑石
47	H-166	(0,8)	0.1	0.05	頁岩	97	H-166	0.7	0.5	0.05	頁岩	14	7 D - 79	0.9	0.6	0.6	滑石	197 D - 102	0.8	0.5	0.5	滑石
48	H - 166	0,7	0,3	0.2	頁岩	98	H-166	(0.9)	0.3	0.2	滑石	14	B D - 79	0.7	0.6	0.5	滑石	198 D - 102	0.8	0.6	0.4	滑石
49	H-166	0.8	0.4	0.3	滑石	99	H-167	0.8	0.2	0,5	頁岩	149	D - 79	0.8	0.5	0.4	滑石	199 D - 102	0.9	0.5	0.4	滑石
50	H-166	0.9	0.1	0.2	頁岩	100	H-167	0.9	0.4	0.4	滑石	150	D - 79	0.8	0.5	0.3	滑石	200 D - 102	0.9	0,5	0,5	滑石

	番号	出土位置	幅	厚さ	重さ	石材	番号	出土位置	幅	厚さ	重さ	石材	番号	出土位置	幅	厚さ	重さ	石材	番号	出土位置	幅	厚さ	重さ	石材
ľ	201	D-102	0.8	0.4	0.2	滑石	208	D-102	0.9	0.5	0.5	滑石	215	D - 102	0.7	0.2	0.05	滑石	222	X 43 Y 54	0.7	0.5	0.3	頁岩
	202	D-102	0.9	0.3	0.3	滑石	209	D-102	0.9	0.3	0.3	滑石	216	D-102	(0,8)	0.1	0.05	滑石	223	X 43 Y 54	0.8	0.1	0.05	頁岩
Ì	203	D-102	0,8	0.5	0.3	滑石	210	D-102	0.8	0.3	0.2	滑石	217	D-102	(0.7)	0.1	0.05	頁岩	224	X 43 Y 55	0.8	0.4	0.3	頁岩
Ì	204	D-102	0.9	0.3	0.3	滑石	211	D-102	0.8	0.2	0.1	滑石	218	W - 12	1.5	0.8	2.3	滑石	225	X 44 Y 54	0.8	0.4	0.3	滑石
Ì	205	D - 102	0.9		0.4	滑石	212	D-102	0.8	0.3	0.2	滑石	219	X 43 Y 54	0.9	0.4	0.4	滑石	226	X 44 Y 55	0.7	0.4	0.4	滑石
İ	206	D-102	0.9	0.4	0.4	滑石	213	D-102	0.8	0.3	0.1	滑石	220	X 43 Y 54	0.7	0.4	0.2	滑石	227	X 44 Y 55	0.7	0.4	0.3	滑石
Ì	207	D-102	0.8	0.4	0.2	滑石	214	D-102	0.7	0, 2	0,05	滑石	221	X 43 Y 54	0.8	0.4	0.3	頁岩						

注)表の記載で、幅と厚さの単位はcm、重さはgであり、復元値は()で示した。

Tab. 4 石製模造品観察表

番号	出土位置	器 種	長さ	幅	厚さ	重さ	石	材	備考
1	H - 133	不 明	2.1	1.9	1.0	6.0	滑	石	刀子削りで成形。
2	H - 142	勾 玉	2.0	1.9	1.2	5.8	滑	石	やや厚手の勾玉と思われる。
3	H - 148	勾 玉	4.0	2.5	0.6	6.0	頁	岩	上・下端部欠損。自然面が残る。裏面に斜方向の磨き。
4	H - 165	剣形品	4.0	2.0	6.0	4.8	滑	石	表裏両面に斜方向の磨き。
5	H - 165	勾 玉	2.7	1.9	0.6	2.0	頁	岩	側面に磨き。表面は自然面を利用。 穿孔あり。
6	H - 165	剣形品	5.1	2.1	0.9	6.1	滑	石	双孔。弱い磨き。
7	H - 166	勾 玉	1.9	1.6	0.5	2.0	頁	岩	下部のみ残存。表裏に弱い磨き。
8	H - 166	剣形品	2.4	1.1	0.5	1.4	滑	石	上部半部残存。
9	H - 165	勾 玉	2.0	1.7	0.6	1.1	頁	岩	下部のみ残存。表裏面に弱い磨き。
10	H - 169	勾 玉	1.8	1.3	0.4	1.4	滑	石	小型の勾玉。表裏両面に斜方向の磨き。
11	H - 177	有孔板	1.1	1.2	0.3	0.6	滑	石	勾玉か剣形品と思われる。穿孔あり。
12	D ~- 83	剣形品	5.5	3.1	0.8	19.2	滑	石	上端・下端部欠損。双孔。表裏両面に磨き。
13	D - 102	有孔板	2.4	1.5	0.8	3.4	滑	石	穿孔あり。剥離が著しく加工面は上部のみ。
14	D区表採	有孔板	2,2	1.0	0.4	1.0	滑	石	表裏両面にすり。穿孔あり。
15	X 4 4 Y 5 5	勾 玉	2.7	1,7	0.4	1.4	頁	岩	小型の勾玉。穿孔あり。 2 片を接合。
16	X44Y55	有孔板	2.1	2.5	0.5	3.3	頁	岩	穿孔あり。ほぼ正方形と思われる。
17	D - 102	剣形品	2.1	2.0	0.6	2.5	滑	石	上部のみ残存。表裏面に斜方向の磨き。穿孔あり。
18	D区表採	勾 玉	2.7	2.3	0.3	1.9	頁	岩	上・下端部欠損。表面に弱い磨き。

注)表の記載で、大きさと重さについての単位はcmとgである。

Tab. 5 鉄器観察表

番号	出土位置	器形	長さ	幅	厚さ	残存	備考
1	H - 132	釘	[8.6]	1.6	0.6	4 / 5	先端部欠損。頭部形状折頭式の角釘。
2	H - 1 3 3	釘	[7.5]	[0.5]	0.5	2 / 3	頭部欠損。やや偏平化した角釘。
3	H - 135	鉄 鏃	8.7	2.9	0.6	完 形	有頸腸抉長三角形鏃。
4	H - 152	釘	7.9	1.5	0.6	完 形	角釘。頭部形状折頭式。平らな先端部。
5	H - 162	鉄 鏃	3.9	0.2	0.2	完 形	無頸腸抉長三角形鏃。中央に穿孔を有する。
6	H - 184	刀 子	[7.5]	1.6	0.4	2 / 3	先端部、茎部欠損。断面逆三角形。茎部が細くなる。
7	W - 11	留 金 具	[3.8]	0.7	0.5	2/3	ねじれ状の金具。
8	W - 12	釘	[5.7]	[0.6]	0.5	2/3	先端部、頭部欠損。角釘。
9	H - 181	刀子の柄	[6.2]	0.7	0.4	2/3	偏平化している。刀子の柄にあたると思われる。
10	H - 181	釘	[7.2]	[0.8]	0.6	4 / 5	角釘。頭部欠損。木質部付着。
11	H - 157	刀	29.6	3.4	0.7	完 形	刃部に木質部付着。鞘に収められた状態と考えられる。

注)表の記載で、大きさについての単位はcmであり、現存値は[]で示した。

Tab. 6 瓦 観 察 表

				胎	土	焼	成		成		;	技	法		3	整	形	支	去		
No.	出土地	瓦の 種別	厚さ (cm)	+ bl.	-t-tuli-side	焼き	∠ . □ FR	粘土片	反剥取	作り	桶寄	粘土版	布の	山目	轆轤	no ese	布の	擦消	側部	摘	要
		(里力)	(cm)	素地	夾雑物	上り	色調	凹面	凸面	1119	木痕	合せ目	合せ目	, HI H	痕	凹面	凹面	凸面	面取		
1	H-133	女瓦	1.8	並	少	硬	暗灰	Ó	_	桶卷	0	-	_	_	0	轆載	t –	_	2	秋間	乗附
2	H-133	女瓦	1.5	密	少	硬	白灰	0	_	桶巻	0	_	_	_	0	轆轤	-	-	2	秋	間
3	H-133	鎧瓦	2.7	密	少	硬	暗灰	_	_	桶卷	_	-	_	_	_	_	-	_	-	秋	頭
4	W - 12	男瓦	1.5	密	少	締	鈍橙	0	-	半截	_	_	_	_	0	轆 報	i –	_	2	秋	間
5	W - 11	男瓦	1.2	密	少	締	暗灰	-	-	半截	_	-	-	_	0	轆==	t -		端 1	秋	闓
6	W - 9	女瓦	2.0	粗	多	締	灰	_		桶巻	0	_	_		0	轆載	0	-	端 2	秋	置
7	W - 9	女瓦	1.5	密	少	締	暗灰	0	-	桶巻	0	ΟZ	_	_	0	轆 甎	-	_	1	秋	間
8	W - 9	女瓦	1.6	密	少	締	暗灰	0	-	桶卷	0		_	正格	0	轆 転	-	_	1	秋	間
9	W - 11	女瓦	2.4	密	少	締	灰	-	_	ーか	_	_	_	縄密	_	_	_	_	1	秋	間
10	W - 9	女瓦	1.5	密	少	締	灰	_	-	一か	_	-	-	縄密	_	轆 「	i –	-	端 1	秋	間
11	W - 11	女瓦	1.9	密	少	硬	灰	-	_	一か	-	-	-	縄T	0	背捕	<u></u>	_	端布目	秋	間
12	W - 11	女瓦	2.1	密	少	硬	灰	-	-	ーか		_	_	縄単		-			端 1	笠	懸
13	W - 12	女瓦	1.7	密	少	締	暗灰	0	_	桶卷	0	ΟZ	-	_	0	轆載	<u> </u>	_	2	秋	間
14	W - 1 2	女瓦	1.7	並	多	並	灰		_	一か	_	_	_	-	_	縦推	E	_	_	乗附	藤岡
15	W - 12	男瓦	2.1	密	少	締	白灰	-	-	半截	_	ΟZ	-	_	0	轆載	T	-	2	吉	井
16	Ŵ − 1 0	男瓦	1.5	密	並	硬	黒灰	_	_	半截	_	-	-	. –	0	轆輌	T	_	3	秋	間
17	W - 11	女瓦	1.7	密	少	締	灰	-	_	桶卷	0	-	-	斜格	0	轆輪	T	-	_	秋	間
18	W - 12	鎧瓦	4.0	密	少	硬	暗灰	_	-	_		-	-	_	_	縦篦貨	J - ·	_	-	秋	間
19	W - 11	女瓦	1.7	密	少	締	暗灰	_	_	桶卷	_	OS	_	-	0	轆載	-		3	秋	間
20	W - 12	女瓦	1.5	密	少	締	暗灰	_	-	桶巻	0	_	_	_	0	轆蒻	t –	_	2	秋	間
21	W - 11	女瓦	1.9	粗	並	軟	黄灰	_	_	一か	_	_	÷	_	-	縦篦擦	.		3	乗附	藤岡
22	W - 12	男瓦	2.4	粗	多	並	暗灰	-		半か		_	-	_	-	撫	_	_	3	秋	間
23	W - 12	女瓦	1.8	縆	少	締	灰	_	_	桶卷	0	OZ	_	_	0	轆 朝	-	_	2	秋	間
24	W - 12	男瓦	1.2	奢	少	締	暗灰	_	_	半截	-	_	_	-	0	轆巾	<u> </u>	_	_	秋	間
25	W - 10	女瓦	1.8	密	少	硬	灰白	0	-	桶卷	0	ΟZ	_	_	0	轆載	T		1	秋	間
26	W - 12	男瓦	1.5	密	少	締	黒灰	-		半截		-	_	_	0	轆 朝	-	_	-	秋	間

※正格=正格子叩き 一か=一枚作りか 半截=半截作り 斜格=斜格子 縄密=縄目密の叩き 縄T=縄密「T」字状 端布目=端部側に布目の圧痕がある 縄単=縄目叩き

Tab. 7 石器·石製品観察表

番号	出土位置	器 種	長	幅	厚 重	iż	石	材	備考
1	X 44 Y 54	石 鏃	3.3	1.7	0.5	0.8	チャ	- h	凹基無茎鏃。
2	X 46 Y 25	石 鏃	[2.8]	1.8	0.4	2.0]	頁	- 岩	平基無茎鏃。先端部欠損。
3	X 39 Y 55	打製石斧	11.9	6,3	2.4 17	70	黒 色	頁 岩	分胴形。両側縁から刃部にかけて細かい調整。
4	W - 12	板 碑	[13.0]	[4.4]	2.1 2	50	緑 泥	変 岩	『貞治?年』(北朝1362~1368年) の刻み。
5	D - 53	石製品	8.7	4.7	4.2 7	70	角閃石	安山岩	4 本足の動物を模したものか?二ッ岳軽石を削り製作。
6	W - 12	砥 石	[7.7]	4.3	2.2 [12	20]	砥 涉	- 石	全ての側面に使用痕が認められる。
7	H-167	砥 石	[3.7]	[6.4]	3.6 [8	30]	砥涉	岩岩	表の両側面に使用痕が認められる。
8	H - 133	砥 石	5.0	2.2	2.2 1	10	角閃石	安山岩	二ツ岳軽石を使用。全ての側面に使用痕が認められる。小型な砥石。
9	H-170	紡錘車	4.3	4.4	2.1 2	20	角閃石	安山岩	二ツ缶軽石を使用。
10	W - 11	凹石	[8.3]	[7.1]	4.2 [22	20]	粗粒多	计岩	表面にゆるやかな凹。
11	H - 142	石製品	5.5	4.6	3.5 4	15	角閃石	安山岩	二ッ岳軽石。上部に水平・垂直方向の円孔有する。紐を通したと見られる痕が認められる。

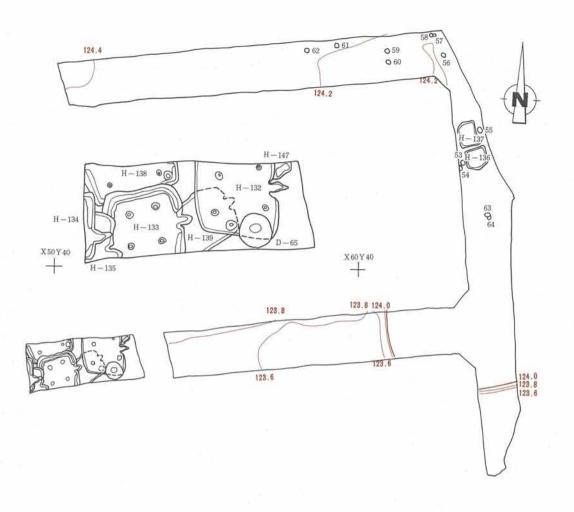
注)表の記載で、大きさと重さについての単位はcm、gであり、現在値は[]で示した。

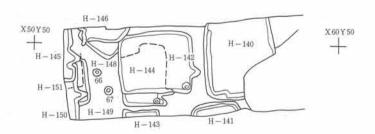
Tab. 8 縄文式土器観察表

番号	出土位置	①胎 土 ②焼 成 ③色 調 ④残 存	文 様 要 素・文 様 構 成・器形の特徴	備考
1	X 39 Y 81	①細粒②良好③にぶい橙④口縁	隆带。微隆起。縄文(RL)。	加曽利E3
2	X 39 Y 81	①中粒②良好③褐④口縁	縄文(RL)。微隆起。縄文充填。口縁部無文帯。	加曽利E4
3	X 39 Y 81	①細粒②極良③橙④口縁	縄文(RL)。磨消縄文帯。	加曽利E4
4	X 39 Y 81	①中粒②良好③橙④口縁	横位沈線。微隆起。 0 段多条による縄文 (LR)。	加曽利E3
5	X 39 Y 81	①中粒②良好③黄褐④口縁~胴部	隆帯による渦巻文。沈線区画中に縄文(RL)を充填。磨消縄文帯。	加曽利E3
6	X 39 Y 81	①中粒②良好③橙④口縁~胴部	5 単位の突起。2 本 1 組の微隆起帯による渦巻文。逆U字区画中に縄文(R L)を充填。	加曽利E3
7	X 39 Y 81	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁	隆帯。口唇肥厚。	加曾利E3
8	X 39 Y 81	①中粒②極良③にぶい赤褐④口縁	横位沈線。沈線区画内に縄文(RL)を充填。	加曽利E3
9	X 39 Y 81	①細粒②極良③橙④口縁部	沈線による逆U字区画内に縄文(RL)を充填。	加曽利E3
10	X 39 Y 81	①細粒②良好③橙④口縁	2本の徴隆起。縄文(R L)を充填。	加曽利E3
11	X 39 Y 81	①中粒②良好明褐④口縁	微隆起。縄文 (RL)。	加曽利E3
12	X 39 Y 81	①中粒(雲母)②良好③にぶい黄橙④口縁	微隆起。縄文(LR)。渦巻文。	加曽利E3
13	X 39 Y 81	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁	縄文(RL)。隆帯。	加曽利E3
14	X 39 Y 81	①中粒②良好③橙④口縁	2 本沈線による磨消縄文帯。地文にまばらな縄文 (RL)。	加曽利E4
15	X 39 Y 81	①中粒②良好③にぶい橙④口縁	沈線。上段は横位施文による縄文(RL)で、下段は縦位施文による縄文(RL)で羽状構成。	加曽利E3
16	X 39 Y 81	①中粒②極良③明褐④口縁~胴部	横位沈線。2本1組の微隆起帯による渦巻文中に縄文(LR)を充填。	加曽利E3
17	X 39 Y 81	①中粒②良好③明褐④口縁	微隆起。縄文(RL)。	加曽利E3
18	X 39 Y 81	①中粒②良好③橙④口縁	隆带。沈線。	加曾利E3
19	X39Y81	①細粒②極良③明赤褐④口縁	微隆起。渦巻文。縄文(RL)を充填。	加曽利E3
20	X39Y81	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁	隆帯。沈線。	加曽利E3
21	X 39 Y 81	①中粒②良好③橙④口縁	隆带。	加曽利E3
22	X39Y81	①細粒②良好③明赤褐④口縁	徴隆起。沈線区画中に縄文(LR)。充填。	加曽利王3
23	X 39 Y 81	①細粒②良好③にぶい橙④口縁	沈線。地文に縄文(RL)を充填。	加曽利E3
24	X 39 Y 81	①細粒②良好③にぶい橙④口縁	隆帯。沈線。縄文(RL)。縄文充填。	加曾利E3
25	X 39 Y 81	①中粒②良好③にぶい黄橙④口縁	横位沈線。櫛歯状工具による条線文。	加曽利E3
26	X 39 Y 81	①中粒②良好③橙④口縁	櫛歯状工具による条線文。	加曽利E3
27	X 39 Y 81	①中粒②良好③黄褐④口縁~胴部	横位沈線。櫛歯状工具による条線文。	加曽利E3

注)表の記載は以下の基準で行った。

- ①胎土は、細粒 (0.9 mm以下)、中粒 $(1.0 \sim 1.9 \text{mm}$ 以下)、粗粒(2.0 mm以上)とし、特徴的な鉱物が入る場合に鉱物名を記載した。 ②焼成は、極良・良好・不良の三段階。
- ③色調は土器外面で観察し、色名は新版標準土色帳(小山・竹原1976)によった。





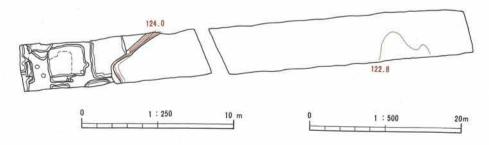


Fig. 15 遺跡・遺構全体図 (A・B区)

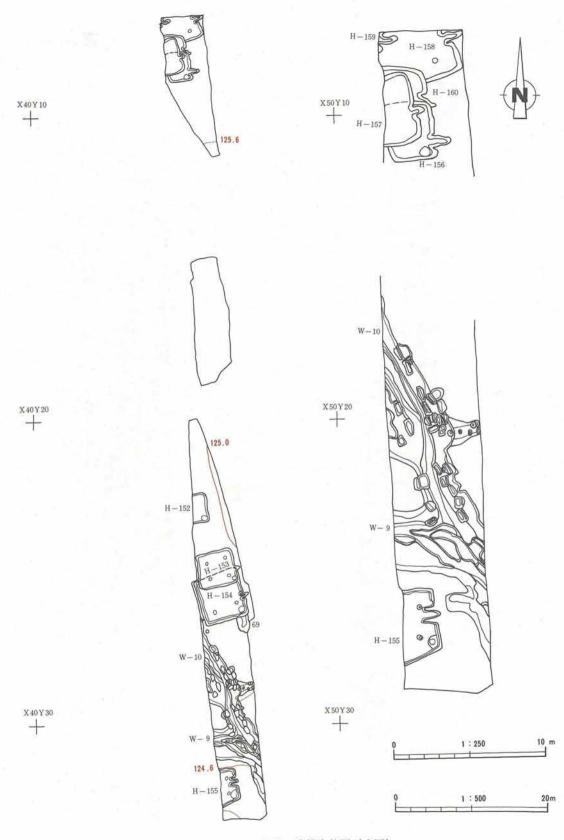


Fig. 16 遺跡・遺構全体図 (C区)

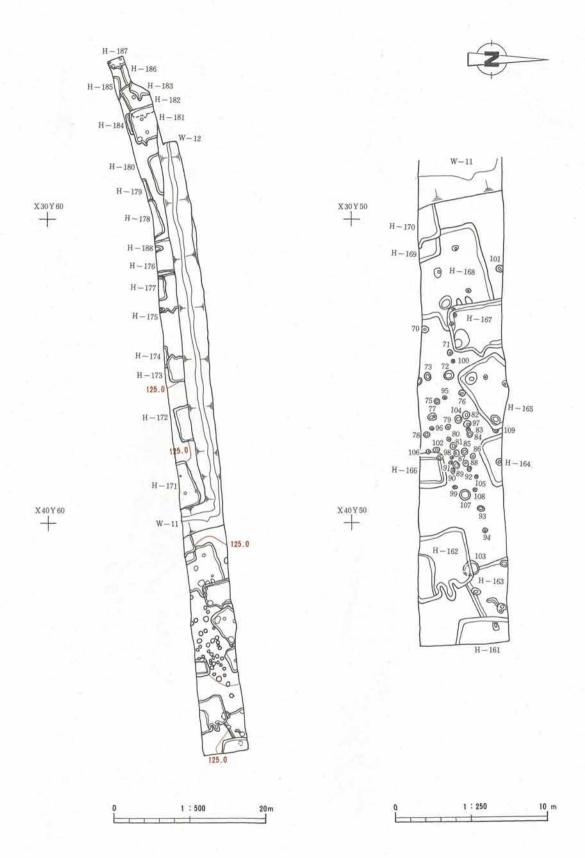


Fig. 17 遺跡・遺構全体図 (D区)

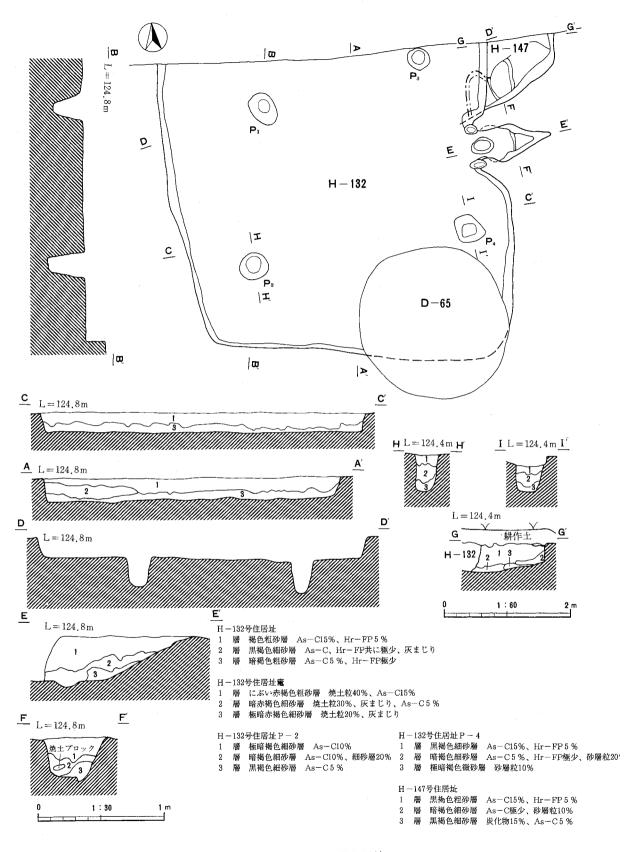


Fig. 18 H-132・147号住居址

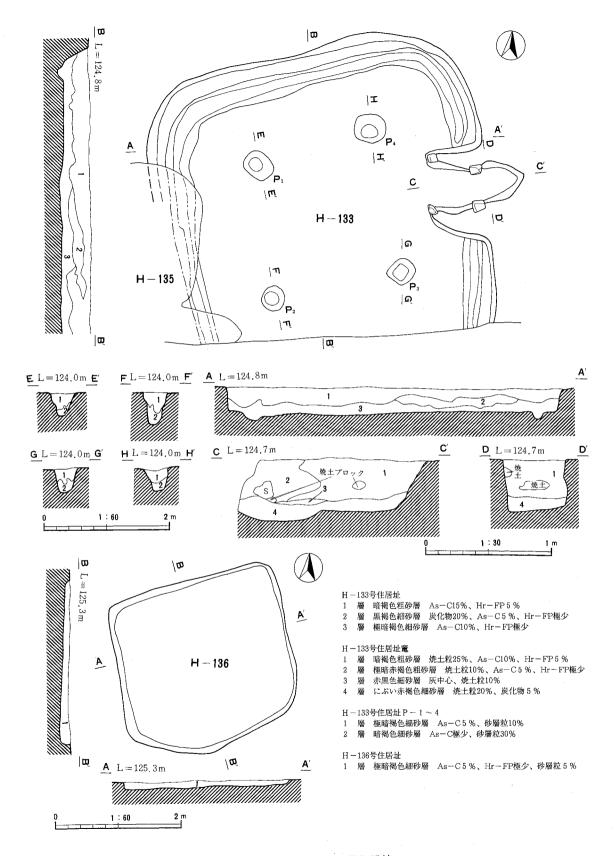


Fig. 19 H-133, 136号住居址

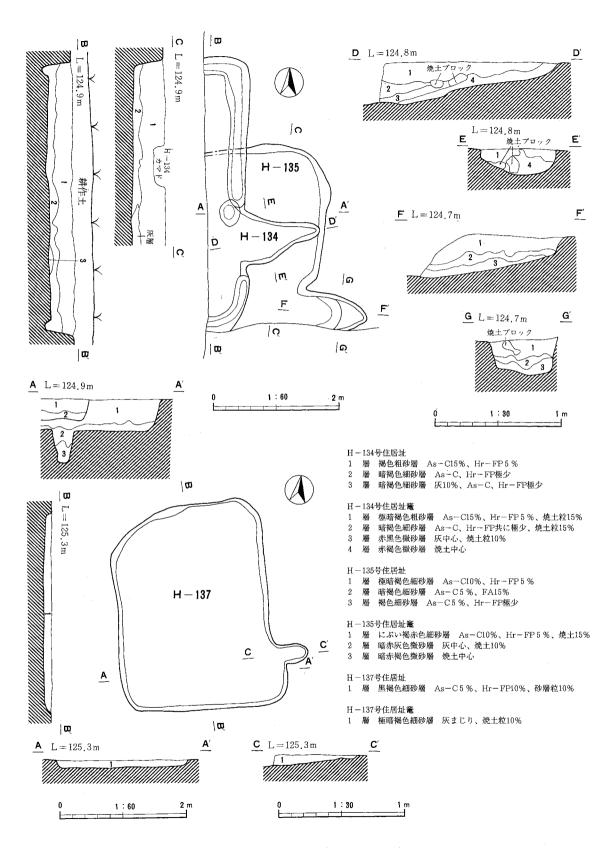


Fig. 20 H-134·135, 137号住居址

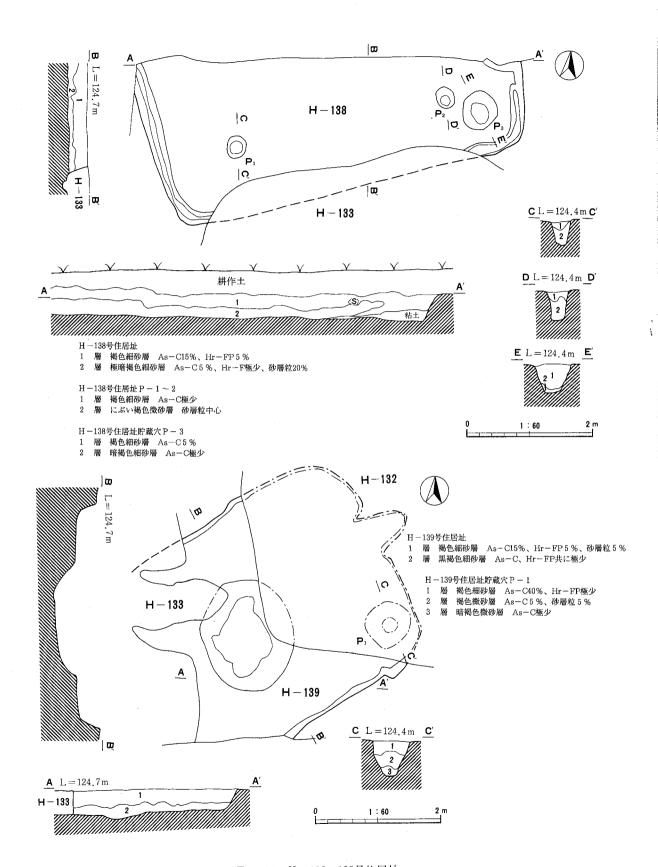


Fig. 21 H-138, 139号住居址

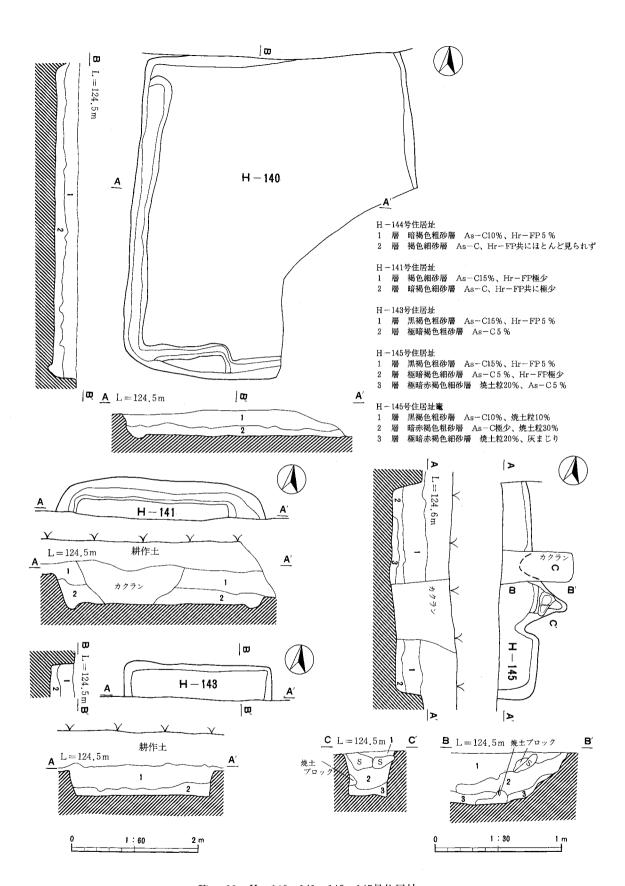


Fig. 22 H-140, 141, 143, 145号住居址

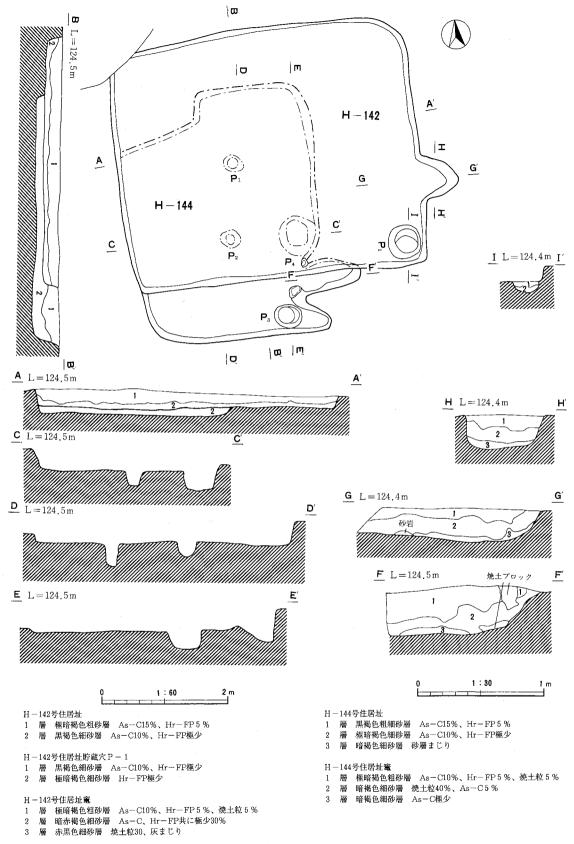


Fig. 23 H-142·144号住居址

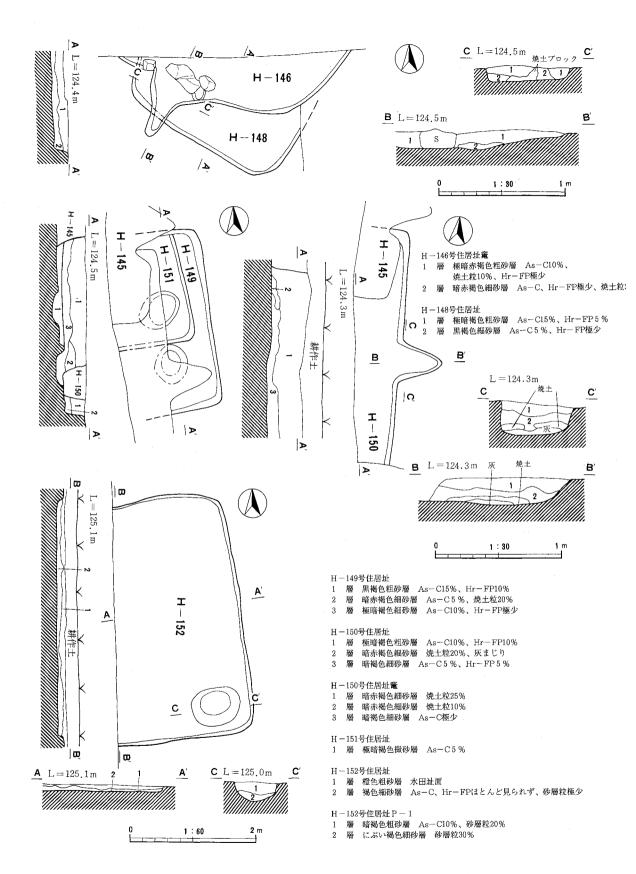


Fig. 24 H-146·148、149·151、150、152号住居址

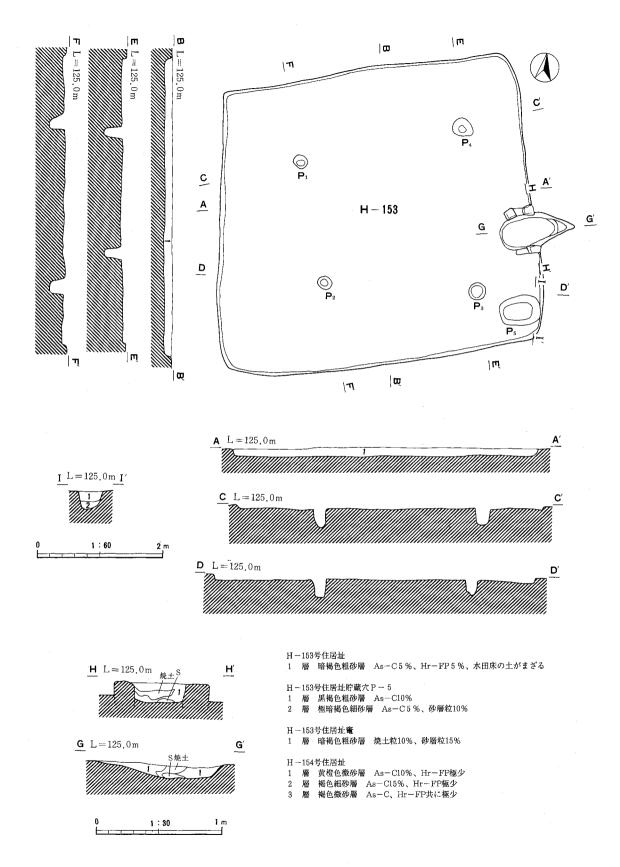


Fig. 25 H-153号住居址

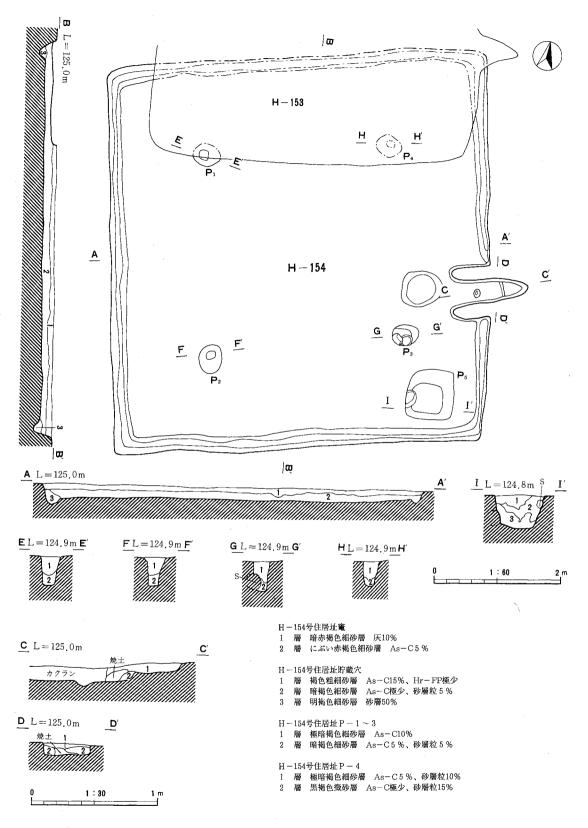


Fig. 26 H-154号住居址

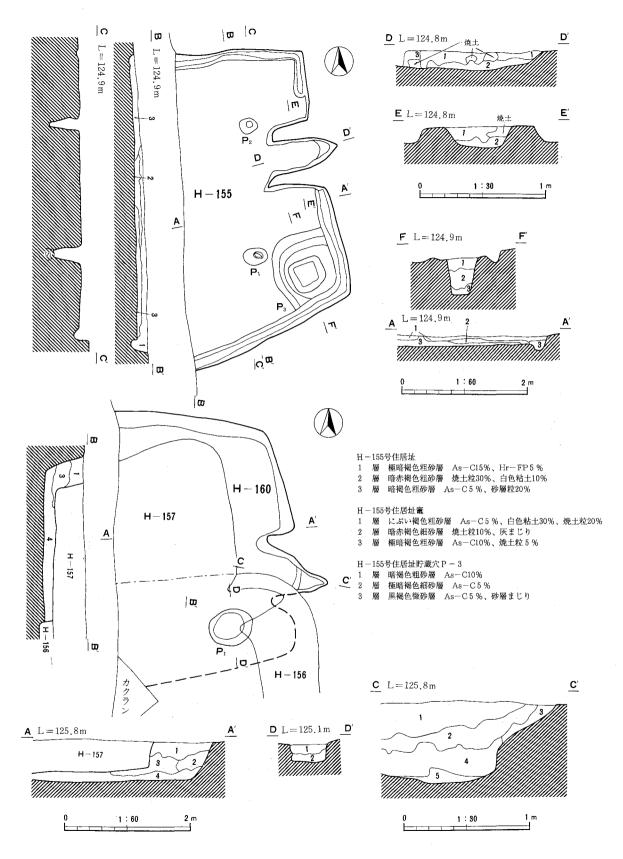
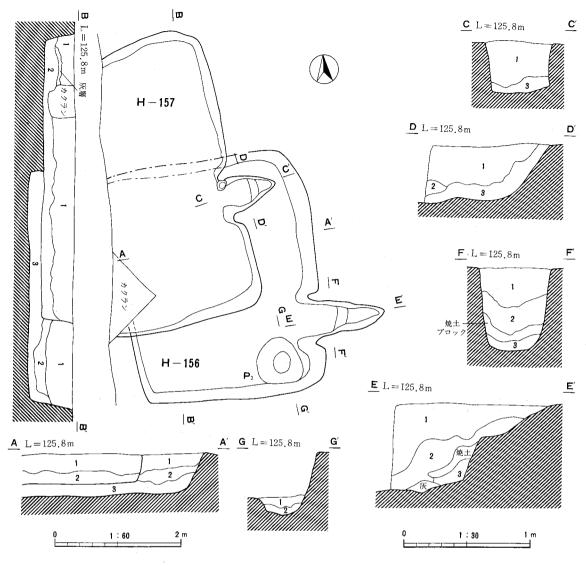


Fig. 27 H-155, 160号住居址



H-160号住居址

- 1 層 黒褐色粗砂層 As-C15%、Hr-FP10%
- 暗赤褐色粗砂層 As-C10%、Hr-FP極少
- 3 暗赤褐色粗砂層 As-C10%、Hr-FP極少
- 4 層 暗褐色細砂層 As-C10%、Hr-FP5%

H-160号住居址P-1

- 1 層 黄褐色細砂層 As-C、Hr-FP共にほとんど見られず
- 2 層 褐色細砂層 砂層粒20%

H-160号住居址竈

- 1
- 層 黒褐色粗砂層 As-C15%、Hr-FP10% 層 暗褐色粗砂層 焼土粒20%、As-C10%、Hr-FP極少 2
- 層 にぶい赤褐色細砂層 焼土中心、As-C極少
- 層 暗赤褐色細砂層 焼土粒30%、As-C5% 層 極暗赤褐色細砂層 焼土粒10%、灰まじり 4
- 5

H-156号住居址

- 1 層 褐色粗砂層 As-C30%、Hr-FP5%
- 層 暗褐色細砂層 As-C、Hr-FP共に極少、砂層粒5%
- 3 屠 褐色細砂層 As-C15%、Hr-FP5%

H-156号住居址貯蔵穴P-1

- 1 層·極暗褐色粗砂層 As-C10%、Hr-FP5%
- 層 黒褐色細砂層 As-C極少

H-156号住居址签

- 1 層 暗赤褐色細砂層 As-C20%、Hr-FP5%、焼土粒10%
- 2 層 黑褐色細砂層 As-C5%、Hr-FP極少、燒土粒極少
- 層 暗赤褐色細砂層 焼土粒30%、灰まじり 3

H-157号住居址

- 1 層 暗褐色細砂層 As-C25%、Hr-FP5%、赤土粒10%
- 2 層 黒褐色細砂層 As-C5%、Hr-FP極少

H-157号住居址

- 1 層 黒褐色粗砂層 As-C15%、Hr-FP10%
- 2 層 極暗褐色粗砂層 As-C5%

H-157号住居址電

- 1 層 極暗赤褐色粗砂層 焼土粒10%、As-C10%、Hr-FP5%、砂層粒5%
- 黒褐色粗砂層 灰まじり、焼土5%
- 3 層 暗赤褐色細砂層 焼土粒30%、As-C5%、Hr-FP極少

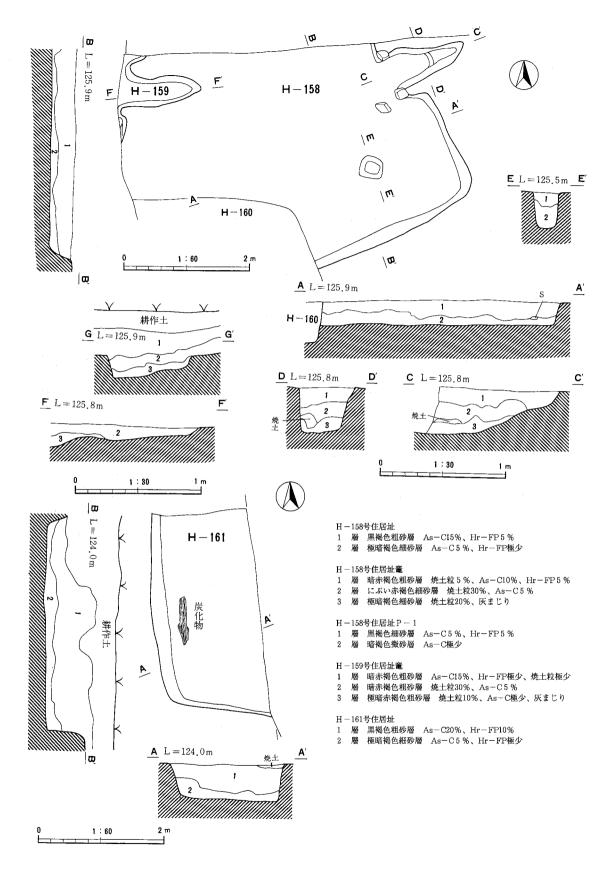


Fig. 29 H-158·159, 161号住居址

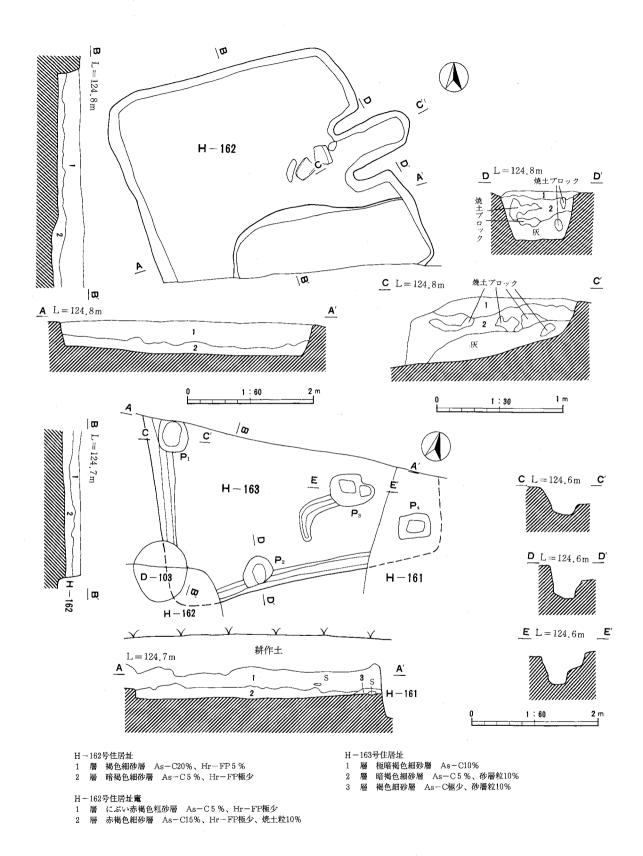


Fig. 30 H-162, 163号住居址

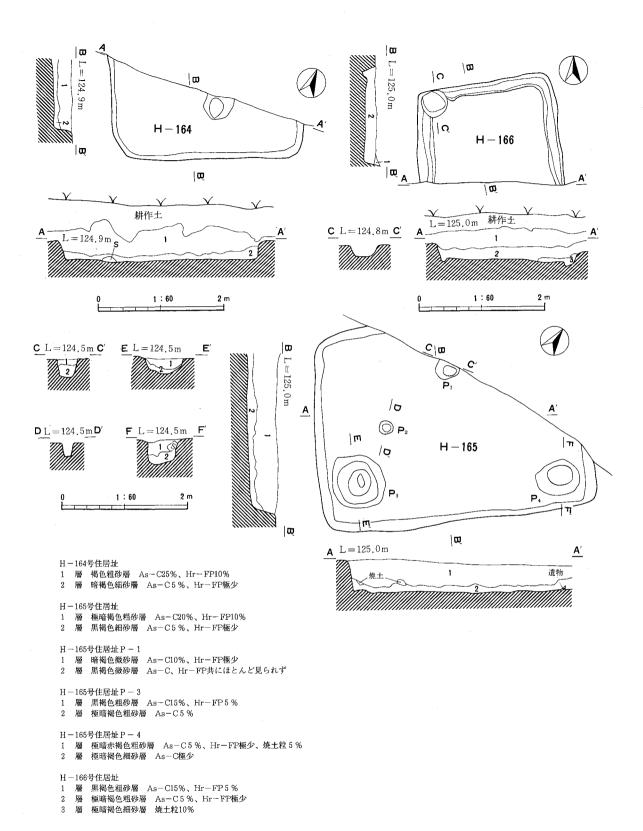


Fig. 31 H-164, 165, 166号住居址

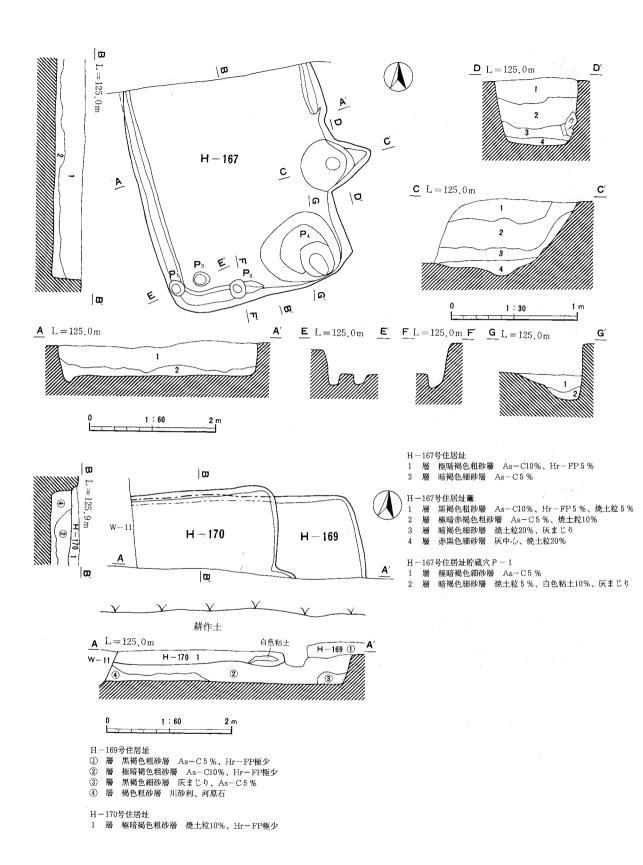


Fig. 32 H-167, 169·170号住居址

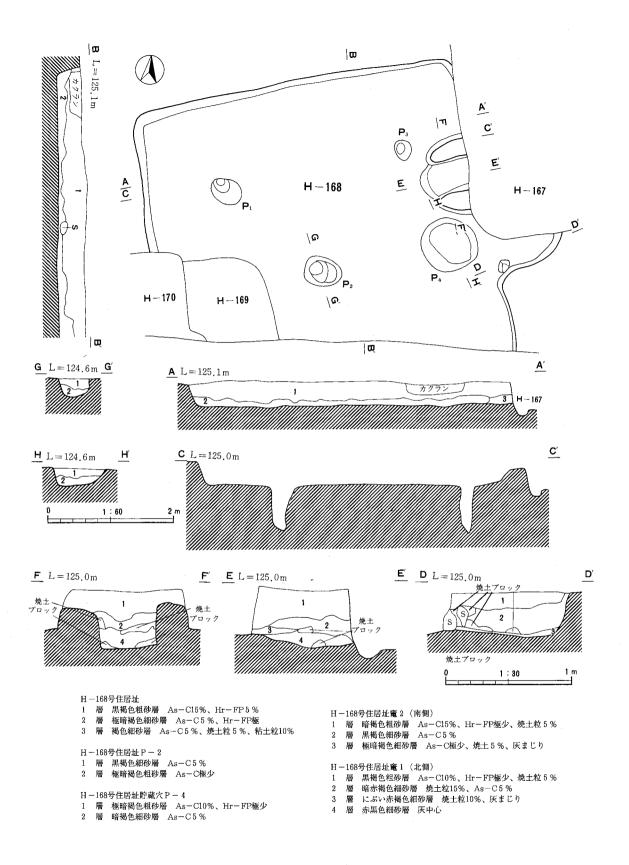


Fig. 33 H-168号住居址

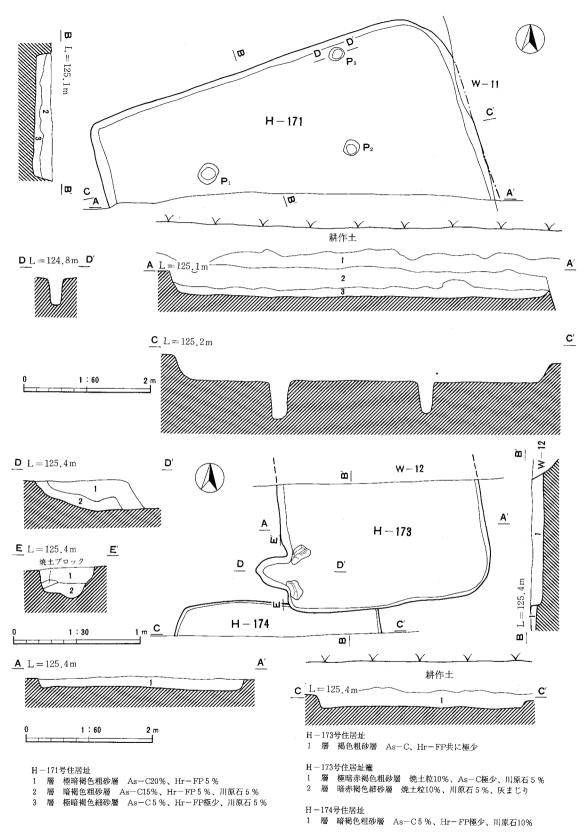


Fig. 34 H-171, 173·174号住居址

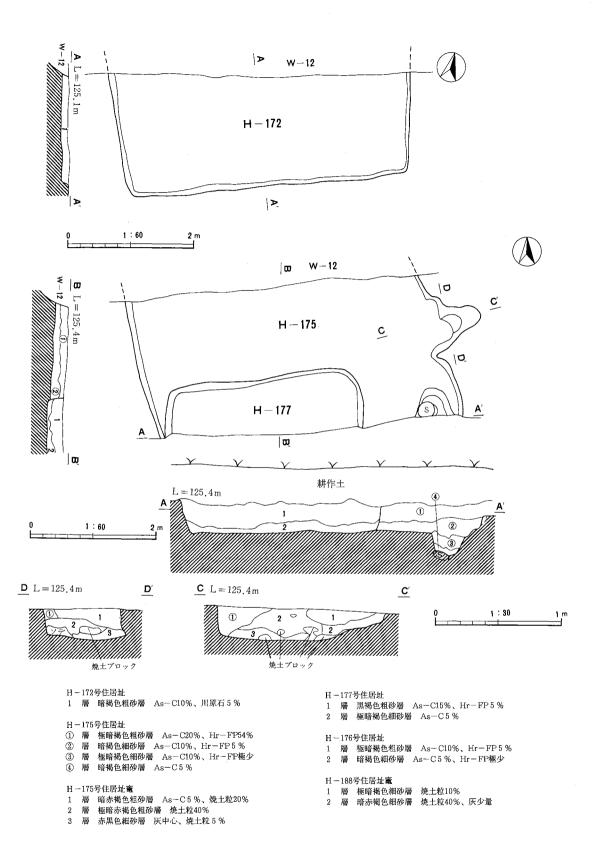
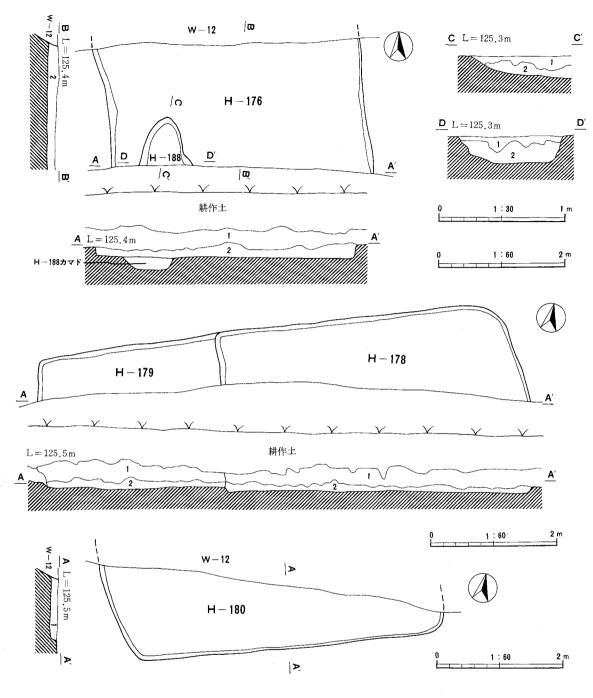
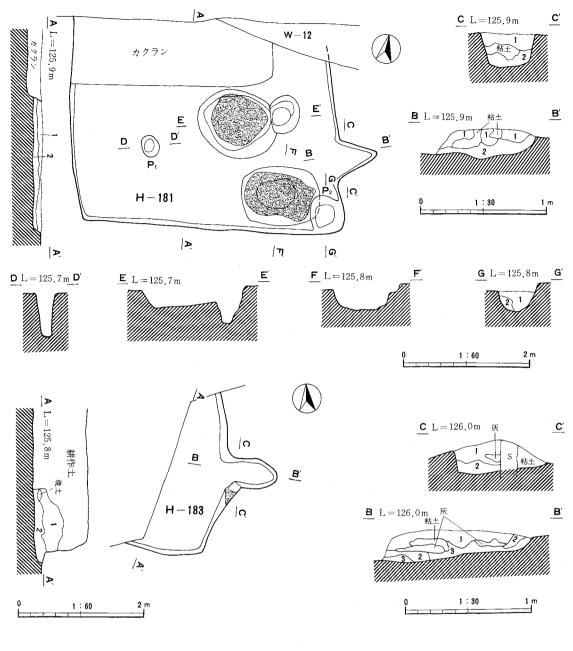


Fig. 35 H-172, 175·177号住居址



- H-178号住居址
- 層 極暗褐色粗砂層 As-C15%、Hr-FP5%
- 層 暗褐色細砂層 As-C5%、砂層粒20%
- H-179号住居址
- 1 層 黒褐色粗砂層 As-C20%、Hr-FP極少 2 層 暗褐色粗砂層 As-C5%、砂層粒15%
- H-180号住居址
- 1 層 極暗褐色粗砂層 As-C15%、Hr-FP5%

Fig. 36 H-176·188, 178·179号住居址



H-181号住居址

- 1 層 褐色粗砂層 As-C5%、Hr-FP極少 2 層 褐色細砂層 As-C、Hr-FP共に極少

H-181号住居址電

- 1 層 にぶい赤褐色細砂層 粘土粒20%、焼土粒10%
- 2 層 暗赤褐色細砂層 焼土粒20%、灰まじり、粘土粒極少

H-181号住居址

- 1 層 黒褐色粗砂層 As-C5% 2 層 褐色細砂層 As-C極少、砂層粒20%

H-183号住居址

- 1
 層
 黒褐色粗砂層
 As-C10%、Hr-FP5%

 2
 層
 極暗褐色粗砂層
 As-C5%、焼土粒10%

H-183号住居址竈

- 1 層 暗赤褐色細砂層 As-C5%、焼土粒10% 2 層 赤褐色細砂層 焼土中心、粘土粒5%
- 3 層 暗赤褐色細砂層 粘土粒 5%、焼土粒 5%

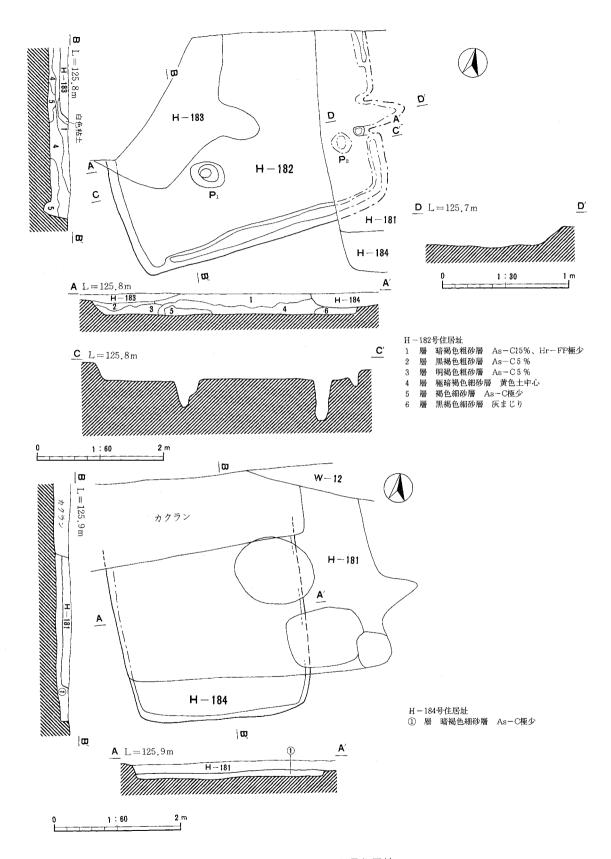


Fig. 38 H-182, 184号住居址

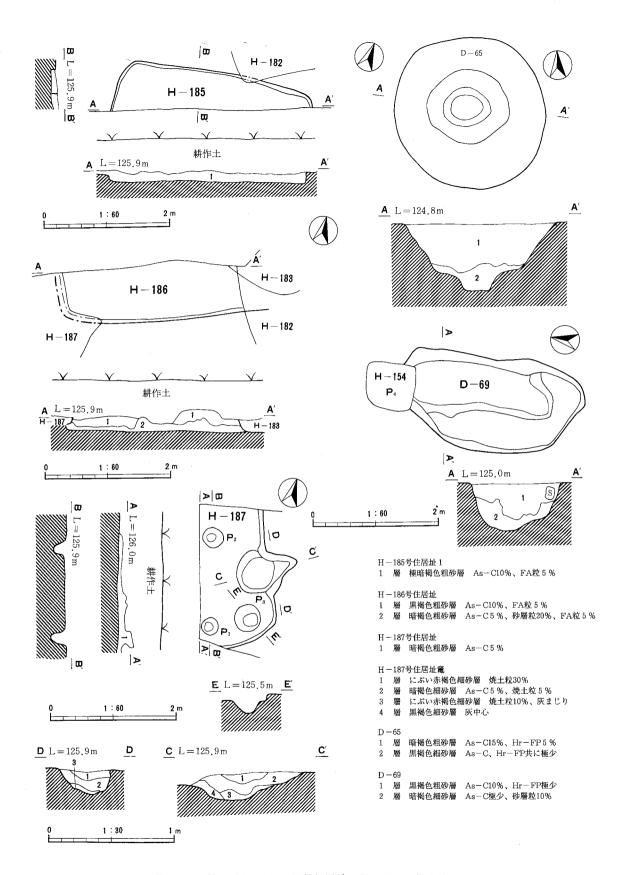


Fig. 39 H-185, 186, 187号住居址、D-65, 69号土坑

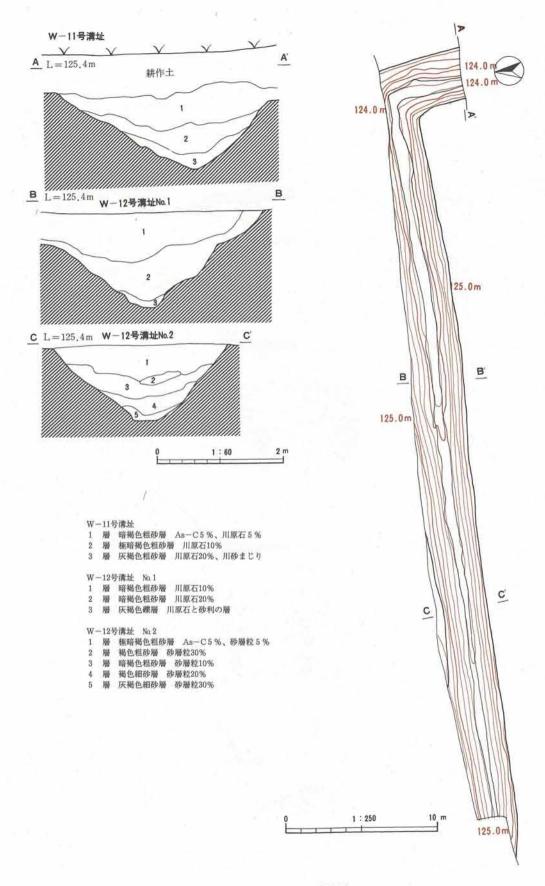


Fig. 40 W-11·12号溝址

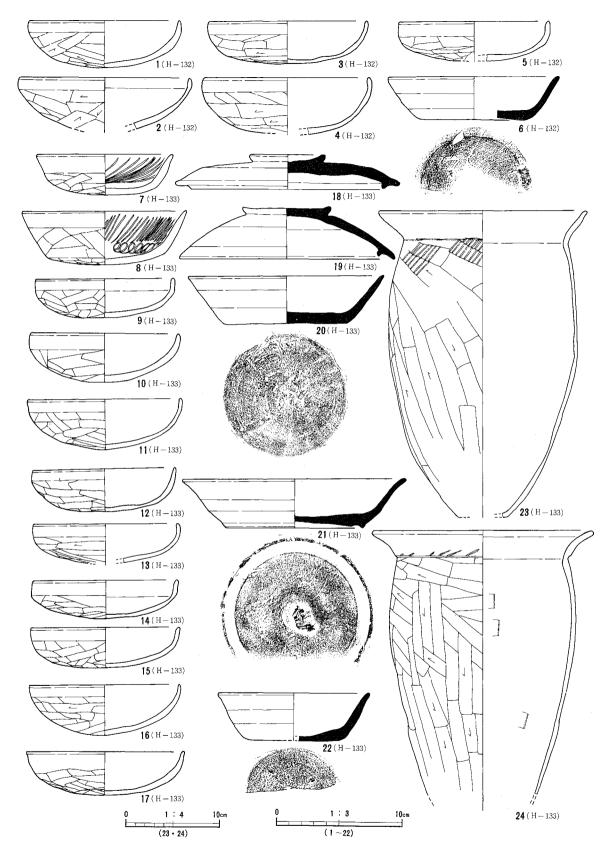


Fig. 41 H-132・133号住居址出土の土器

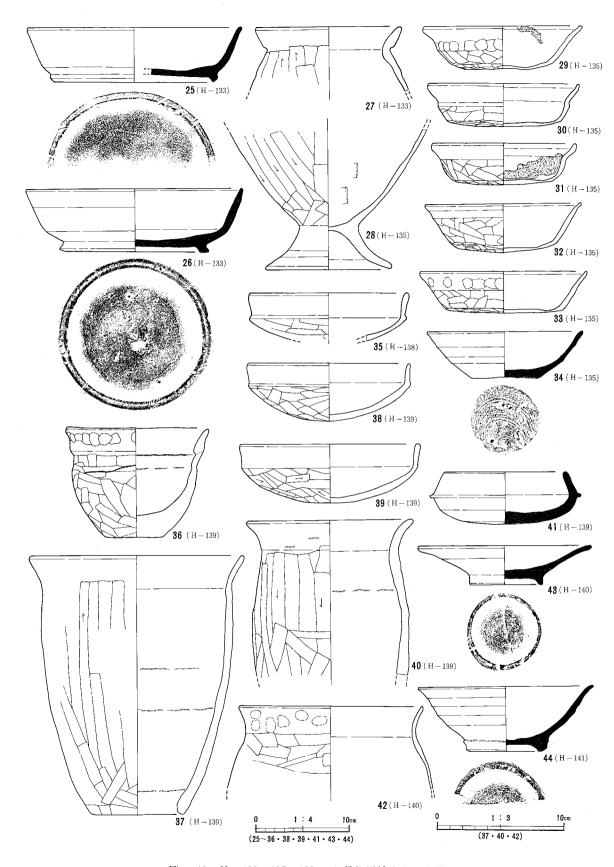


Fig. 42 H-133・135・138~141号住居址出土の土器

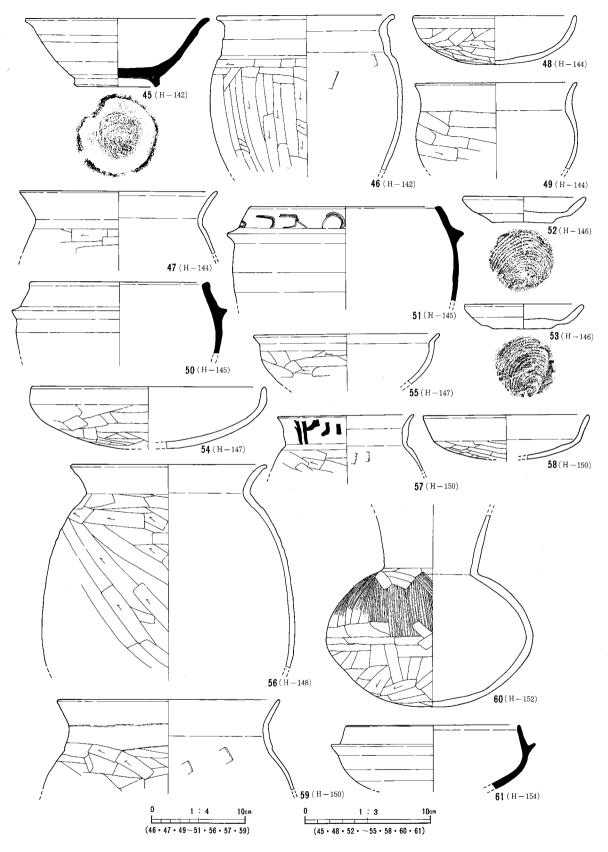


Fig. 43 H-142・144~148・150・152・154号住居址出土の土器

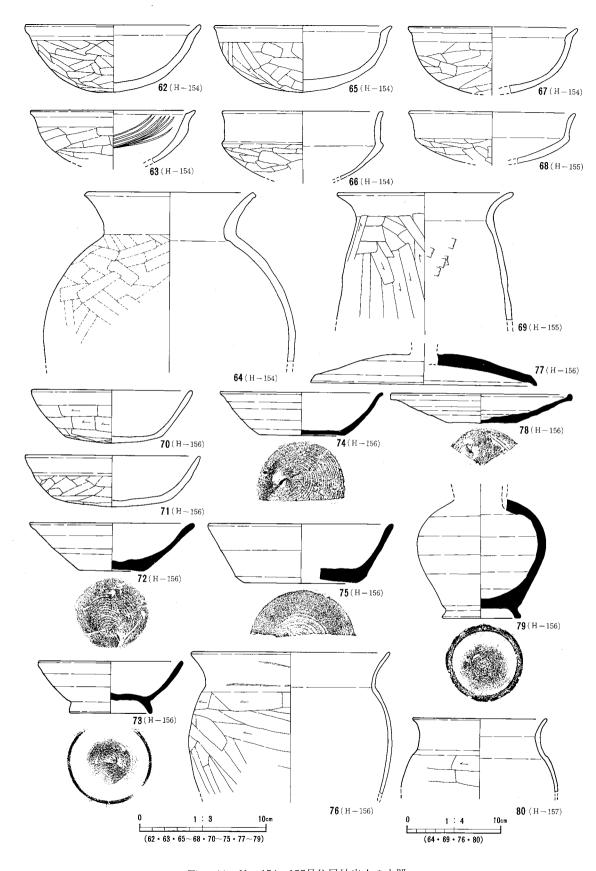


Fig. 44 H-154~157号住居址出土の土器

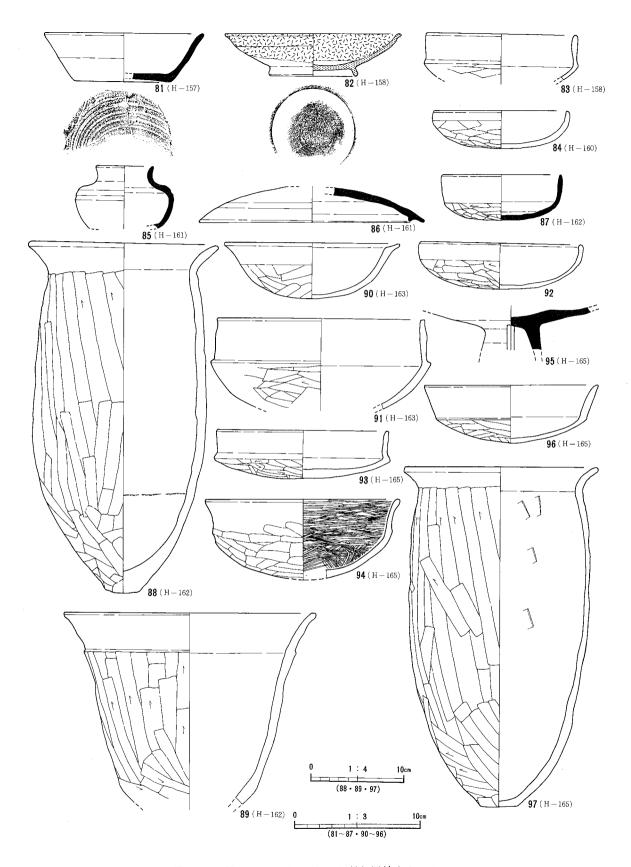


Fig. 45 H-157・158・160~165号住居址出土の土器

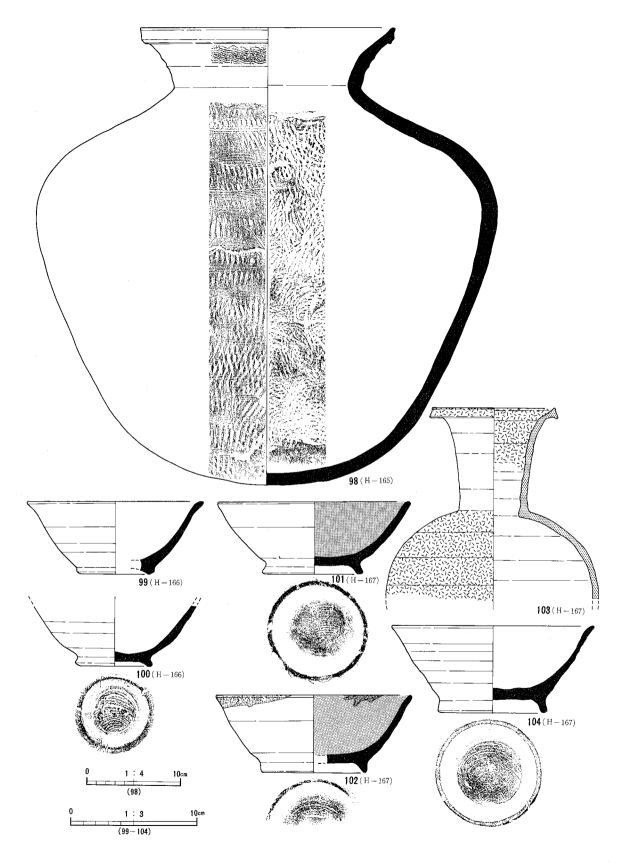


Fig. 46 H-165~167号住居址出土の土器

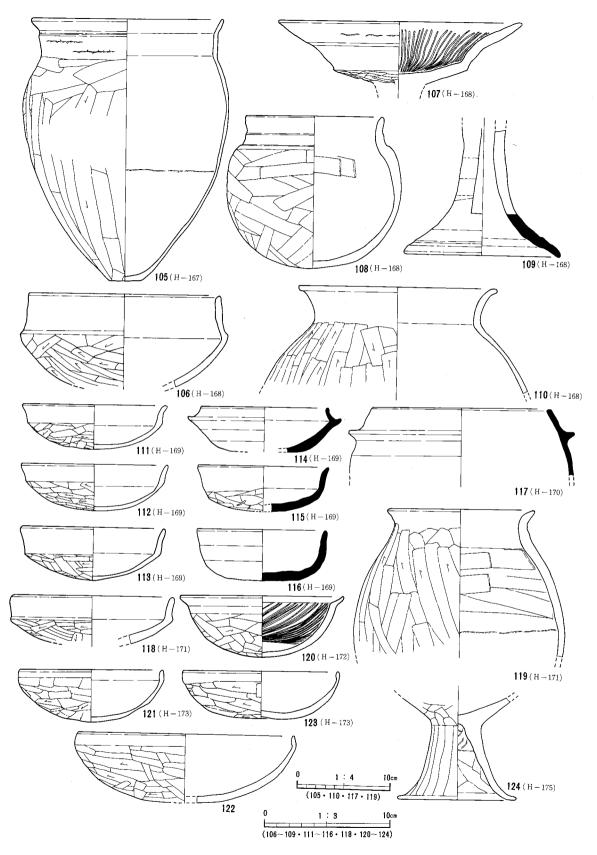


Fig. 47 H-167~173・175号住居址出土の土器

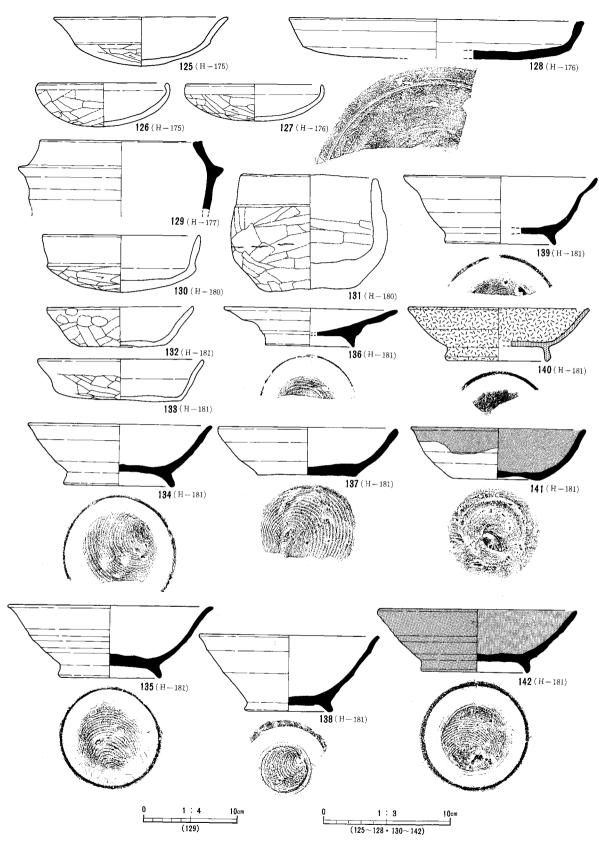


Fig. 48 H-175~177・180・181号住居址出土の土器

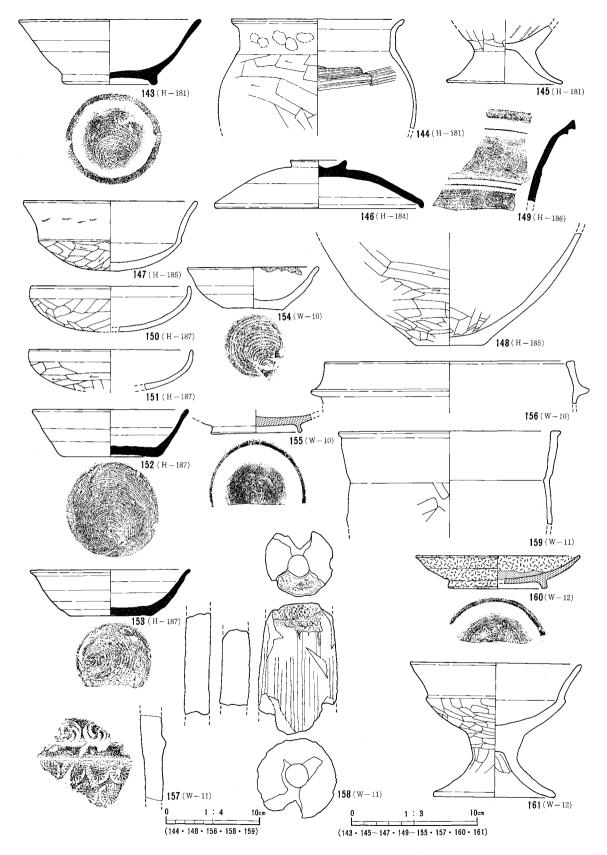


Fig. 49 H-181・184~187号住居址、W-10~12号溝址出土の土器

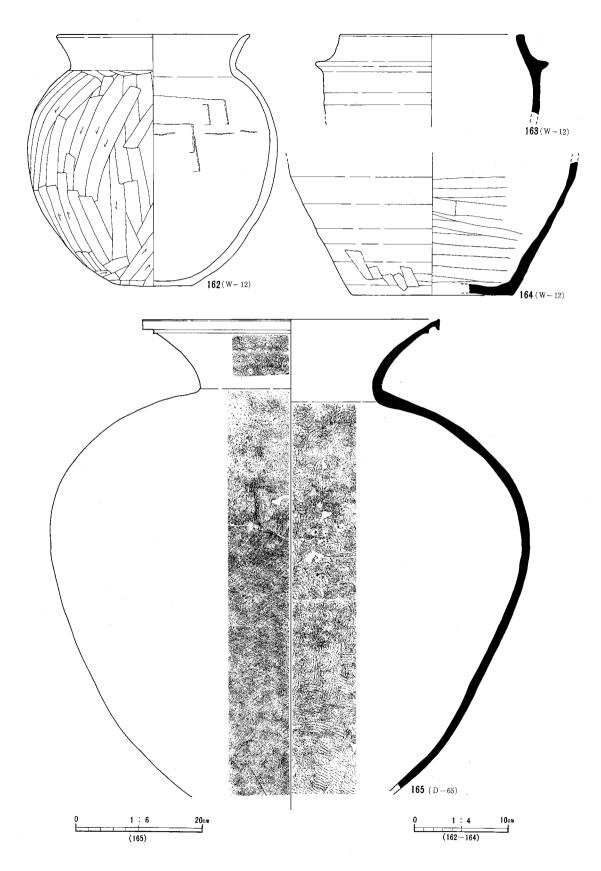


Fig. 50 W-12号溝址, D-65号土坑出土の土器

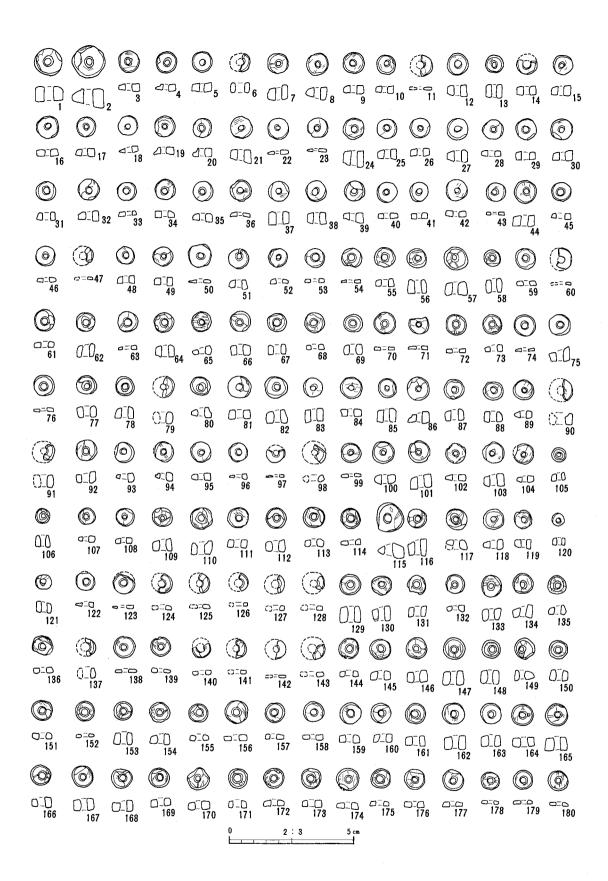


Fig. 51 臼玉(1)

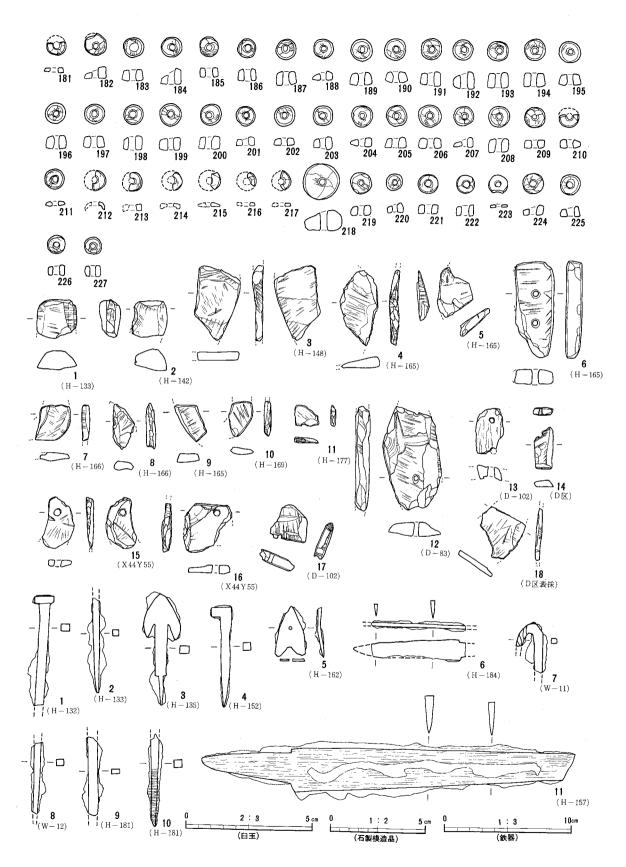


Fig. 52 臼玉(2)・石製模造品・鉄器

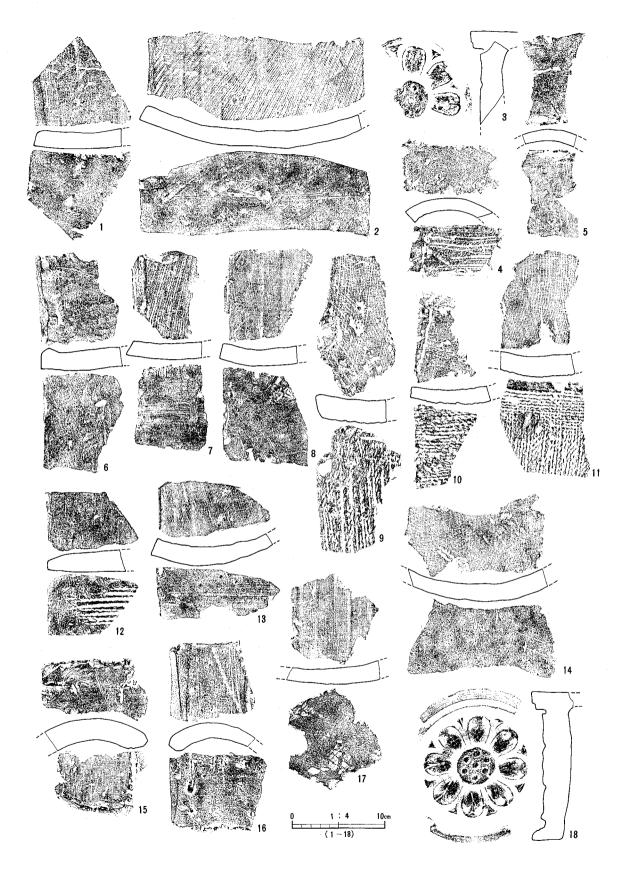


Fig. 53 瓦(1)

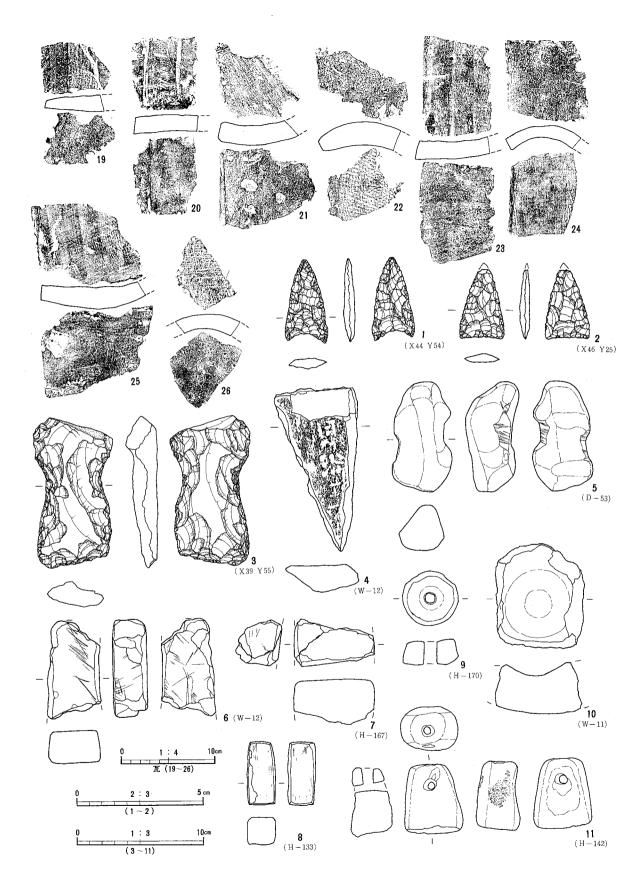


Fig. 54 瓦(2)、石器・石製品

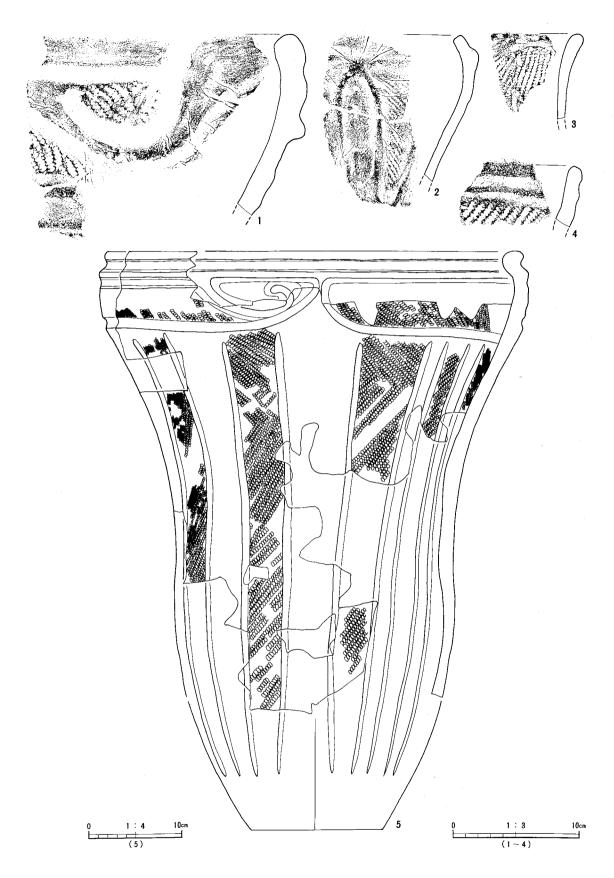
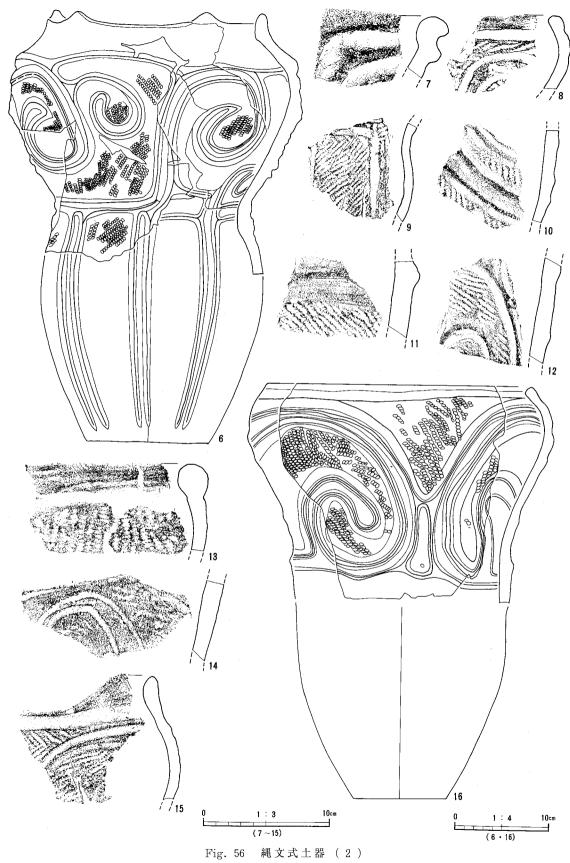


Fig. 55 縄文式土器 (1)



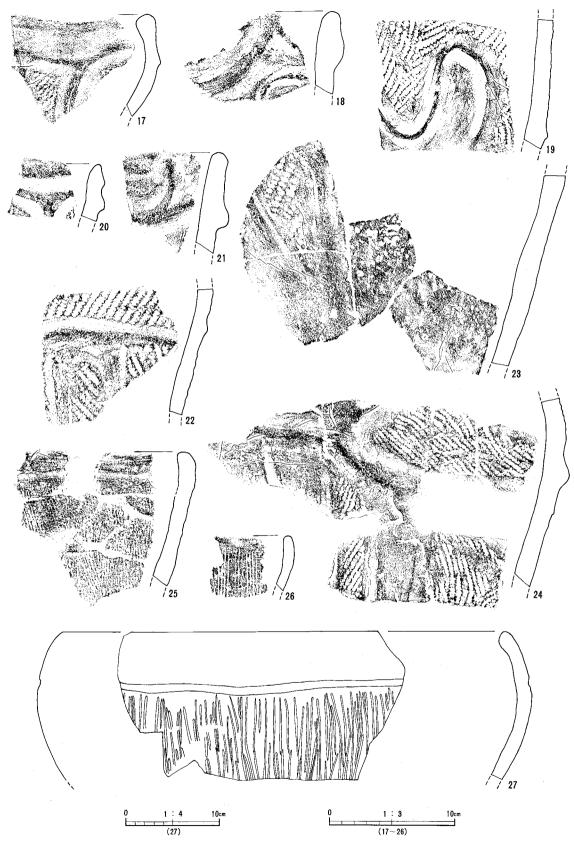


Fig. 57 縄文式土器 (3)



1. C区全景



2. 竈構築材採掘坑(南から)

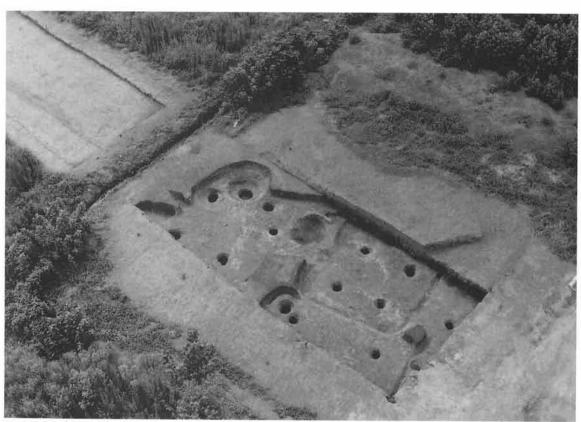
PL. 2



1. 竈構築材採掘坑 (西から)



2. W-10セクション (南から)



3. B区全景(北西から)



4. D区全景 (西から)



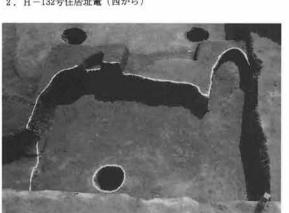
5. D区土坑群全景 (西から)



1. D区全景 (東から)



2. H-132号住居址竈 (西から)



4 . H-135号住居址 (西から)

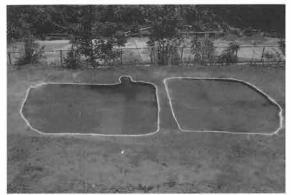


3. H-133号住居址(西から)



5. H-135号住居址遺物出土状態(南西から)

PL. 4



1. H-136・137号住居址 (西から)



2. H-138号住居址(南西から)



3. H-139号住居址(南西から)



4. H-139号住居址遺物出土状態(北西から)



5. H-139号住居址遺物出土状態(北東から)



6. H-142号住居址遺物出土状態(北から)



7. H-145号住居址(北西から)



8. H-146号住居址(北東から)



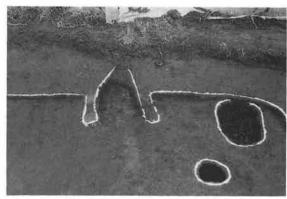
1. H-148号住居址遺物出土状態(南から)



2. H-155号住居址 (西から)



3. H-152号住居址遺物出土状態(東から)



4. H-153号住居址竈 (西から)



5. H-154号住居址 (西から)



6. H-150号住居址(南西から)



7. H-156号住居址 (西から)



8. H-156号住居址遺物出土状態(西から)

PL. 6



1. H-157号住居址 (西から)



2. H-157号住居址遺物出土状態(東から)



3. H-158号住居址 (南西から)



4. H-162号住居址 (南西から)



5. H-162号住居址遺物出土状態(北から)



6. H-162号住居址遺物出土状態(南西から)



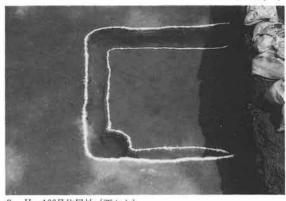
7. H-165号住居址(南西から)



8. H-165号住居址遺物出土状態(南西から)



1. H-165号住居址遺物出土状態(東から)



2. H-166号住居址 (西から)



3. H-167号住居址(北から)



4. H-167号住居址遺物出土状態(西から)



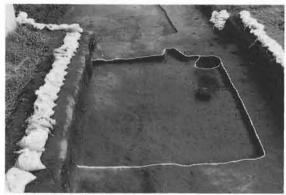
5. H-167・168・169号住居址 (西から)



1. H-173号住居址竈 (東から)



2. H-180号住居址遺物出土状態(西から)



3. H-181号住居址 (西から)



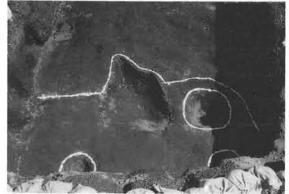
4, H-181号住居址遺物出土状態(南東から)



5. H-182号住居址 (西から)



6. H-183号住居址(西から)



7. H-187号住居址 (西から)



8. W-12号溝址(西から)



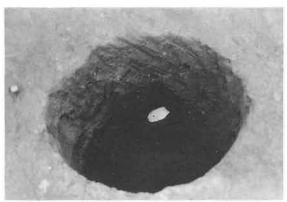
1. W-11・12号溝址(東から)



2. D-65号土坑 (南から)



2. D-65号土坑遺物出土状態 (東から)

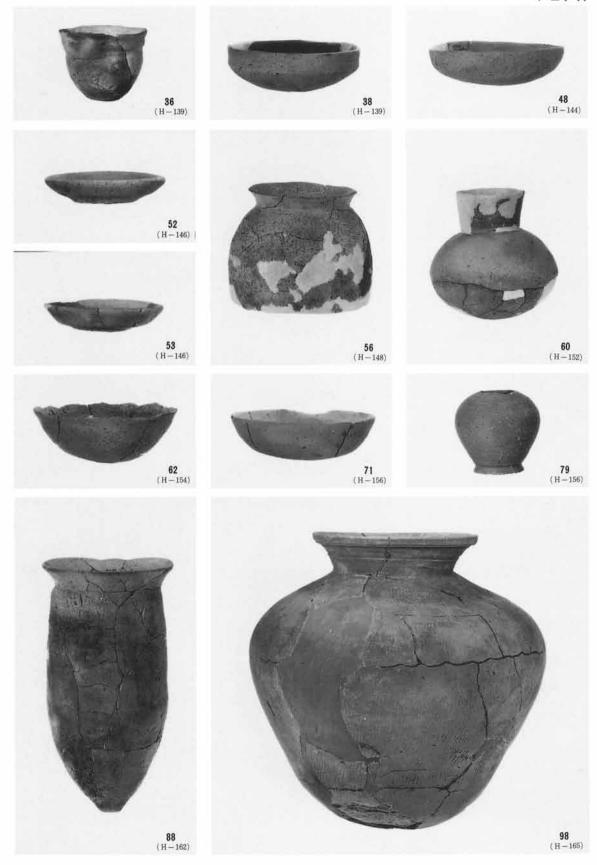


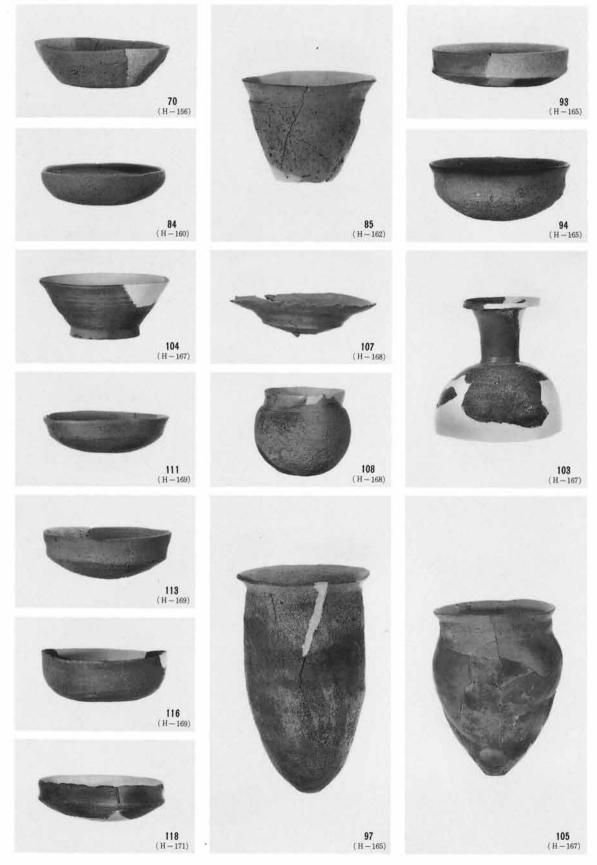
3. D-83号土坑遺物出土状態(南から)



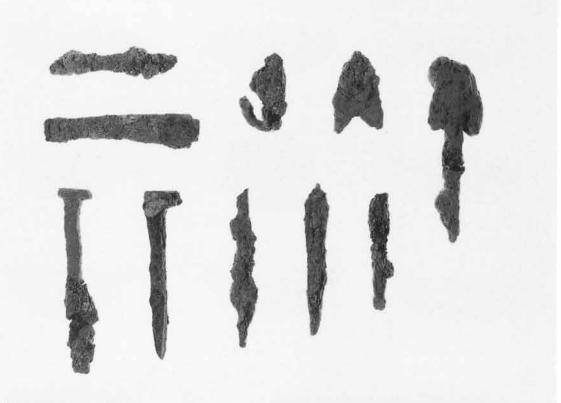
4. 発掘を終えて



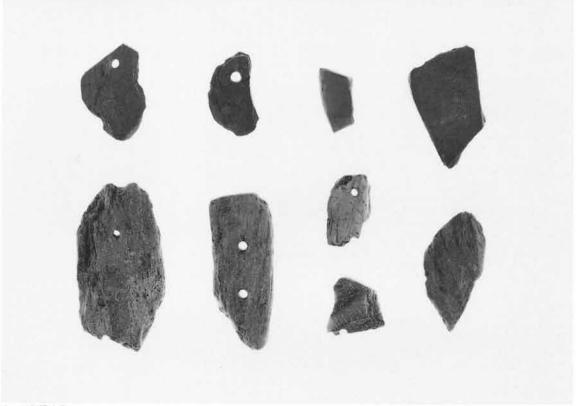








1. 鉄器



2. 石製模造品



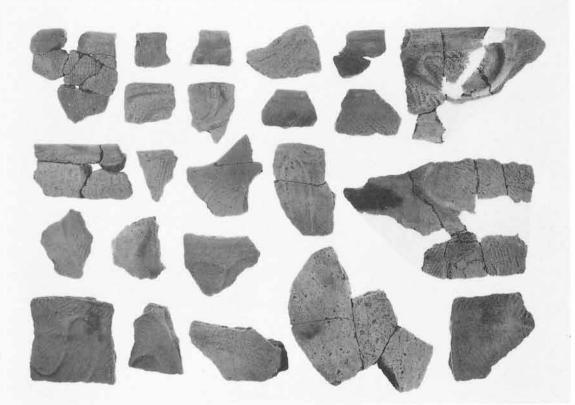




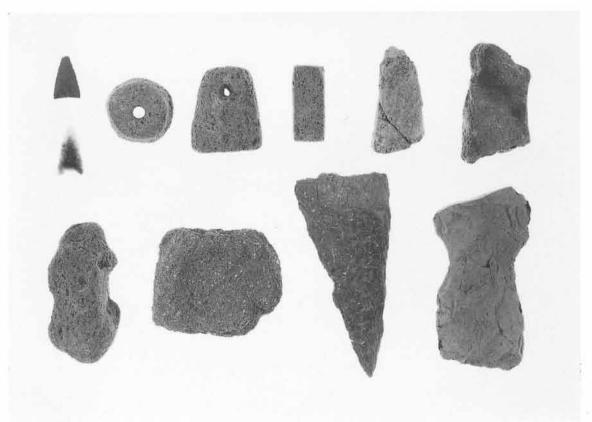








1. 縄文式土器



2. 石器·石製品

抄 録

フリガナ	オオヤシキイセキサン					
書名	大屋敷遺跡Ⅲ					
副 書 名						
巻 次						
シリーズ名	オオヤシキイセキ					
シリーズ番号	3					
編著者名	大山 知久 坂口 好孝					
編集機関	前橋市埋蔵文化財発掘調査団					
編集機関所在地 〒371 群馬県前橋市上泉町664-4						
発 行 年 月 日	西暦1995年3月24日					

フリガナ	フリガナ	⊐ - F		位	置	超太阳期	细木石钵	調査原因		
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因		
オオヤシキ	マエバシシソウジャマチ	10001	6 A 6 0	36°24′04″	139°02′23″	19940425	2,702 m ²	土地区画整理事業		
大屋敷遺跡Ⅲ	前橋市総社町	10201		36 24 04	139 02 23	19941031				

所収遺跡名	種 別	主な時代	主	な	遺	構		主	な	 遺	物
大屋敷遺跡Ⅲ 集落跡		縄文時代	縄文時代 竪穴式住居址57軒、				縄文式土器	、須	恵器	大土師器	
	外	~中世	溝址4条	、土	坑56	基外		石製模造品	、臼	玉、	鉄器等
特記事項	電構築	電構築材採掘坑 (W-9・10より検出)									
	須恵器大甕(土坑より出土)										
	堰 状 遺 構 (W-10)										
	中世の環濠 (W-11·12)										
	石製模法	告品・臼玉等	多数出土	の土	坑群						

大屋敷遺跡Ⅲ

平成7年3月17日 印 刷 平成7年3月24日 発 行

編集発行 前橋市埋蔵文化財発掘調査団

前橋市上泉町664-4 TEL 0272-31-9531

印 刷 株式会社 開文社印刷所